festa musicale

そうし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

festa musicale

【Ｎコード】

Ｎ７７１１Ｉ

【作者名】

そうし

【あらすじ】

神矢馨（かみや かおる）は、ちょっと音楽の天才な普通の大学生。

「音楽は趣味だ」と公言する彼は、大学入学直前に知り合った穂積（ほづみ）灯（あかり）と共に結局音楽にのめりこんでいく。

吹奏楽、ロック、パンク、その他あらゆるジャンルの垣根を越えた、超ドタバタお祭り騒ぎが、ここに始まる。

ｏｐｅｎｉｎｇ　ａｃｔ．（前書き）

前々から書いている長編小説です。
音楽ってなんだろう？というところから始まり、
音楽好きの人が集まるカフェと、音楽好きの人が集まる大学サークルを舞台に、
音楽好きの人の心を奮い立たせることができるような作品にしていきたいと思います。

ｏｐｅｎｉｎｇ　ａｃｔ．

朝起きてまずすることは、豆を挽くこと。
いや、間違ってないだろ？
朝のさわやかな空気に包まれながら味わい深いコーヒーを飲むことは、よい一日を過ごすための活力剤になる。
・・・なんて親父くさいんだ。
そんなわけで今日も今日とてギーコギーコと手を働かせる。これがオレの毎朝の習慣。
豆を取り出して挽く。いい香りが漂う。挽き終わった豆はプレスへ。ドリップよりもプレスで入れるほうが好みだ。
お湯の温度にもちゃんと気を使う。まずいコーヒーにしたくないから。

ちょっと時間を置く間に、顔を洗う。冷たい水が眠気を一気に吹き飛ばす。
そんなこんなで部屋に戻ってみるともうお湯もいい感じにコーヒー色に染まっているというサイクル。
プレスして粉を落とす。カップにコーヒーを移す。ここでやっとありつけるというわけだ。
この飲み方をはじめてからは、コーヒーの本来の味を知るためにも、ブラックで飲み干すようにしている。
今日もいい味を出している。でもちょっと豆が古くなってきたかな？

さて。

今日から冬休みか。

＊　＊　＊

オレは冬期講習なんて言う大学を目指す受験生なら結構当たり前のように通っているものに、実は行っていない。
なんでかと言うと、もう大学が決まっているから。
都内にある、K大ってところ。比較的有名な（って言うか超有名な？）ところで、大学の人気ランキングみたいなのがあると大体上位に乗るくらいのところだ。
なんでそんなところに既に決まっているかというと、オレの高校時代の戦績による。
高2のとき、全日本吹奏楽コンクール高校の部、全国大会金賞。その際部長かつ指揮者。
同じく高2のとき、全日本アンサンブルコンテスト高校の部、全国大会金賞。その際にも部長かつトランペット。
高3のとき、全日本吹奏楽コンクール高校の部、全国大会金賞。同じく部長かつ指揮者。
全てにおいて個人宛に審査員特別賞受賞。
正直、自分でも衝撃的な結果だったが、まぁそれはそれとして喜んで受け取ることにした。
でもって、それが高校2年の時からだったから、またさらに学校からも世間からも褒め称えられ。
当然のように芸術学部のある大学からこぞって推薦の話が来て。
まぁことごとく蹴って、自己推薦を使ってK大に進学したわけだ。
まぁ周りの人たちは「もったいない！」の一点張りだったけど。
吹奏楽なんて所詮趣味だったし、プロになって活躍する自分なんて想像できない。
まぁいいんだ、そんな昔のことは。ていうか文字稼ぎだし。

そんなこんなで冬期講習でみんなが頑張ってる中、オレは一人バイトに明け暮れていたりする。
選んだ大学のすぐそばにあるカフェ”空”。そこが今の働き口。
部活に明け暮れていた時からちょくちょく顔を出して、店員とも名前で気軽に呼び合う仲になったころ、店長からバイトの誘いがあった。それが１０月。
そのころにはもう大学は決まっていたので、２つ返事でＯＫ。
見せの内装はモダンな今風の良くある喫茶店。絵が飾ってあったりもする。
でも、一番の特徴はＣＤが置いてあるところ。
どういうことかというと、インディーズのバンドや、付近のライブハウスで活動しているバンドのデモＣＤを委託販売しているんだとか。
オレ個人としてはすばらしいシステムだと思う。やっぱりこういう風にしなきゃ、インディーズだったりデビューすらしていないバンドは世の中に出てくるのは難しいからな。

「いらっしゃいませー」
というわけで、今日もオレはコーヒーを美味く淹れることに命を懸ける。
この店はわかりにくい立地にあるがゆえ、コーヒーがホントに好きな人や、バンドマンくらいしか客がいない。
その分みんな味にうるさいので、淹れる側としては責任重大だ。
「あ、どうもお久しぶりです、元気してましたか？」
入ってきた客がよく来るバンドの人たちだったので、気さくに話しかける。ちなみに知り合ったのはバイトを始める前だ。
「ん～、ちょっと新曲が煮詰まってるかな。なぁ？」
「だな～、でもアレが完成したら結構なもんになると思うぜ？」
と、世間話をしながらカウンター席に座り、「ブレンド３つ」と

頼んでくるのもいつものこと。
ここの店はブレンド・・・つまり普通のドリップコーヒーと、エスプレッソ・・・短時間でコーヒーの良い部分だけを抽出した濃いものの2つしか出さない。
それで十分通の人には通じるのだとか。やはり店長はとんでもない才能の持ち主なのかもしれない。
「じゃぁ、出来たらCDにして持ってきてくださいよ、店でかけたいから」
「あぁ、出来たら一番にまずここにもってくるよ」
こんなことを話しながら30分ほど談笑して、彼らは帰っていった。
良い曲をたくさん作ってるバンドだから、有名になって欲しいって言うのがホントの気持ちだけど、有名になるとミーハーな輩どもがうるさいから、今のままでいて欲しいって言う気持ちもある。
そんな二律背反も彼らにとっては贅沢な悩みらしく、日々の生活で手一杯だとか。
まぁ、今の日本の音楽界はどうかしてるからな。なんでビジュアルだけであんなに売れるんだろうといつも考えてしまう。
あぁ、いらいらしてきた。精神的なのはすぐ味に出るから気をつけなきゃいけないのに。
自分で自分のコーヒーを淹れて少しクールダウン。やっぱりここで使ってる豆は美味い。
「うん、美味い」
「じゃないよ」
「うわっ」
後ろに店長。
「今の分は天引きねー」
「それは泣ける。勘弁してくださいよ」
いや、落ち着いて本来の味を取り戻すための試行錯誤なんだから業務の一部だ！

と、説得したのだが効果はゼロだった。

＊　＊　＊

そんなこんなで時間は過ぎていく。
まぁ暇人なのでいつもフルタイムで入ってる。
そんなことをしているとまぁ時間の感覚と言うものも薄れていくわけで。
今何時だからそろそろ帰る準備をしなきゃいけないとか、そういう意識も希薄になっていくのは目に見えて明らかです、はい。
今日も閉店の１０時直前までマッタリとお客さんと駄弁ってるオレ。
それを適当に流す店長。
いやいいのか、こんな軽い労働条件で時給９００円も貰って。
まぁいいんだろうな。時給決めてるの店長だし。

カラン・・・

「いらっしゃいませ～」
と、いつもどおりの応対をついつい取ってしまう。そこでやっと時間に気付く。あれ、もう１０時か。
「あのお客さん、スミマセン、もう閉店の時間なんですが」
「ドリップ」
・・・え？
「ドリップが飲みたい」
・・・あの？

「いや、閉店の時間なんでオーダーは出せないんですけども」
「閉店後に自分たちに入れるあれでもいいから飲みたいの」
中々に強情なお客様だ。チラッと店長の方を向く。
「・・・」
なんかメチャクチャ面白いジェスチャーをしてる。なにあれ。
「・・・わかりました、それでもいいんでしたら」
「ん、ありがと」
そこでやっとお客さんから笑顔がこぼれた。
中々にして端正な顔を持った女性客だ。ナンパな店員だったら口説きにかかるくらい、と言えば文章でも伝わるかな。
この店はバンドで頑張ってる女の子もたくさん来る。そういう子たちもとても輝いてるんだけど、そう言った輝きとはまた違ったモノを持ってる、そんな感じだ。
「はい、ドリップ。熱いから気をつけて」
「ん、ありがと」
さっきと同じセリフ。でもさっきよりも心がこもってる感じがする。
いつも不思議に思うのが、この黒い液体がいつも来る人の心を溶かし、暖め、すっかりほぐしてしまうこと。
なんでこの程度のものでここまでになるのか、と、いつも考えてしまう。
そう思ったから、僕もこの店を出したんだよ、と店長は言ってた。オレにはまだわからないけど、いつかわかる日が来るのかな。。。
「おいしい・・・」
「まぁ、オレが淹れてますから」
「・・・自信過剰」
口では毒を吐く彼女も、顔は微笑んでいる。ほら、溶かし暖めた。大成功だ。
「ご馳走様。美味しかったわ」
「いえいえ、こちらこそゆっくり味わっていただけて光栄ですよ」

レジを開けながらの会話。これもこの店ならではのシーン。何をするにしてもゆっくりとした時が流れるのだ。
流れる音楽は、時にジャズ、時にロック、時にどこぞの民謡、いつもとめどなく全く関係のないものがチョイスされるのに、流れる雰囲気は全然変わらない。
店作りが巧いと言えばそれまでかもしれない。でもそれ以上に、なにか根本的なところでこの店は違うんじゃないかとも思う。
「名前聞いても良い？」
そう聞かれる。この店で働いている以上、こういったことは珍しくない。
「神矢馨」
「・・・そう。良い名前。いつもこの店で？」
「まぁ大抵は」
「じゃぁ、私が来たときはあなたに淹れてもらう」
・・・と、こんなことも珍しくはない。オレが淹れるコーヒーは、やけに人気が高い。コーヒーの持つ”香り”を引き出すことに全神経を注いでることも功を奏してるのかもしれないけど、それでも味の方はまだまだなのに。
まぁそれでも、うれしい申し出に変わりはない。
「それはありがたいです。次も是非オレが」
「うん、よろしく」
そう言ってうれしそうに微笑んで、彼女は去っていった。
・・・結局名前聞きそびれたし。話し損か。
でも、今日はなんだかいい日だったな。
「そうだね。さて片付けようか。もう閉店時間はとっくに過ぎてるよ」
「・・・店長、良い所で思いっきり場を壊しましたね」
「何の話かな？僕にはわからないよ」
「・・・」

＊＊＊

それから、彼女は毎日のように夜の9時ごろになってふらりと店にやってくるようになった。
といっても、俺が入っていない日は来ても、
「そう、今日はいないんだ」
と言って帰ってしまうらしいが。
店長が、「この店って僕の店だよね・・・」と嘆いていたのが妙に面白かった。
それから彼女はいつもブレンドを一杯頼んで、それをゆっくり時間をかけて最後まで飲み干し、レジでちょっと世間話をして帰っていくという日々を過ごした。
もちろんそれが悪いなんて考えてないし、むしろ店側としては注文して行って、かつお金を落として行ってくれるのだからありがたいことこの上ない。
オレが考えているのは、彼女の持つ空気。雰囲気というか、なんだろうな、口に出しにくい感情。
そういうものが、普通の人のものとはちょっと違って感じられて。
その点で、ちょっと惹かれてる。
友達になれたら、きっと楽しいだろうな、とも思うし、友達になりたいとも思う。
カラン・・・
どうやら今日もおいでなすった様子。時間は午後9時。いつもどおり。
「いらっしゃい」
「うん」

そしてカウンターの端っこの席――完全に指定席化してる――に座る。
「今日も？」
「もちろん」
そんな他愛のない会話にも、最近はちょっと最初の頃にはない暖かいものを感じるようになってきた。
これもこの店の生み出す力。見知らぬ人ともすぐに仲良く慣れるこの空気。それが、”仲間”を求めている音楽をやる人間たちをひきつける理由とも言える。

「え、じゃぁまだ高校生なんだ」
「正確には春から大学生。だから今高３」
「じゃぁオレと一緒じゃん」
今初めて知った驚愕の新事実。なんと、彼女とオレは同じ年だった！
しかも、どうやら進学先も同じＫ大学らしい。いや、偶然ってスゴイね☆
・・・いやいや。そんな話をしていたわけではなく。
「そっか。入学前に友達が出来て良かった。ほら、色々不安じゃない？新入生って何かと」
「あぁ、そうかも知れないな～。結構色んな人がいたりするらしいからな。友達と一緒にいれば絡まれたりとかなさそうだし」
まぁ、こんな感じの話。どれだけ体面を取り繕っても、所詮まだ１８歳の少年少女ということ。不安なものは不安なのだ。
学部も一緒と言うことで、大学に入る前からそんな友人が出来るのは非常に心強いと言うのが総意だ。
「いやぁ、良かったね～。こんな身近に同じところに行く人がいてさ～」

と彼女は言う。
話してみてわかったのは、かなり自由奔放で明るい性格をしていること。まぁ高校生の分際で夜１０時まで店に居座る時点で相当に自由に生きてるのは明らかだけど。
あとは、あまり後先のことは考えない。今を生きるスタンスがその性格をより強めてる。
まぁ、オレと似てるかな、っていう感じだ。
「さて、もう閉店だから、そろそろ店を出ようぜ～」
「ん～、わかった」
と言って、素直に席を立つ。最初の頃はそれすら大変だったさ。なにしろ全く立ってくれないんだから。
「じゃ、また今度」
「おう」

そして、気がつけば卒業式。もう高校も卒業するのかと思うと、別に感慨深くなるわけもないけど。
それでも親しかった友人との必然的な別れは寂しいものを感じるところもある。
ぶっちゃけていってしまえば高校はつまらなかった。唯一楽しかったのは、部活。それは断言できる。
才能があったとかじゃないし、友人に恵まれたと言うわけでもない。それはちょっと寂しいけど。
一番のめり込めた、というのが大きい。
朝から晩まで良く飽きずに練習に集中できたものだと、いまさらながら自分の集中力にはビックリする。
と、そんなことを考えていたら自然と卒業式も終わっていた。

卒業式の後は軽く担任だったセンセーから話があって、卒業証書を貰って解散。友達が多いやつはそこで周りの人と話をしたりしているのだけど、察しの通り友人の少ないオレは即座に帰る。
ちなみに部活の方の引継ぎやらキックアウトやらは全て終了している。
で、どこに行くかと言えば、もちろん空しかない。
飲みに？
いやいや、働きに。
間違っても苦学生じゃない。なにしろスカラシップ生だし。入学金しか払ってないし、オレ。
ただ、なんとなく居づらいだけ。いまさらそんなところに行って何になる、と言う考えが先に来てしまう。
そんなわけで働くと言う選択肢が卒業式当日にも頭の中にダントツ1位で浮かんでいるオレ。すでに納税者並に給料頂いてます。
「まぁ、そんな高校生がいてもいいじゃないか」
という独り言。周りから見られた。恥ずかしいなコンチクショー。
そんなことを考えている間に気付いたら既に店の前に着いている。やっぱり比較的好条件だよな、ここでバイトするのは。
ドアを開けて、まっすぐに進むとカウンターと、その奥にキッチン、最奥にオフィスと言う配置になっている。
まっすぐまっすぐ進んでオフィスに入る。そこで従業員は着替えたり休んだり色々するのだ。
「ちゃーす」
と、（実は開店前なので全員揃っている）所に入っていって挨拶する。
「ホントに来ちゃったよ・・・。良いの？今日卒業式だったのに」
「まぁ、つるむやつも居ないんで。ひょっとしてオレは必要ない的な雰囲気ですか？」
「いやまぁ、ホントに来るとは思ってなかったからね？」
いやまぁ、だいぶテキトーなオフィスですね、ここ。

と、声を大にして言いたい。
なら先に言えよ。
「ん～、じゃぁ店内でマッタリしてようかな。店長のおごりで」
「ちょっとまったなんか不穏当な声がきこえたね今これって店長いじめにならないのかな」
なるわけないだろうが。
「いや、普通に自分の金で飲みますよ。そのくらいは持ち合わせてます」
というか、実はここで稼ぎ出したお金は実は１円も引き出してない。なので、銀行口座には４６万円ほどの残高があったりする。給料分だけで。
「ならいいんだけどね」
結局、自分の金で飲む事になった。まぁ、その価値は十分にあるわけだけど。

まぁついでに言うなら、ここからが本当のオレの人生のスタートライン。
高校の卒業って言うのはとっても大きいイベントだったみたいだ。
さて、そろそろその運命の時を運んできてくれる女の子が来る・・・はず。

act 1 ― 1（前書き）

ついに大学生活が始まります。
この章では、馨と灯の仲について書こうかと。もちろん、馨と灯の音楽家としての才能もゴリゴリ描いていきます。
新しい人物が多数登場するのは、入学とかそういうのではよくある話ですよね。覚えなくて良いので、なんとなく「あーこんな人いたなー」くらいで大丈夫です。
忘れたくても忘れられないような濃い人たちばかりですので。。。

act 1 ― 1

入学式も無事終わり、なんとかマトモに大学生できるようになって来たかなと思う今日この頃。
大学の近くにあるカフェ”空”に通い始めてから、早三ヶ月。かなりのハイペースで通ってる気もするけど、仕方ない。
あそこで働いている同い年の店員――馨が淹れてくれるコーヒーが、ホントにおいしいから。　仕方ない。　うん。
そんなことを考えながら、お気に入りの服に身を通す。
今日から一週間、大学のオリエンテーション期間。その間にサークル勧誘やら、講義説明やら、いろいろなことがあるらしい。
期待と不安で一杯なのが当たり前の、大学1年生。
のはずが、心はかなり落ち着いている。
やっぱり、入学前に友達が居るって言うのは大きいのかな。
「んじゃ、行きますか～」
気合を入れる感じに独り言をつぶやいてみる。ちょっと元気が出た。

大学が決まってからすぐに部屋探しをした甲斐があって、大学から近くてそれなりに広くてかつそれなりの値段と言う、相当に好条件の部屋を探し当てることが出来た。
まぁ、予約と言う意味で一月から家賃を振り込んでいるのがちょっともったいなかったかな、とも思うけど。でもそれに見合う部屋だ。
学校まで徒歩十分にして、最寄駅まで徒歩5分。最高の条件。
4月頭ってだけあって、朝はまだちょっと冷えるけど、それでも軽快に自転車で風を切る。

小さい頃から伸ばしてる髪は、そろそろ先っぽが腰に届くかな、って言うくらいまで伸びて、風になびいてる。
…いいねぇ、なんか大学生だねぇ。と含み笑いしてしまう。
わたしの周りで歩いてる人たちは、みんな同じ大学の人なのかな？
今通ってる道はちょうど駅と大学との間を結ぶ道になってて、春は桜が満開になって人々を迎え入れる桜並木。
四月に入るともう少し散りだして、青色が点々と見えてきちゃうのが残念だけど、それでもまだピンク色の花びらがはらはらとまい散ってる。
とても、キレイ。
この街は、本当にキレイだ。

「…ん？」
前を歩く学生。とは言っても一年生に見える。
よく見ると、わたしも良く知っている彼だ。
「おーい、かーおーるー！」
そう、神矢馨。入学前に知り合った、同級生。お気に入りのカフェでバイトしてる人だ。
「ん？あぁ、灯か」
と、振り向いてから馨は言った。目の前に来てブレーキをかけると、ひらりと音がする感じの軽やかさで地面に降りる。
「あら、あぁとかご挨拶ね～。せっかくオリエンテーション前に見つけたから一緒に行こうと思ったのに～」
「あぁ、悪い悪い、朝だからちょっとテンションが…」
「その低血圧、どうにかした方がいいわよ？どうせコーヒーで覚ましてるんだろうけど」
「む、そんなことはないぞ。コーヒーを入れるのは顔を洗ってさっぱりしたあとだからな」
「飲んでるじゃない、同じよ」
まぁ、他愛のないやり取りだ。二ヶ月くらい前からずっと続いて

いる、本当に他愛のない。

灯とつるむようになってから二ヵ月が過ぎている。もう二ヶ月だ。
お互いのことを認知したのは正確には三ヶ月前のことだけど、その頃はまだ店員と客という関係から大きく外れることのない、いたってシンプルな関係だった。
映画とかテレビドラマみたいなドラマティックなきっかけなんてなかった。ただ、自然と心と心が近づいていくような、そんな感覚で。
間を取り持っていたのが俺の入れるコーヒーだったって言うのが誇るべきポイントだけど。
「というわけで、わが学部は一定の学問を追及するというよりは、えー個々人の進む道にあわせた総合的な研究プログラムを…」
「…」
「具体的には必修科目の撤廃や、…」
「……」
「なんちゃらかんちゃら…」
「うん、出る」
「え、ちょっと一応最後まで聞かなきゃダメよ」
はっきり言おう、最初の一分で俺は飽きた。
というよりも、受験前から既に知っている話をもう一度聞かされても、ただつまらないだけでなく時間の無駄だ。
「じゃぁ、一緒に出ようぜ灯」
「え…？」
話は続いてる。というよりもとどまるところを知らないかのようにガンガン続いてる。ノンストップ暴走機関口。
「…まぁ、いいかな…？」
「よし決まり。荷物まとめよう」

そう言って俺は椅子の下に置いておいたショルダーバッグを肩に掛け、灯を促した。

外に一歩踏み出すと、新入生と思われる姿はなく、サークル勧誘のための出待ちをする上級生ばかりだった。
「あ、そこの君新入生？うちのロッ研興味ないかな～」
「ねぇねぇちょっとでもいいから話聞いていかない？」
「応援団入部希望者を募ってまーす」
ほとほとうんざりである。つか何回同じチラシを渡したら気が済むんだろうか。
それに、探してるサークルがある。そこを見つけてそこに入ることが、まず大学生活で一番最初にすべきことなんだ。
「あのー、Ｗｉｎｄ　Ｅｎｓｅｍｂｌｅ　Ｋって言う吹奏楽のサークルがあると思うんですけど、知りません？」
まぁ答えてくれるとは到底思えなかったけど、一応聞いてみた。
「あ～、知ってるよ！まぁ立ち話もなんだから…」
「ありがとうございます」
「え、良いの？」
「めんどくさい」
だって、この人たちのサークルの部屋に連れて行かれるじゃないか。それは非常にメンドクサイ。
「ねぇ、そのサークルって、やっぱり吹奏楽？」
「あぁ、説明してなかったっけ？アンサンブルって言って、少人数の、例えば金管五重奏とかって言う編成で演奏する人たちが集まってる団体で、ウインドってついてるから多分吹奏楽だと思うんだけど…」
「やっぱり音楽なんだ。さすが全国一の指揮者」
「高校の、な。変なうわさになるからやめれ」

大体それだってもう半年以上前の話だ。今年は俺よりもすごい指揮者がいるかもしれないし、この大学なら俺よりも優れた人はいくらでもいる。

そんなことよりも、ウインドを探さなきゃいけない。と言うか、ない。どこだ？

「おい、ウインドってどこだ？」

「いやわたしに聞かれても…」

「だよな」

「新しい漫才…？」

「あれ、もしかして君は神矢馨君じゃないかい？」

「まさか漫才のわけないじゃないか、しかも灯こそ良く分からないボケするなよははは」

…ん？

「いやボケてるつもりはないんだけどな～ははは。で、君は神矢君だよね？」

…んん？

「あれ、違った？前に全国大会だったかなんだかの会場で会った記憶があるんだけどな～、人違いだった？」

…んんん？

「あれ、あなた確か…」

思い出せない。

「て言うか、誰でしたっけ？」

「あぁ、これは木っ端微塵に忘れられてるか～、俺影うっすいからな～、まぁ仕方ないか～」

でも、どこかで見たことがある気がした。このひょうきんな態度、スラリと伸びる背、そしてなによりもタレントのように端整な顔立ち。

「…あ」
思い出した。
「お、思い出してくれた？さてさて僕は誰でしょうか！」
「えっと、篠宮英駿さん？」
「正解っ！」
背景に「イエーイ！」と言う感じのポップが浮かんでくるかのように親指をグッと出してくる篠宮さん。昔からこんな人だったけど、変わってないな。。。
「ねぇねぇ、誰？」
「あぁ、灯は知らないか」
袖を引っ張って説明を求める灯に、出会ったときのエピソードを軽く説明してやる。
最初の出会いは確かコンクールの全国大会の会場のロビー。
「そこで、何を思ったのか、一人で叩いてたんだ」
「楽器？じゃぁあの人パーカッションやってるんだ。　スゴイ勇気のある人だね～、そんなところで1人でやるなんて」
「あぁ、まぁ勇気があるのかな。　いろんな意味で」
「？」
叩いてたのが…バケツだと知ったら灯はどんな顔をするだろうか…。
そう、一人で五種類くらいのバケツを叩いていた。スティックで。
でも、驚くのはそこじゃない。
その五種類のバケツを全て駆使して、見事な音楽に昇華させていたのだ。
その音はさながらドラムを想像させるもので。
まだパーカッションと言う楽器について（ある程度の知識はあったが）そこまで良く知らなかった俺から見たら、何か神々しいものすら感じるほどだった。
「ねぇねぇ、この大学に来たと言うことは、俺と吹奏楽をやってくれると言うことで良いのかな？？」

「ん？あぁ、そのことですか」
まぁ、結果だけ見ればそうなのかもしれない。
「まぁ、あなたとやろうと思ったわけではないですが、吹奏楽はやろうと思ってます」
「おぉぅ、相変わらず厳しいねぇ。でもまた吹奏楽をやってくれるだけでも俺は万々歳よ～♪」
「ははは…」
そっちこそ、相変わらずよく分からない性格だ。

『…』
『ン？君は、、、神矢クンだね！もう演奏終わったのかい？』
『え？あぁ、はい…というかなんで俺の名前知ってるんですかあんたは』
『だって有名じゃん♪まだ二年生なのに指揮者として舞台に立つなんて。しかも地区大会ではとんでもない成績で上がってきてるんでしょ？有名にならないほうがおかしいよ♪』
『はぁ…そうですか』
『それはそうと、そこで何をしてるの？あ、もしかして俺のパーカッションを聴いてくれてるのかな？イヤー照れるなー、人に聞かせるほどのモノじゃないってのに神矢クンに聞いてもらえるなんて思いもしなかったよー』
『…（すげぇマシンガントークだ）』
『アレ？違った？ひょっとして俺の早とちり？それはそれで恥ずかしいなー♪』
『…フ』
『ア！今鼻で笑ったでしょ！それ人にやらない方が良いよ！結構失礼だ！まぁ俺相手ならいくらでもしてくれてＯＫだけどねー』
『あぁ、スミマセン。ついクセで』

『クセかよ！直そうよ！でもまぁクセなんてそう簡単に直ったら誰も苦労しないからねー、地道に直してったら良いと思うよ』
『そうですね（なんだこのスピードの差は）』
『まぁそんなことはどうでも良いや！とりあえずこのまま続けても大丈夫かな？まだ叩き足りないんだー』
『いや、それは良いですけど』
『ん？どうかした？』
『…運営の人たちがたくさん来ましたけど』
『中で演奏してるってのにこんなところでドンチャカドンチャカ何をやっとるんだね君はあああああああ！！！！』
『…』
『…』
『…とりあえず逃げよう！』
『え、なんで俺まで！？』
『良いから良いから♪旅は道連れ世は情け～』
『コレ旅じゃないから！つか道連れにするなあああああ！』

…今思うとアレもスゴク…メチャクチャだった…。
「…フ」
「ア！今鼻で笑ったでしょ！それ人にやらない方が良いよ！結構失礼だ！まぁ俺相手ならいくらでもしてくれてＯＫだけどねー」
「…あの時と同じこと言ってるよ」
「ふふふ、仲良いんだね、二人とも」

…さて、これからどうなるんだろうな。大学生活。
かき乱されてかき乱されて気付いたら自分のペースがなくなってる気がしてならない。
でも、そんな大学生活も、良いかもしれないな。

act 1 ― 2

そんなこんなで、大学が始まってから二週間が経った。明らかに飛ばしているけど、そのくらいあっという間だったんだ。
あのあと、ウインドアンサンブルにたどり着いた俺と灯は、上級生の部員から熱烈（？）な歓迎を受けた。
俺は全員から、灯は男から。まぁある意味当たり前とも言える。
と言うのも、灯ははたから見ても普通にキレイどころといえる、端整な顔立ちをし、かつボディバランスも見事だと言えるから。身内の贔屓目かもしれないが。いや、身内ですらないが。
と言うわけで、初めての環境であるにもかかわらず難なく場に溶け込めた俺たちは、その日のうちに入部を済ませてしまい、他の一年生から先輩であるかのような応対を受ける結果となった。
「え、一年生だったんですか？てっきり上級生の方かと…」
そうか、そんなに老け顔か。衝撃の新事実だ。

「そうだ、ウインドへ行こう」
突然灯が言い出した。
「〇Rネタは著作権法違反だぞ。お前、これから講義あるし」
「だってあの教授、耳聞こえてるのかどうかすら分からない上に学生を見てないから、サボってもバレないと思わない？」
そんなお昼十二時半の中庭。いつものごとく2人で昼食をとる新入生の風景。
ある意味大学に入って早速出来ちゃった盛りのついたカップルくらいに周りからは見えるかもしれないが、俺たち二人は断じてそのような関係ではないと言っておこう。
「それに講義をサボってまでもサークルに没頭する姿、いかにも大学生っぽくて良くない？」
「あえて言おう、良くない」

「いけず」
「知るか」
立ち上がり、自分のカバンを手に取る。さて、どこに行こうか。
といっても結局足は部室へと向くのだが。
「あー、馨は部室に行くつもりだ！　ずるいぞ！　一緒に講義受けろ！」
「俺取ってないし」
「でも受けるの！　一人だけずるい！」
「頼むからワガママは家でだけにしてくれ」
足をつかまれてもそのまま引きずって俺は歩く。もちろんそのまま引きずって。
「…」
「…」
「…いつまでくっついてるつもりだ」
「講義に行くって言うまで」
「わかったわかった。　俺も講義に行くから」
「ホント！？」
パッ
ダダダッ
「あ、逃げた！　逃げるな馨ぅ！！」
といいつつも追いかけてくる様子はない。
あぁやって馬鹿なことばっかりやってる灯だけど、結局のところやるべきことは自覚してるんだ。
俺には義務はないけど、灯には授業を受ける義務がある。それだけで理由は十分だった。
友達として、あれ以上のやつはいない。

「で、なんでこんなことになってるんですかね」

ウインドの部室に着いたら、なぜか幹部の人間が集まって俺を指揮者にしようとしていた。極めて謎い展開である。
「ふざけたことを言わないの！　こんな才能を野放しにするなんて、指導者として間違ってるとしか言いようがないじゃん！」
と、ウインドの部長である前坂純（まえさか じゅん）さんが言っている。
「あのですね、純さん、俺はそんなたいそうな人間じゃないですよ」
「うわ、それって私に対する挑戦？　いいよー、受け取るよー」
「とりあえず一人でやってくれますか、めんどくさいんで」
手近にあったイスを引っ張り、腰掛ける。部室にはなぜか畳も存在するので、幹部の人たちはみんなそこに座ってなぜかあるちゃぶ台を囲んで話し合いをしている。
「いけずー」
「灯とキャラが被りますよ」
「どうでもいいの！　そんなことよりも指揮者になってくれない？　こっちとしても今一人しかいないから、人員の補充は急務なのよー」
と、純さんは言う。
どうやら今の指揮者は篠宮さんだけのようで、多少不安が残るようだ。年末からは彼も就活であまり来れなくなってしまうらしい。
「というか、俺としてはあなたが就活をすると言う事実が驚きです」
「俺だって社会でマトモに生活を送るんだよー」
と、ふんぞり返って言ってはいるが、何の説得力もない。
「まぁ、ちょっと考えておいてよ。　活躍するといっても多分最初の出番は夏の音楽祭だし、うちは団体の特性上指揮者って言う立場はそんなに重要視しないからさ！」
「まぁ、考えるだけなら」
といってしまった時点で、俺の負けなんだろうなと、すぐに気付いたが時は既に遅かったのである。
それに、さっきも言っていた通り、この団体では指揮者と言う立場はそれほど重要ではない。極少人数で行うアンサンブルのほうが

メインだからである。
「あと、灯ちゃんに言っておいて欲しいんだけど」
「自分で言えばいいじゃないですか」
「でもほら、君のほうが仲よさそうだしさ」
ちょっと悔しそうに人差し指を唇に当てながら、純さんが言う。
そのしぐさにちょっとだけドギマギしながら、
「分かりましたよ、言っておきますから。　で、なんです？」
「あぁ、そうそうあのね…」

……

「随分と先の長いことを計画してるんですね」
「まぁ先のことを考えて動くのが私たち幹部ですから」
それにしても来年のことを今から計画するとは…。
「まさか、二年目でいきなりコンサートミストレスをねぇ」
「でもあの子はいい才能持ってるよ。　いきなりでオーボエをあそこまで音程ピッタリに合わせられるんだからね」
そう、灯はウインドに入ってまずオーボエをやることにした。理由は簡単、カッコイイからだ。
そのオーボエだが、実際に吹こうと思ってやすやすと吹けるものではない。ダブルリードと呼ばれる種類のリードを用いるその楽器の難しさは、なんと言っても音程にある。
吹奏楽と呼ばれるジャンルで扱われる楽器の中で一番音程が合わせづらいといえば分かるだろう。チューニングをする際、オーボエに合わせてチューニングをする楽団が多いが、それは単に『オーボエが一番不安定だから』だと言える。
「まぁ、そうなんですけどね。　俺も最初はビックリしましたけど、何でもそつなくこなすのが穂積灯ですから」
「だ・か・ら、人手不足も相まって彼女に白羽の矢が立ったわけなの！」

「ん？　呼んだ？」
うわさをすればなんとやら、授業だったはずの灯がやって来た。
「…授業はどうしたのかな灯さん」
「あ、そうだ聞いてよ！　なんか突然休講になっててね？　せっかく教室まで行ったってのにー」
「あー、はいはい」
そんなくだらない話をしていると。
「灯ちゃーん！　ちょっとこっちこっち」
手招きをする純さん。
「なんですかー？　あ、美味しいもの？」
まるでパブロフの犬のように走りよる灯。
「…餌付け？」
「うるさい。　早速なんだけどね、君には来年からコンミスやってもらうから！」
「いいですよー」
と、餌付けされた灯が答えた。ここまで計画性のないやつだとは思わなかった。
「…って、即答かよ！」
「いあ、おもひろそうやん？」
「食うか喋るかどっちかにしろ」
「よし、決定！　近々オールにも投げとくから！」
腹が痛くなってきた。もう来年のことを考えるのか…。

今日の講義は「音楽史」と、「経営学概論？」だった。
経営学概論はまだ概論なだけあって、とりあえずドラッカーのマネジメントを読んできて、それに沿っていろいろな企業を紹介するという程度のものなので、初学者には最適だ。だけど音楽史のほうは初学者にも既習者にも向かないと思う。

どうしてかって？それはあれだよあれ、つまりテキストもなく延々と音楽の歴史を紹介していくという講義なわけで、初学者は付いてこれないし、既習者にとっては当たり前のことを言っているに過ぎない。

「誰に説明してるの？」

と言ったのは灯。

「独り言だよ」

と、俺。

「え、ギャグ？すごくつまらないよそれ」

「うるさい黙れいじめるぞ」

講義が全部終わったその足で、今日はバイトに行く。サークル？休みです。

「今日は誰が来るかなーっと！」

勢い込んで自転車に乗り込む俺はまだまだ若いな、と思う。老いたらもうこんなこと出来ないだろうし。

「あ、今日は部室行かないんだ。じゃぁここでバッハハーイ」

「お前、いちいちセンスが二世代分くらい古いよな」

軽口を交わし、自転車で大学を後にする。

十分ほど走ればもうそこは空。見上げたところにある青いあれではない。カフェ”空”である。

早番で入っていた人たちと挨拶を交わし、バックヤードに入る。なぜか店長が一人でゲームをしていた。

「…しかもＦＦ４かよ、古いなおい」

「あ、馨くん、おはよう」

「おはようございます」

と、いつもの（若干スルー気味な）会話を交わし、上着を脱ぐ。この店においてユニフォームという概念は存在しないため、今日のようなＴシャツにジーンズというえらくラフでカジュアルなスタイルでも、前掛けが出来れば何の問題もない。

以前は女性でミニスカートで仕事をしていて盗撮された、なんていうこともあったらしいが、最近店にいる女性は恐ろしく強い（肉体的にも精神的にも）ので、そんな事件は話にも出てこない。
「あ、今日新しいバンドさんがＣＤ置かせて欲しいからって話に来るよ、大体八時くらい」
「了解です、いつもどおりで良いんですよね？」
「うん、よろしく」
この店でＣＤを置けるかどうかは全てその日にいるアルバイトのメンバーの総意によって決まる。つまり、バイトのスタッフにどれだけ気に入られるかで勝負が決まるのだ。
このシステムは良いと思う。店先で接客をするのは主にアルバイトの人間だし、ＣＤを起きたい人＝客と仲良くなるのにはもっとも有効かつ効率的だ。
「お疲れ様」
早番の人の片方が上がるようだ。俺が着いたからだろう。
「うい、お疲れ様です」
これもどこの仕事場でも恒例の挨拶。

「あー、もう七時五十分だ」
ふと時計を見てみたら、もうその日の取引先となる客がそろそろ来るんじゃないかという時間。
まぁバンドの練習をしてから来るという話だったし、少しくらい遅れるかもしれない。
カランコロン
「いらっしゃいませ」
「ハロー馨、ちゃんと仕事してる？」

灯だった。
「…お前かよ」
「なんだよつれないなー、せっかく遊びに来たのにー」
「今日はこれからCD会議やるからあんまり絡めないぞ」
「あ、そうなんだ。　今回はどんなバンドなの？」
灯はその辺の事情はだいたい知っている。なにしろ二日とおかずに店に来る（本人いわく善良な）常連だからだ。
「詳しい話は知らんが、とりあえずいつものだよな」
「うん、いつもの」
常連なのでいつもので通じる。客商売というのはホントに大変だ。
「八時くらいに来るって店長言ってたからそろそろ来るはずなんだけど…あ、うわさをすればなんとやらってね」

カランコロン

「こんばんは！はじめまして、SLEEKでギターボーカルやってます新見（にいみ）です！」
「はじめまして、ここのスタッフの神矢です。わざわざご足労願いまして」
新見と名乗った少年は、いやいやとばかりに手のひらを横に振った。
「こちらこそ急なお話をしちゃってすんません。　あ、早速CDの話に入ってもいいですか？　ところでこの子は神矢さんの彼女？可愛いねー」
「あら、ありがとう」
…え？何この状況。なんでこいつくどいてんの？
「えぇ、じゃぁ早速お話のほうに移りましょう」
「あぁ、分かりました！じゃぁ聞いてもらえます？結構自信作なんですよー、僕が作詞作曲全部やってみたんですけどね」
どうやらすごいやつが来たらしい。

周りを見渡してもう一人いるはずのスタッフを探す。しかしどこにもいない。
そこまできて思い出したことがひとつあった。
『あ、今日夜きみ一人だから、全部勝手に決めちゃっていいよ』
とは、店長が今日俺が来たときに言った言葉だ。
どうやらとても面倒な役をおおせつかったらしいな。厄介だ…。

act 1 ― 3

「…ってわけでねー？　やっと自主制作だけどCDを作るにいたったわけよー」
「あー、結構な茨の道のりだ。　よくここまで頑張ってこれたな」
「そう思うだろ？　ホント大変だったんだよー」
で。
結局CDを聞かせてもらった感想としては、明らかなまでに合格点をやすやすと突破していた。
ギター二本の奏でるメロディックでいて何か危ういものを感じさせるリフには心を震わされ、ベースとドラムが紡ぎだす重厚で暑苦しいまでのパワーを持ったリズムは人をいとも簡単にひきつける。
何より圧巻なのがボーカル。透き通っているようで何か譲れないものを持つ芯の通った声。このバンドは売れる。そう確信させるものがあった。
「あ、で、結局CDは置いてもらえる？」
「あぁ、勿論置かせてもらう、というか置かせてください」
このくらい言っても損じゃない。このCDを初めて販売するのがこの店だなんて、光栄の至りだ。
「…おおおおおお、ありがとう！　マジで助かる！」
「これからもがんばっていい曲たくさん作ってくれ、ガチで応援してる」
「サンキュー！　じゃぁとりあえず十枚くらいおいとくから、あけて流すなりなんなり好きにしちゃってくれ！」
「おっけー。　まぁここいらで休憩にしよう。　コーヒー入れるよ、俺のおごりで」
「ホントに？　いやー金がなくてさー、助かるよ！」
バンドマンは基本的に金がない。
だから俺みたいに使うあてのない金をバンドマンのために使う。

それは音楽界を活性化させるためという大義名分の下、実際には気に入った個人を応援するためのものだ。
つまり、俺はＳＬＥＥＫに、新見の声にほれてしまったのだ。
「しっかし、良い声してるな。ボイストレーニングとか受けてたのか？」
「いや、全部独学なんだ。でも毎日声は出してるし、実際トレーニング受けるほどのもんでもないんだよな」
コーヒーを入れながら、ちょっとした世間話をする。こんなことが出来るのも客との距離が近いこの店ならでは。俺がこの店を気に入っている理由だ。
「へぇー。特別にトレーニングとか受けてるのかと思った」
淹れ終わったコーヒーを二つ持って、新見のところへ向かう。「ありがとう」といって、コーヒーを口にする。
「…うっめぇ！　お前、コーヒー淹れる天才だな！」
「それほどでも…最近はどこのハコでやったりするんだ？今度聞きに行きたいんだけど」
これは本心だ。時々どうしようもなくダメなバンドがＣＤを置かせてもらいたいと言ってくることがあって、断る代わりに『俺は気に入ったんだけどね、ほかの人がね。どこのハコでやってるの？』という風に社交辞令を言うのがこの店のアルバイトの常套手段なのだ。でも、俺は今本気でＳＬＥＥＫのライヴを聞きたいと思っている。
「最近かー。最近はＪＡＭでやることが多いけど、次のライヴはＬＩＶＥＧＡＴＥだなぁ。ほら、恵比寿にある」
「あー、あそこか。　結構良いハコでやるんだな」
「そうでもないよ、ちゃんとした曲を書いてオーディション受ければ誰でも通れる」
その「ちゃんとした曲」を書くことが難しいんだけどな…と思う。指揮者としては。
「呼んでくれよ。　あ、チャージは全額きっちり払うぜ」
「ホントありがとう！　とりあえず置いとくわチケット！」

そう言って置いたチケットの出演を見てみると、そうそうたる顔ぶれが揃っていた。やはり分かる人には分かるんだな…そういうところが垣間見えるチケットだった。
「よし、見に行くわ。　…サークルがある日だ」
まぁ、関係ないが。
「無理しなくていいよ！　来れるときに来ればいいし、そのチケットほかの人にあげちゃっても大丈夫だから！」
「いや、行く。　サークルよりもずっと楽しそうだ」
これも本心だ。
そう言ったときの新見は、目をキラキラさせた子供のようだった。

で。
新見が帰った後、なぜかまた灯がやってきて、
「ねぇねぇ、彼のバンドはどうだった？」
と聞いてきた。
どうだったと言われても、
「普通によかったぞ、ＣＤ置くし」
としか言えない。
「ふーん」
と、それだけ言ってくる灯。　そんなにＳＬＥＥＫのことが気になるんだろうか？
「聞かせてよ！　ていうか流してよ今！」
「まぁ良いけど」
やけに突っ込んでくる、と不思議に思いながら、ＣＤを流すために封を開けるのであった。

act 1 ― 4

ライヴの日。
サークルにはあらかじめ連絡を入れてあったし、元々サークルの日だからバイトもない。ハコが開く時間に行って、控え室に顔を出してみると、新見たちＳＬＥＥＫの面々が他のバンドと談笑していた。
「よう、調子はどう？」
「おぉ、馨―！　来てくれたんだ、嬉しいよ！」
初めて店に来たときと同じ笑顔で新見が話しかけてくる。その後も何度かバンドの面子を連れて店に来てくれていたから、バンドメンバーとも顔なじみだ。
「あれ、神矢さん？　ＳＬＥＥＫさんと仲良いんですか？」
と、これまたうちの店にＣＤを置いている、今日のＳＬＥＥＫの対バンが話しかけてきた。
「そう、こないだ新見がＣＤ置いてくれって言いに来て、その時からね」
「あー、そういえばあったね、アルスも！」
「まぁ、この辺のバンドは大体あそこにＣＤ置かせてもらうことが目標の一つですからね」
そういって、アルス―――Ａｒｓ　Ｎｏｖａのボーカルは笑った。
バンドマンは純粋で、音楽をやることが大好きだけど、一応食い扶持は自分たちで稼がなきゃならい。勿論ヒモになって頑張ってる人もいるけど、あんまりそういう人たちは尊敬はしない。
自分たちだけで頑張るから音楽にも価値がある。
「お、空の神矢君じゃん、今日のステージはすっげぇ面白いことになると思うから、楽しみにしててよ！」
と、今回のライヴの企画者でトリを務める、ａｚｚｕｒｏのギターボーカルの東さんが言ってきた。ａｚｚｕｒｏはこの町の中心的

なバンドで、知名度で言えばそれこそ全国クラス、さまざまなインディーズレーベルからオファーがかかるほどの、言ってしまえば今のインディーズのシーンの中心バンドだ。ちなみになぜかメジャーになる気はないらしく、ＣＤはうちの店にしか置いていない（しかも自主制作）。

「どうもお久しぶりです。　すんげぇ楽しみにしてますよ、ａｚｕｒｏさんのライヴ」

「任せとけって！　でっかい花火打ち上げてやるよ！」

東さんがそういうなら、間違いなく楽しい一夜になる。そう思わせる何かを感じるのだ。そう思って、控え室を出ることにした。

ライヴが始まる。

やはり俺の目は節穴じゃなかったようで、ＳＬＥＥＫのパフォーマンスは間違いなくトップクラスだった。ＣＤで聴く以上の分厚いサウンド。

家に戻ったら早速ＣＤのポップを作らないといけないな、そう考えているうちに、ＳＬＥＥＫの出番も終わっていた。

控え室に挨拶に行ってみると、新見たちＳＬＥＥＫの面々は床にへばりつくように腰を下ろし、肩で息をしていた。滝のように流れる汗が反射して眩しい。運動部の高校生が十キロ全力で走りぬいた後のような、けだるい中に爽快感を感じる絵面だ。

「おす、お疲れ」

「おぉ、馨～、マジ気持ちよかったぜ～…」

倒れそうになりながらも（というよりもう倒れているが）、笑顔でそう答える。

音楽に関わっていると、何度かこういう人間に出くわす。自分の信じるもののためにすべてを投げ打ってでも立ち向かい、必ず成功して戻ってくる人間。どこに行っても負けない何をしても結局勝っ

てしまう。そういう人間だからこそ、勝ち残るのが難しい音楽の世界でも勝ち残る。
そして天下を我が物にしてしまう。
そんなことを考えながら、話を早めに切り上げて帰ることにした。

家に帰ってからＳＬＥＥＫのＣＤのポップのキャッチフレーズを考える。
結局あの後一度店に戻り、ＣＤを即座に棚に並べてから帰ったため、時間はだいぶ遅くなってしまった。コーヒーを飲んでリフレッシュするだけで、もう十一時である。
キャッチフレーズを考えている間、馨は自分のサークルについて考えていた。
（何か面白いことがしたい）
今日受けた刺激を忘れないうちに、考え付く限りの事を紙に書き出していく。
吹奏楽でロック調の曲をやる、吹奏楽にギターベースを取り入れる、いっそアンサンブルでロックバンドを組む。
どれもパッとしないのが欠点である。ありきたりと言った方が正しいかもしれない。どちらにしても没ネタになることは確実。
こんなときは企画屋に相談するのが一番だ。
そう考えたときにはもう既に手が携帯電話のメールブラウザを立ち上げていた。
（灯、灯っと…）
今大学内で最も仲が良いと思われる友人にメールを打つ。
『吹奏楽とロックを組み合わせた何か面白いことはないか』
こんな文面。スッキリしたもので、これだけで何が言いたいかは大体伝わる。
５分ほどＳＬＥＥＫのポップ作りに集中していると、携帯電話の

ベルが鳴った。どうやら答えが返ってきたらしい。期待を胸に受信されたメールを見る。

『お風呂入ってくるからちょっち待ってて』

大体三十分位して、満足のいくポップが出来上がった頃、灯からメールが入った。

『要するに、今日ライヴを見に行ったところロックやっちゃうバンドさんがいて、それがものすげぇカッコよかったから　真似したいんだけど吹奏楽で出来ないかにゃ？　という意味？』

『そうそう、そういうこと。　ていうかにゃってなんだ』

『なるほどー。そういうことなら今からパソコンにとある音楽ファイルを送るから、それを聞けばヒントっつか正解が分かるよ』

と、その瞬間パソコンからメールを受信するアラームが聞こえてきた。仕事が速い。

早速届いたメールをチェックすると、確かに音楽ファイルが添付されている。

再生してみると、小気味良いギターの音と、タイトなドラムが聞こえてきた。至って普通のロックに聞こえる。

ところが、その後に聞こえてきた音に、馨は鳥肌が立つのを抑えられなかった。

「スカ、やりましょう」

はぁ？と頭の上にはてなマークを浮かべるウインドのメンバー一同。

「何を突然言い出すんだ馨」

「ロックでブラスでカッコイイ、スカパンク、やるしかないでしょう。　本番は近く行われる創立祭で！」
拳を突き上げる。中々にして元気な一年生である。
上級生一同としては特に反対する理由もない。創立祭では全体合奏としてのステージはないし、ウインドメンバーの中にもロックが好きな人間はたくさんいるからだ。
「よし、決定ですね？　じゃぁ俺メンバー集めときます！」
「ちょっと待った、お前ギターベースドラムにアテはあるのか？」
先輩に突っ込まれる。勿論、策はある。
「えぇ、インディーズの中でも特別すんげぇやつら連れてきますよ」
グッと、親指を突き出して。

act 1 ― 5

『そういうことなら協力するぜ！　ギターとベースとドラムとボーカル、ようするに普通のごく一般的なバンドを用意するんだろ？』
「そういうこと。　というか新見のバンドにうちの学生居たはずだから、そいつの名前を使えばぜんぜん余裕でいけるはず」
『それなら心配はないな！　いやー、前にほかの大学でゲリラ的にライヴやったら、受けたことは受けたんだけどあとで実行委員会とやらに大目玉食らっちゃってさー』
と、なにやら不穏な話をする二人。ちなみに電話である。
具体的にはウインドにて『スカパンクやりたい』と言ったその日の夜、早速メンバーを集めにかかった馨。とりあえずウインドのほうからトランペット、トロンボーン、テナーサックスの三人を集めることが出来たため、残るは要となるギター、ベース、ドラム、そしてボーカルの四人である。
軽音サークルに声をかけても良いんだけど、それだとどんなやつらが来るか分からない。そう考えていたところ、一つ思い出した。
『ＳＬＥＥＫのメンバーの一人が、同じ大学に通っている』
ということを。

早速コンタクトを取る。返事は二言目には既にＯＫだった。
彼らとしても普段つまらない文化祭を、どうにかして盛り上げられないかと思っていたようで、サークル同士のコラボレーション（実際には片方はサークルではなく外部のバンドだけど）には積極的に協力したい、との事だ。
「よし、これで後は出演の申し込みだけか…あれ、いつまでだっけ」
楽しいことをしている間は色々とやらなきゃいけないことも不安なことも忘れることが出来る。
「よし、何をやるか決めなきゃな！　せっかくだから俺が書き下ろ

すか、一週間くらいで」
例えば、こうやって頑張っている馨には今現在、中間レポートなる強敵が六個ほど待ち構えているはずだ。
「……」
現実にふと立ち返ってみると、そこには山のように積まれた資料と、パソコンのダッシュボードに書かれた提出日一覧のメモがあった。
そのメモにはこう書かれている。
『経営学概論レポート提出…六月二十二日』
「……」
そんな六月二十二日の午前二時である。

気付いたら鳥もさえずりだす午前五時。
やっと、やっと課題が片付き、とりあえずほっと一息つく。ちなみにこの課題を片付けるために消費したコーヒー豆は、ゆうにコーヒー五杯分だ。
「やっと終わった…あれ、太陽が…」
ある意味健全な大学生の姿であるが、社会全般から見たら不健全極まりない。
今から寝たら確実に大学には間に合わないため、もう一杯コーヒーを飲んで、そのまま講義に出る決意を固める。なぜこんなにも頑張っているのだろうと不思議に思うが、よくよく考えたら自分からやりだしたことなので仕方がないのだ。
というわけで早速お湯を沸かしに行く。まだ一日が始まってから五時間ほどしか経っていないのに、お湯を沸かすためだけにキッチンに六回も入る大学生というのは、中々シュールな絵である。
こうして一通りの準備も揃い、あとは曲を決めてひたすら練習するだけ…なのだが、何かもう一ひねり欲しいと思ってしまうのは欲

張りだろうか？
「いや、そんなことはない」
自問自答する。ちなみにとても今更だけど、馨は一人暮らしである。一人暮らしをする大学生が独り言を良く言う傾向にあるのは身をもって体験済みだ。しかもその癖が中々抜けないから困ったものである。
お湯が沸いたのを示すヤカンの蒸気音が聞こえてくると同時に豆が挽き終わる。豆の良い香りが徹夜で疲れた体を癒してくれる。と同時に、眠気を誘う。むしろこのまま眠気に負けてしまおうか、とも考えたが、今日はレポートの提出日なのでサボるわけにはいかない。現実はシビアなのだ。
（うーん、どうしても何かやりたい）
そんなことばっかり考えながら、淹れたてのコーヒーを飲む。企画を立てるのは得意だけど、そこから何かを派生させるとなるとまた難しいものがある。例えば『空を飛ぼう』というところから『空に飛ばしたものに乗ろう』という発想は中々生まれないのと同じである。実際にライト兄弟がそういう風に考えたのかどうかは知る由もないが。
そんなくだらないことを考えていると、背中に違和感を感じた。どうもずっと椅子に座っていたせいか、背骨がおかしなことになっているみたいだ。コーヒーカップをテーブルに置いて上半身を回す。ボキボキという音と共に重かったからだが少し軽くなったような気がする。
「ふぅ～…」
ちょっとした痛みを伴う荒療治だったため、目も覚めた。
そして、窓の外を見る。良い天気だ。それはもう何を血迷ったのかまだ五時過ぎであるにも関わらず学校に行って爽やかに楽器でもやっちゃおうかな！　ＹＥＳ！！　とか叫びだしかねないくらいに良い天気だった。　ちなみに俺は比較的思ったことは即行動に移す男（自称）なので、既に学校に向かう準備を進めている。　テンポ

の良い男である。
「今日は何があるかな～っと♪」
徹夜明けだというのにこんなにもご機嫌なのは、きっと文化祭に向けてメチャクチャに忙しく、けれどもメチャクチャに楽しい日々が始まるという確信があるからなのであった。

部室に着いた。どうにも暇だった（朝五時半に着けば当然だが）ため、やはりここに足が向いてしまうのだ。暇じゃなくても足は向くが。
と、中から音が聞こえる。誰かがＣＤを掛けっぱなしにして帰ってしまったのだろうか。
それとも噂の大学七不思議のひとつ『鳴り止まぬスピーカー』とかそういう系の神秘の小宇宙的オカルトネタなのか。　いやそれだけはないな。　そもそも七不思議とか聞いたこともないし。
入ってみれば分かる。　そう判断したので入ってみようとして、中に人がいることに気付く。
聞こえてくるのはオーボエの音。　ロングトーン。　つまり基礎練習だ。例えば同じ『ド』という音の中でも、少しでもヘルツ数にずれが生じるとそれだけでハーモニーとは程遠い耳障りなだけのサウンドとなってしまう。それを避けるにはずっと同じ音を伸ばし続けて肺活量を増やし、より豊かな音形を作り出すためのトレーニングが必要になる。　それがロングトーンであり、吹奏楽の…いや、すべての楽器の基礎練習における最も重要かつ最も初歩的なトレーニングなのだ。
そして、現在オーボエでそのトレーニングを誰よりも頑張らなければいけない人間は、灯しかいない。
「……」
邪魔をするのは良くないな。そう思った。

初心者で入って。　必死に練習して。　さらには来年からコンミスまで務めて。

今の灯には周りを見る余裕などない。ひたすら技術を磨き、体力を伸ばし、精神を鍛えなければならない。その結果やらなければならなかったことがこの早朝練習なのだろう。

はっきり言って、俺は教える気は毛頭ない。

先輩の誰かなら教えてやれよ、と言ってくるかもしれない。　だが、基礎練習を教えることが出来るのは自分自身しかいない。　なぜなら、基礎練習は自分との戦いだから。　そこに他人が介入する余地は、あってはいけないのだから。

そっと扉から離れて、足音を立てないように来た道を戻る。　頑張れ、灯。

そして俺はといえば、行く場所がなくなったため早々に講義棟に行くことにする。　この時間に教室が空いているかどうかは分からない。何せ初めての経験だし。　だけど、本気で練習する人の邪魔をすることだけはしちゃいけない。

教室が空いてなかったらまた戻ってきて、灯にいろいろと教えてやろう。

そんなことしなくても、灯のことだから一人で勉強して、一人で練習して、気付いたら誰よりも上手くなっているだろうけど。

act 1 ― 6

「というわけで、初顔合わせも兼ねた飲み会です。　どなた様もガッツリ仲良くなって、練習から本番まで全力で楽しみましょう！」
カンパーイ！　という音頭と共に、飲み会が始まった。ちなみに言ったのは俺。
今日はウインドアンサンブルKと、ロックバンドSLEEKのメンバーで構成される、創立祭スペシャルバンド「WINDCORE」の初顔合わせの日だ。ただ顔を合わせるだけの会なのでお互い楽器を持っていないことが災いしたのか、当初ファミレスでやることになっていたはずだったのが気付いたら駅のそばにある社会的弱者御用達の格安居酒屋（居酒屋という時点で弱者ではないが）に場所が変更になっていた。一応、念のため、断っておくが、俺はまだ未成年なのでファ〇タの麦味だ。フ〇ンタと言えば大抵の物は許されるのである。
「いやー、SLEEKを呼ぶとはねー。　いつの間に知り合ったんだよ？」
と、ウインドの先輩で今回トランペットをやってくれる人がジョッキ片手に聞いてきた。
「うちの店でSLEEKのCD置いてるんですよ。　そのときに店に置く判断したのが俺だったんで」
「なるほどなー。　俺SLEEKのCDは全部ハコで買ってるんだよ。　こないだのライヴも見に行ったんだぜ？」
「え、あそこに居たんですか？　でも確かその日は練習」
「おっと皆まで言わせん」
と、俺が手に持っていたファン〇のジョッキを俺の口に無理やり持って行き、飲ませる。正直苦しいが、ビールの味は嫌いではないのでそのまま飲み干す。
「…まったく、無茶させてくれますねー。　あ、センパイ、一杯ど

うですか」
「おっと、悪い」
と言って飲み干す。　なんだかんだで後輩の無茶にも付き合ってくれる、良い先輩なのだ。
今この場にはウインドの人間が四人、ＳＬＥＥＫのメンバーが四人。
　それぞれは交流もほとんどないし、初めてあった人もたくさんいる。　それでも、どこかで線がつながっていたりもする。　このセンパイもそうだし、ＳＬＥＥＫのベーシストの女の子がうちの大学の学部生であるということもそう。　この小さな街ではそういうつながりが必ずどこかにあるのだ。
「楽しいライヴになるといいですね」
「そのためにうちらがいるんじゃん！」
そういって腕まくりするＳＬＥＥＫの面々が、非常に頼もしく見える。
「まぁまぁ、まだまだ夜は長いんだ。　じゃんじゃん飲もうじゃない！」
そうセンパイが言うと、周りも店員に注文し始める。　というか、ものすごい量の酒を頼んでいるけど、大丈夫なんだろうか？
実は俺はザルだ。　いくら飲んでもほろ酔い程度にしかならない。
　そういう体質なのだ。　だが他の人たちはそうは行かない。　強い人もいるにはいるが、それでも俺にかなうほどの人は今のところはまだ見ていない。
結局この日は、酔いつぶれた人間がいつもよりも多く、そのほとんどの介抱を俺と他の潰れていない（潰れるほど飲んでいないというだけで実際酔っ払いである）人間で行ったのだった。

と、言うわけで。
久々に日曜日に何もないから”空”で朝から晩まで働くことに。

と言っても昼間は暇。一応この街は学生が多いけど、オフィス街という一面も持ち合わせている。実際、ウィークデイの昼間の売り上げの九割は社会人のランチタイムが主収入っていうくらいだ。
だけど、オフィス街であってベッドタウンではない。　だから、土日は社会人の売り上げがなく、店は基本的に閑散としているのだ。
お客さんとゆっくりと話が出来るって言う点が救いで、暇つぶしに持ってこいなのだ。　こんなこと言うと店長が泣いてしまうが。
さて、学生が多いということは一人暮らしをしながら大学に通っている学生も多いと言う意味で。
うちの大学のカップルも日曜となれば当然のようにデートに出てくるわけで。
「お、今日は馨いるんだ」
「こんにちは、また来たよ」
「いらっしゃいませセンパイ」
こんな風にだ。
確か初めてこの店に来たのが十月くらいで、その頃はまだこの二人は付き合ってなかったと思う。　その後一月に入ってから、付き合いだしたとの報告を、二人の口から直接聞いたのだ。
まさか俺と二人が同じ大学で、さらに俺が二人と同じサークルに入ってくるなど、そのときは想像もしなかっただろう。
「馨くんいるなら、あれ食べたいな」
「分かりました、ブレンド先にします？」
と、ブレンドの準備をしながら言う。
「そうだね、フレンチトースト先にきたら僕は置いてけぼりになる」
と、彼氏――名前を小野寺覚（おのでら さとし）という――は言った。
「しないよ？」
「してるよ」
「どっちでもいいんで、とりあえず座ってくれます？」
一月になってから毎回のようにこんなやり取り。もうお腹一杯です。

「ん～、美味しい！　やっぱり馨くんの作るフレンチトーストは絶品だー」
そういって満面の笑みを浮かべる彼女、加藤遥。
「毎回毎回褒めてくれてますけど、何にも出ませんよ？」
「言いたいから言ってるの。　そういうの分かってくれないとモテないよ？」
大きなお世話です、と思いながら、曖昧に笑っておく。絶対今顔引きつってるぞ、俺。
「あれ、今日流してるのって」
「あ、分かります？　ＳＬＥＥＫです」
また今日もスタッフが俺一人しかいないため、フリーダムに好きなことをやらせてもらっている。　基本的に店に流す音楽はスタッフの一存で決まるため、スタッフが一人のときは自由に決めることが出来るのだ。　というわけで仕事中だけど大好きな音楽と大好きなコーヒーに囲まれると言うある意味自由の利かない幸福を楽しんでいる。
「まさかインディーズの有名なバンドさんとうちがコラボとはねぇ…君らの企画力には恐れ入るよ」
俺たち、というよりは企画原案が灯で、実行が俺、と言う方が正しいのだが、周りは企画が俺と灯、と言うことで納得しているし、そうであると疑わない様子だ。
「ねぇねぇ、前から聴きたかったんだけど」
と、加藤さんが身を乗り出して言う。
「フレンチトーストのソース、服につきますよ」
「おっと…それでそれで」
と、服を上手いこと皿から回避させながら、なんでもないことのように、こんなことを聴いてきた。

「君と灯ちゃんって、付き合ってるの？」

「そんな事実はありません」

ここでそれを聞くか、という意味では予想外だったけど、サークルに入ってからというもの恋愛の話になると毎回のように聞かれている質問なので、なんとか即答できた。

「まぁまぁ、落ち着きなよ遥」

「うーん、私の考えでは二人はお似合いどころかうちのサークルでもベストカップル級なんだけどなー」

と、何とか落ち着いて席に戻りつつもぼやく。

実際、そういうことを全く考えなかったわけではない。　もともと灯は新入生の中でも相当美人な方だし、人当たりも良い。　何より、入学する前からの仲だ。　と言っても、ほんの数ヶ月の差だけど。

「馨はこういう店で働いてるから出会いも多いし、実は結構バンドやってる女の子とかからもアプローチあるんじゃないか？」

「いやー、実はないんですよねー。　バンドやってる女の子って、彼氏が楽器やっててカッコよかったからやってみたっていうパターンか、最初からガチで音楽にしか目が向いてない音楽バカのどっちかなんですよ」

これは俺の経験談だから結構的を射ていると思う。実際、出会いはあるけどそこから色のある話にまでなったことは一度もない。まぁ、自分とは無関係の恋愛話はあったけど。

「それに、俺もだけど灯もそういう話は全然しないし、今はあいつもバンドやってる子みたいな『音楽バカ』だから、誰が相手でも色恋沙汰にはならないと思いますよ」

「そーなのかー」

「自分から振っといてそんな『めんどくさい私無関係―』みたいな態度はどうかと思いますが」
「やっぱり私としては灯ちゃんをプッシュするね！」
と、親指をグッと立ててくる。
「そんな親指グッと立てて力説されても…」
大体、まず俺自身にそんな気は起こらない。
灯は俺の中でもはや『親友』としての地位を確保してしまっているのだ。
『親友』は『恋人』と同じくらいランクが高い。だからこそ両者は別物なのだ。
「…でも、親友が恋人、って言うのもありだと思うよ、僕は」
ふと、そんなことを小野寺さんが言ってきた。　今まで沈黙を保ってきただけに、少し意外なパターンだ。
「そんなもんですかね」
「そんなもんだよ、恋愛なんて」
年長者の意見には重みがある。　改めて実感させられる。
本人は軽い気持ちで言っているのかもしれないが、聞く側としてはそれはひどく重要なことのように思えて仕方ないのだ。
だからこそ、俺は、

「まぁ、その話はまた今度にしましょうよ。　せっかく淹れたコーヒーは不味くなっちまう」

…そういって、逃げるのだった。

act 1 ― 7

学生の本分は勉強である。
と、昔どこかの偉い人が言ったらしい。
その言葉の通り義務教育と言う言葉もあるし、実際小中学生は学校に行くことを義務付けられ、日夜勉学に勤しんでいる。　義務教育というわけでもない高校生ですら、毎日ちゃんと学校に行っているのだ。
しかし、大学生はそうじゃない。
毎日授業がぎゅうぎゅうに詰め込まれているわけでもなく、しかしスカスカというわけでもない。　必死に勉強しなくても卒業くらいは出来るし、出席を取らない授業だったら自主休講することすら可能だ。
というわけで、今日の俺は自主休講である。
何をしているかというと、楽器屋に来ている。
ちょっと新しいマウスピースが欲しくなったのだ。

どっかのバンドに触発されてついつい創立祭でスカパンクをやることになったため、今までのような吹奏楽向けの柔らかい音では満足できなくなった、というのが表向きの理由だ。
実際のところは、とあるオーボエ吹きに触発されて、更なるスキルアップを目指すと共に、長い間装備が変更されていなかったトランペットをハードの面から変えていこうと考えたから。
というわけでこうして楽器屋に訪れる。　ここは都内でも数少ないほとんどの種類の楽器をカバーする、言ってしまえば楽器のデパートという感じの店なので、トランペットのマウスピースもあるしチューバのミュートもあるしギターベースドラムキーボードマイク

などなどからＰＡ専用の機材まで、何でもこの店だけで揃ってしまう。　なにしろ楽器屋だけで七階建てのビルを丸ごと使っている上に、地下には練習と試奏用の個人ブースまであるという徹底ぶりだ。
　これだけ設備が整っているにもかかわらず価格設定も他の店よりも安い。　アフターサポートも充実しているし、年に二回盆暮れには必ずといって良いほどセールをやる。　一言で言えば、良い店なのだ。
　毎日のように楽器のレッスンが行われていて、そのレッスンも売っている楽器だったら大抵はカバーしている。　『楽しいラテンパーカッション』とかいうレッスンを見つけたときはさすがに『そこまであるか』と若干引いたけど。

　ここに来るのは大学に入学する直前、後輩に楽器の紹介をしたとき以来だ。
「いらっしゃいませー…って、なんだ馨君か」
「なんだとはご挨拶な」
　馴れ馴れしいが、まぁ叔父なので仕方がない。
「叔父さん、ペットのマッピ見せて」
「はいはいちょっと待ってなー、今つなぐから」
　そう言って電話の内戦で金管楽器の担当者を呼び出す。金管、木管、パーカッション、ギターベース、弦など、十数種類のカテゴリーにそれぞれ人員がいて、それをまとめているのが叔父というわけだ。
「今来るってよ」
「ありがとう」
　そっけないようだが、これが俺と叔父の正しい距離感だ。

　そうして、持ってきてもらった数十種類のマウスピースの中から、

バリバリとした音の出るマウスピースを探し出す。　これには大体ひとつ十分くらい時間がかかるので、来たのは朝なのに終わる頃には夕方、なんてこともザラだ。
　ようやく満足のいく音を出してくれる物に出会えた頃には、例のごとく午後四時を回っていた。
「じゃぁ、これで」
「おう、ありがとなー」
　金のやり取りをする。　結局大学生になっても金の使い方は変わらない。　『音楽』か、『コーヒー』の二つだ。
　店の外に出る。　一応季節はもう六月だけど、外はだいぶ薄暗くなってきていた。
「おぉ、もうこんな時間か」
　一応今日は”空”のシフトが入っている。　若干急ぎ足で”空”に向かう。
　この街には色々な人間がいる。　例えばホームレスであったり、ホームレスに食べ物などをタダで提供しているどっかの慈善団体のボランティアだったり、その慈善団体に金を出しているスポンサーだったり、そのスポンサーの作る製品の下請け会社だったり。
　例えばの話でものすごい暗い話になったが、実際にそういう人間がいるのだから仕方がない。　同じ人間としてもその辺で野垂れ死にされるのは心にチクリと刺さるとげのようなものを感じるのだ。
　ホームレスの中には昔は凄い才能を持ったプレイヤーだった、という人も当然いる。何らかの原因で現役続行が不可能になってしまった人だ。
　以前この街のそういう人たちと、自分の高校の吹奏楽部とのジョイントコンサートをやったことがあるが、たとえ今は住所不定無職のホームレスだって、昔はバリバリ仕事もしていたし、才能もあった人材であることの方が多い。　皆根はいい人たちばかりということもある。
　こう描くとものすごい差別的な発言になってしまうが、実際同じ

人間なのだからもっと寄り添いあうことが出来るんじゃないかと、俺はいつも思っている。
「まぁ、うちの店長もその中の一人なんだけどね」
誰に対してというわけでもなく、そう呟く。
国内外様々な音大から声がかかったにもかかわらず今の大学を選んだ理由には、そういうことも含まれているというのを再確認したのだ。
そうこうしているうちにもう”空”に着いてしまった。どうやらこの時間には珍しくお客さんがいくらか入っているらしい。

カラン

「はよざーっす」
「おはよう」
店長が最初に挨拶してくる。
「あー、馨だー。　遅いよー。　今日学校サボって何してたんだよー」
よくみたらなぜか灯までいる。　そしてめんどくさいことにいじけている。
「え、お前学校サボったの？　いけるうちに行っとけよー」
と、新見までいる。　というか、ＳＬＥＥＫが全員いる。
「…え、何これ」
頭上に特大の疑問符を浮かべながら、半分呆れ顔にならざるを得ない状況なのだった。

「灯ちゃん、いい子だねー、俺と付き合わない？」
「あははー、ごめんなさいねー今は楽器で精一杯」
「…」

よく分からない空間が生まれている。　ここって”空”だよね？
俺、来るところ間違えてないよね？
バックヤードで前掛けをして戻ってきたら、なぜかそんな会話が繰り広げられている。　友達が友達をナンパするというのはこんなにも複雑な印象を与えるものだったんだな。
ちなみにナンパしているのはＳＬＥＥＫのギターだ。
「あ、馨、ブレンドおかわり」
「…良いけど、お前何杯目だよ、ちゃんと払えよ？」
「払うよー、それにまだこれ三杯目」
どんだけ好きなんだよと問い詰めたくなる。　いよいよもって頭が痛くなってきた。
それでもちゃんと淹れてあげる俺。　優しいのだ。　『優しい』とは若干違う気がするが、とにかく優しいのだ。
「いつ飲んでも馨が淹れるコーヒーは美味いな！　コツとかあるのか？」
と、新見が聞いてくる。
「ひたすら練習、あと勉強、最後に豆選びのセンス」
と、本当のことをそのままそっくり教える。
「勉強って…豆の？」
「それも勿論だけど、器具の使い方から適正温度とかそういうのもろもろを含めた全てだな」
ちなみに高一から勉強しているにもかかわらず、まだまだ勉強することは山積みである。
「うはー、うちらで言う楽器みたいに勉強と練習がものを言うってことかー。　俺、コーヒーはやらないと思う…」
「のめりこむと危ないから、インスタントでいいんじゃん？　もしくは毎日ここに来て金を落とせ」
「…なんか不機嫌？」
「…そんなことないぞ？」
「…」

もう、よく分からない空気だ。
確かにイライラはしてる。なぜかなんて理由は分からないが、なんとなくイライラしてる。
原因は多分こうだ。
『灯が俺以外の男と楽しそうに話して、男は灯に冗談とはいえ告白をし、灯はそれを誤魔化すように断った』
どこがいけないというのか。
『イケナイ』部分なんてどこにもないじゃないか。
俺は何に対して納得できない。
何に対して憤りを感じている。

――なぜ、嫉妬している？

「くだらない」
「ん、なんか言った？」
「いや、何でも。　ほら、さっさと飲めよ、不味くなるぞ？コーヒーは淹れたてが一番美味いんだ。　俺の目の前でそれを逃すのは許さん」
そういって、自分の分も入れる。本当はこれはやってはいけないが、今店長は自分の立場を見失いつつあることに茫然自失となっているため、おそらく問題はない。
自分の淹れるコーヒーの味を確かめて、少し顔をしかめる。
香りが足りないこと。
深みが足りないこと。
いくつも要素があるのに、一つでもかけると一気にグレードが落ちてしまうのに、二つも欠けた結果こうなってしまうのだ。　まるでコーヒーを淹れ始めてすぐの頃のよう。
精神的な影響。

今、俺は、今までの人生の中でもこれ以上ないというほど、自分のことを精神的に追い詰めているらしい。
たった、五分足らずの会話で、これほどまでに自分を追い詰めることが出来るということを、初めて知った。

「さて、時間も時間だし、そろそろ帰ろうかな！」
と、灯が言う。
時計の針は八時ちょうどを指している。
「お、もうこんな時間か」
さっきよりは幾分苛立ちも収まったため、落ち着いてコーヒーを淹れることが出来る。　事実、今までにも数人の客が来たが、それぞれに出したコーヒーは悪いものではなかった。

…ただし、良いというわけでもなかった。

「今日馨ちょっと変だった。　大丈夫？」
「…ん、そうか？　そんなことないけどな。　むしろ新しいマッピ買ってご機嫌って感じ？」
感づかれたことにまた焦る。　変な部分で勘が鋭いんだ、灯は。
「ひょっとして、創立祭のこととかで疲れてるんじゃない？」
そんなのは関係ない。　むしろこっちから楽しんでやってるのだ。
「悩みあるなら、相談乗るよ？　役に立つかは別として」
と、灯はふざけた感じで話してくる。　灯のこういうキャラクターは場の雰囲気を和らげるという意味でとても良い。

だけど、そのとき俺は、全く別のことを考えていた。
何が不安なのか。
何が不安なのかすら分からない。

なんで悩んでるのか、想像もつかない。
灯がナンパされたという事実に対して苛立っているのか？
良いじゃないか。
灯は美人だし、モテないわけが無い。　そう考えたのは自分じゃないか。
なら何がムカつくんだろう。
心臓を鷲掴みにされて、肺を思いっきり殴られて、腹を全力で蹴られて、息が出来ないような、そんな感覚。
「馨？」
灯に呼ばれるまで、そんなことを考えていた。
「ん、どうかした？」
「いや、今日は疲れてるのかなって」
だから、そうじゃない。
「大丈夫だって」
誰も理解なんか出来ないんだろうな、このキモチは。
なぜか分からないけど、そんな風に思っていた。

act 1 ― 8

「あっはっはっはっは！」
「…何が面白いんですか」
一応断っておくが、ここは校内にある図書館である。
こんなに大声を出して笑うような空間では、断じてない。
そらみろ、周りの人たちがすごく迷惑そうにこっちを見てるじゃないか。　ちょっとは周りを気にしてください。
「ていうか、ちょっと声大きいですよ」
「ははは…あぁ、ごめんごめん、ついつい」
そういって、やっと笑いをこらえてくれる。
「君はどうしてそんなに不器用なんだろうね」
「は？」
「いやいや、ケンカを売ってるわけじゃなくてね？　ただ単純にそう思っただけなんだけどね」
「それをケンカを売るというんですよ純さん」
つまり、先日の一件から胸につかえているこのモヤモヤをどうにかするため、年長者である純さんに相談をもちかけることにしたのだ。　勿論、『灯の来年』という話題にすり替えてそれとなく、だけど。
…若干場所の選び方を間違えたような気がしないでもないが。
「でも実際、灯じゃ実力不足なんじゃないですか？　意識も足りてないような気がするし」
「今聞いた話だけじゃ判断できないよ。　だって、私は灯ちゃんが毎朝早くから部室にこもって基礎練習してるところしか見てないし」
頬杖をつきながら純さんは言った。
「毎日？」
「そ、毎日」
「いつも朝早くから来て、授業が始まる直前まで腹式呼吸、ロング

トーン、リズムトレーニングなどなどもろもろを一通り真剣に全力で取り組んでから授業に出てるよ」
　それは知らなかった。　過去に一度だけ見たことはあったが、それっきりだった。
「つまり君のは、ただのヤキモチなんだよ」
「その心は？」
「その心も何も、君が一方的に灯ちゃんにヤキモキして、灯ちゃんはそれにちょっと戸惑ってるかな？　って言う印象しか受けないかなー」
　小さな子供に諭すように、穏やかに話す純さん。　しかしながらそんなことを言われて冷静でいられるほど俺は大人ではない。
「そんなわけないです」
「どうして？」
　と、純さんは問いかけてくる。ちなみにこのときに実は純さんによる誘導尋問の始まりだったのだが、残念ながらこれに俺が気付くのはずいぶん後になってからだった。
「灯は親友ですから」
「親友だからって、そうやってちょっと顔見知り程度にしか知らない人から告白されてヤキモキする？」
「それは…するんじゃないですか、俺がそうなんだから。　大体顔見知りじゃなくて友達です」
「へー。　でもさ、顔見知りも友達も些細な違いだと思うよ。　それに、仲が良い人が自分の知り合いから告白された程度では、そんなに動揺したりしないんじゃないかな？」
「動揺？　別に動揺してるわけじゃ…」
　ビシッ！　と、効果音が聞こえてくるかのような速度で、純さんが俺の鼻のてっぺんめがけて人差し指を突き出してくる。
「いーや、動揺してるね！　私のセンサーは今君の動揺をビンビン感じ取ってるよ！」
「いやだから別に動揺なんてしてないですよ」

大体動揺も何も、自分でも自分の中にあるこの気持ちに対して、形容する言葉が見つからないのだ。　それをただ『動揺』という一言で片付けてしまっていいのか、判断できない。
「君は音楽はものすごい感情的にやるくせに、それ以外のこととなると一転して理性的に動こうとするね。　それで自分の本当の気持ちを隠してしまっているんじゃない？」
「それは…」
否めないが。
「そんな理性的に動こうとする君が、どうして出会って間もない灯ちゃんとあんなに仲が良いんだい？　だって知り合ったのは大学に入ってからでしょ？」
「そこは違いますね。　知り合ったのは大学に入る前です。それと、灯と俺は最初からあんなに仲が良いわけじゃないです。　うちの店にたまたま入ってきて、そのときたまたま一人で働いてたのが俺で、コーヒーを淹れてあげて、それを美味しいって言ってくれて、その後も飲みに来てくれて、それでやっと仲良くなってきて、気付いたら同じ大学の同じサークルで一緒にバカやってたってだけで…」
と、なぜか笑いを堪えている。　すごく面白そうだ。　出来ることなら混ざりたい。
ちなみに、このとき、俺は完全に餌に食いついた狼状態だったらしい。
「…い、いや、なんか、すごいね君」
「いやもう何がなんだか訳が分からないんですが」
と言うと、突然純さんが姿勢を正して、
「ようするに君は灯ちゃんのことが大好きなんだね」

と、言った。
すごく楽しそうに、そして『答えが見えた！単純明快だったじゃん！』と言わんばかりのすがすがしい笑顔で。

「…ん？」
呆然とする。　なぜ、そんな結論に至るのか、小一時間ひざとひざを突き合わせて酒でも飲みながら本気で語り合いたいくらいだ。
俺が呆然としているのを見て、純さんは続けた。
「分からないかな？　口で言っても分からないかもネ。　つまりだ、君は親友としてではなく、女として灯ちゃんを見て、『自分が彼女にしたい人ランキング』を出会ったときからぶっちぎりナンバーワンで独走状態なわけだ」
何を突然この人は言い出したのか。　まったくもって理解が追いつかない。
「それは一体」
「おっと、私が言えるのはここまでだよ！」
「はぁ！？」
全てを投げっぱなしにして純さんは俺をほったらかしにするつもりらしい。
「私は今君にすんごいでっかいヒントを与えた。　これ以上ヒントをあげちゃうと君が成長する機会が失われちゃうからねー」
そういってテーブルの上にあったかばんを手に取る。　このまま帰していいのだろうか。　まだ疑問は残ってるんじゃないのか。
…いや、そもそも疑問だらけだ。
「俺には、どうもその考えが理解できないです」
「今は理解できなくてもいいんだよ。　絶対近いうちに分かるから！」

と、これ以上ないって言うくらいのウインクを決めてくる。
「そういうもんですか」
「そういうもんなんだよ」
確か、前にもこういうやり取りがあった気がする。　主に俺のすぐ傍で。　俺がよくいる場所で。
「それじゃ、私は授業あるからー。　ばっははーい」
そんな二世代くらい古い挨拶を言いながら、純さんは図書館を後にした。
「…」
自分から誘っておいて、かつ相手の性格も把握しておいて言うのもなんだが、やはり嵐のような人だ。　だが、何か重要なヒントを得たような気もする。
席に座りなおして、もうちょっと考えることにした。
自分の抱えている、この切なげな感情について。
否定したいのは山々だけど、どうにもそういうことらしいし、自分でもうすうすは感づいていたことについて。

――つまり。

――――俺と、灯の関係について。

act 1 ― 9

「でさー、十六拍伸ばして四拍吸って、って言うのでもっと音を安定させたいんだけど、コツ教えて！」
「俺はダブルリードどころか木管すらやったことないんだから、そんなの分かるわけないだろ」
日曜日の昼下がり。場所は”空”。
なぜか開店と同時に灯が入ってきて、俺に対して演奏技術を伸ばすための質問をしまくるという事態になっている。
確かに日曜日は暇だけど。　でもずっとお客さんと話していて良いというわけでもない。　一応テーブル拭きや皿洗い、床磨きに窓磨きに豆の在庫チェックと発注、などなどエトセトラの多種多様な仕事が待っているのだ。
「でも、ペットとオーボエならつながるところはあるでしょ？　同じ管が細い楽器同士さー」
足をばたばたさせながら灯が言う。　ガキっぽい。
「まあなー…とりあえず、腹筋鍛えろ」
「やだ」
「どうして」
「腹筋割れちゃう。　女の子としてそれはどうなの」
確かに、女の子で腹筋が割れているのはあまり見栄えが宜しくはない気がする。　女性で腹筋が割れてて良いのは陸上選手など、本気でやっているアスリートくらいで充分だろう。
「でもある程度は仕方ないだろ？　ちょっと鍛えてみるだけでもぜんぜん変わってくるから、とりあえず毎朝走りこむのが一番効果的だ」
もっともな意見だと自分でも思う。　しかしそれで納得するような灯ではない。
「いや、鍛えすぎるのは良くない！」

「鍛えすぎなところまで鍛えろなんて誰も言ってねー」
「いや、聞こえたね。　最近冷たいよー？」
「そんなことねーよ」
いや、どきり、とした。
顔には出ていないと思う。　でもとぼけているようでしっかりと人を見ている灯のことだから、何かしら感づいてしまうかもしれない。
「そんなことないけど、コンミスになるんだったらそれくらいは出来ないと、演奏を預けられないだろ？　コンミスって言ったら指揮者の次に権限持ってる人なんだから」
「それ内容聞いたけど、ただの中間管理職的なイメージしかないんだけど」
確かに、コンミスになれば部員の意見をまとめて、指揮者に伝えることや、時には指揮者と対立してまで演奏を良い方へと持っていこうとする度量も必要になってくる。そういう意味では中間管理職的なイメージがついてしまうのも当然といえば当然なのかもしれないが、
「それでも、コンミスは誰よりも上手く、誰よりも努力して、信頼されなきゃいけないんだよ」
と、本来灯が聞きたかったであろう答えとは別の、正論を言う。
「…やっぱり」
と、灯が呟いた。　注意していないと聞こえないくらい小さな声で。

灯が帰るちょっと前に、新見が遊びに来た。
「よーっす、コーヒー飲みに来たー」
「いらっしゃい」
「じゃあ私そろそろ帰るね」

「ん、そうか？　じゃ、いつもどおりで」
いつも通り、三百円を置いて灯が出て行く。
「…？」
新見が何か不思議なものを見たかのような目をして、自分がたった今入ってきて、灯がたった今出て行った扉を眺める。　こいつも勘が鋭い。
勘が鋭いから、現実をズバッと一刀両断してくる。
「君ら、ケンカかなんかしてんの？」
こんな風に。
「いや、してない」
「ホントか？　馨が忘れてるだけなんじゃないの？」
「ホントだよ」
ホントじゃない。　心当たりならある。　悪いのは多分俺で、それを灯は自分のせいだと誤解している。
そして目の前の新見は、俺のこの正体不明の感情を引き起こした原因の人間と同じバンドを組んでいる。　ここまで状況がそろっていて、この男が気付かないわけがないのだ。
だけど、それを解決するのは今じゃなく、俺の気持ちが全て片付いてからじゃないといけない。全部片付けて、洗いざらい清算するときが、謝るときだと思うから。
いつもの新見なら、この後も引き続き内容を聞いてくるはず。そう身構えていたが、
「そっか」
とだけ言って、追求してこなかった。　触れられて欲しくないところだということを肌で感じ取ったんだろう。
それが出来るのが新見という男で、そういう繊細な感情を理解し、表現できるからこそ、ＳＬＥＥＫというバンドは歌で有名になれるのだ。
「まぁ、とっとと解決しろよ？　とりあえずコーヒー」
と、席に着いて、いつものように注文してきてくれるのが、あり

がたかった。

「ふぅ…」

珍しく閉店後に店長とゲームをしてしまった。　最近はあまりなかったけど、バイトに入りたての頃はよくやっていたから、少し懐かしかったこともあってか盛り上がった。　まぁそのせいで家に着く頃にはもう十二時を回っていたけど。

とりあえず一息つくためにコーヒー用のお湯を沸かす。　その間にパソコンの電源を入れ、メールをチェックする。

と、灯からメールが来ていた。

灯は普段はメールにタイトルをつけない。　めんどくさがりだからだ。

その灯が、

――『ねぇ』

と、タイトルを打っている。

ドクン、と。　心臓が飛び跳ねた気がする。

しばらく身動きが取れなかった。　お湯が沸いたときの音にビックリするまでは、一歩も動けなかった。　手には汗。一体何のようだろか。

とにかく今は沸いたお湯を無駄にしないためにもコーヒーを淹れて、少しでも落ち着くべきだと、頭の中でもう一人の俺が警鐘を鳴らしている。

（灯が、わざわざタイトルをつけてメール？）

とは言ってもコーヒーを飲んだくらいでこの焦燥感が収まるわけ

がなく。
意を決して開いてみる。
そこには、

――『ほんと、なんかあったでしょ。　今日のコーヒーも味が違った』

俺はそのメールを見たとき、衝動的に電話をかけてしまった。
やめておけばよかったと、電話を切ってから後悔したんだ。　だけど後悔先に立たずという言葉があるとおり、電話をかける前に後悔することは出来なかった。

『…もしもし』
「灯か？」
『そうだけど…ケータイにかけてるんだから確認する必要なくない？』
なぜだろう、そんな言葉にもイライラしてしまう。
「どうでもいいだろそんなこと。　そっちこそ意味わかんねぇメール送ってきやがって」
そんなことを言いたいんじゃない。
『でも、本当にそう思って心配してるんだから仕方ないじゃん。相談してよ、力になれるかは分からないけど――』
「なれるわけないだろ」
電話の向こうで、灯が息をのむのが伝わってきた。
『…どうしたの？　いきなり声低くなって、ちょっと怖いよ』
「うるせぇな、関係ないだろ」

初めて、灯のことを「うっとおしい」と感じた。
それまでは二人で会話しているときにそんな感情はなくて。
ただ自分をさらけることが出来て。
楽しくて。
そんな関係がずっと続けば良いと思った。
そんな関係を、俺はいま、ぶち壊しにしようとしている。
『そんな言い方…！』
「大体だ、お前は俺のなんなんだよ？」
そうだ、なんなんだ。　恋人でもないくせに。　自分で自分を擁護する。
『私は、馨の親友だよ』
「あぁ、そうだな、恋人でもなんでもないよな」
『…何、言ってるの？』
何言ってるんだ、俺は。
自分でも意味が分からない。
でも、あのメールが来た時点で俺の心の壁は完全に崩れ去っていて。
流れ出る濁流が言葉の暴力に変わってひたすらに灯を攻め立てる。
「俺、お前と仲良くしすぎたかもな」
『…はぁ？』
「お前が俺にべったりくっついてくるせいで、お前のこと狙ってるやつとかがお前にちゃんとアタックかけられないんじゃないか？
こないだだってＳＬＥＥＫのギターと普通に仲よさそうに話してたけど、あいつお前のことホントに好きそうだったぞ」
何を言っているんだ。　あることないこと。
そんな話は聞いていない、作り話だ。
でもあの時、俺はそう感じた。
大体灯ほどの女を放っておく大学生がどこにいる？
男なら、と思うだろう。
なんで灯の浮いた話が一個も出てこない？

そんなの決まってる。

俺がいるからだ。

「もうさ、俺にべったりするのやめろよ。　大学に入ってからもうだいぶ経つんだから、俺以外のやつと遊ぶことも覚えろよ」
『……』
「俺と一緒にいても音楽しかないぞ。　あ、コーヒーはある。　でも恋も出来ない、勉強も疎かになりかねない、下手したら」
『もういい』
「あ？」
『もう良いよ…やめてよ…』
「…」
『分かったから…』
泣いている？
『ごめん、らしくなかった』

そう言って、灯は電話を切ってしまった。

act 1 ― 10

私は、いつも通りでいたつもりだった。
確かに、いきなり『来年度からコンミスだよ』と言われて、少し緊張していた。　それと少し浮ついていた。
今までの努力が報われたことと、過度の期待をかけられていること。
このたった二つの事実のせいで、私は自分を見失いかけていた部分があった。
それでも、なんとか体裁を保っていられたのは馨のおかげだった。
馨が淹れてくれるコーヒーは、ガチガチに固まっていた私の心を解してくれた。
馨と話していると、浮ついた気持ちがいくらか落ち着いてくるのを感じた。
何より、馨と一緒にいるだけで、今までにないくらい物事が楽しく感じられるのを、私は実感している。
だから、大丈夫。
私は今でも、初めて会ったあの夜みたいに、ちょと不思議だけど思ったことは素直に言える、ごく普通の女の子。
そう思っていた。

ある日、馨が学校を休んだ。
大学生なのだから学校を休むくらい良くあること。　最初はそう思っていた。
だけど、サークルまで休んだ。
後から考えたらいないと気付いた時点で先輩にでも聞けばよかったと思う。　後になって聞いたのは、馨はあの時新しいマウスピー

スを買うために楽器屋に行ったから、サークルを休んだという事実。

――なんで、こうなっちゃったんだろう。

それで、いつもならサークルの後はバイトに来るはずだから、楽器屋に行った後バイトするために”空”にくるだろうと思って、私も”空”に行った。

そうして入ってみたら、ＳＬＥＥＫの人たちがいて。

馨が普段から仲良くしている人たちだから、どういう人たちなんだろうと思って、話しかけてみた。

バンドをやっている人たちって、怖いイメージの方が強かったけど、実際にはそんなことは全然なくて、同学年よりも　ちょっと考え方がシビアな、同じ子供だった。

それでなんとなく雰囲気が変わってきて、恋愛の話になって。

馨が来たけど私もちょっとその話に夢中になってて、適当な挨拶しか出来なくて、本当に聞きたかったことはぜんぜん聞けなくて。

そして、馨が出てきたときに、冗談みたいな告白をされた。

――こんなの、望んでなかったよ。

馨はそれを聞いてから、態度が変わって。

頼んだコーヒーは、いつもの、ほんのり苦くて深みのある味じゃなくて。

苦くて。

苦しくて。

馨が苦しんでるんじゃないかって思って、私も苦しくて。

いつもだったら恋愛話に夢中になることなんてなかったのに、どうしてあの時は夢中になっていたんだろうって思う。
他人の恋愛の話を聞いて、自分の恋愛を話して、違うところを見つけては盛り上がって。

――『ごめん、らしくなかった』

それからも、馨の淹れるコーヒーはずっと苦いまま。
だから、馨が苦しんでるって分かる。
だから、私も苦しい。
多分、悪いのは私なんだ。
もっと強い心を持っていたら。
どんなプレッシャーも跳ね返して踏み潰して、その経験を丸ごと自分の中に取り込めるくらいの、強い強い心を持っていたら。
きっと結果は違った。
きっと、全ては今までどおり。
入学したときのあの瞬間から何一つ変わらない日々が待っていたはず。
そう思うと、私はいてもたってもいられなくて。
馨の心を、少しでも楽にしてあげたくて。

――好きだったのに。

『何で灯ちゃんは、いつも馨と一緒にいるのさ？』
と、新見君が聞いてきた。
『それを聞いちゃう？　しかも面と向かって』
少ししかめっ面をしてしまう。　そんなの、決まってるじゃないか。
『好きだから』
そう、決まっている。
初めて会ったあの日、なぜか苛立っていた私に対して、他の客と変わらない対応を取って、ちゃんと美味しいコーヒーを飲ませてくれた彼だから。
大学は決まったものの、新しい生活の全部が不安だった私と一緒に、あれこれ悩んで、笑って、喜怒哀楽を共にしてくれた彼だから。
そんな人を、誰が放っておく？

『…ハッキリ言うねぇ』
少し驚いた顔をして、新見君が言った。　驚いてはいるけれど、その表情を見れば分かる。
『何で嬉しそうなの？』
『だって、馨のことを好きになる女の子がいるんだなって』
『え？』
『あいつの性格、考えてもみなよ。　自分の興味のないことには大して振り向こうともしないくせに、自分が好きなことに対しては全てを投げ捨ててでも本気で立ち向かっちゃうでしょ？　いつか自分を捨てるかもしれない男なんて、付き合えないと思うよ』
新見君は言う。　完璧な分析だった。　確かに馨にはそういう面があって、それが他人との壁を生んでいるような気がする。　すご

く仲の良い友人に見えて、馨は相手のことを何一つ知らなかった、ということなんてザラだと、馨は自分で言っていた。
『だから、灯ちゃんみたいに相手をよく見てる人が馨を好きになってくれるって事自体が奇跡みたいなものなんだよ』
『…そうなのかな』
『そうだよ』
いつになく真剣な様子で、新見君が言ってくる。　いつもは結構ちゃらんぽらんな性格をしていると思ったけど、こういう顔も出来るんだなと、感心してしまう。　それと同時に、自分が馨のことを好きになったことが本当に奇跡なんじゃないかと考え始めている。

――それも、今日で全部、壊れちゃったのかな。

結局、上手くいかないのか。
私の恋愛はいつもそう。

「……」

だけど、きっと悪いのは私だったはずだから。

「…ぅ…」

馨は私のせいで、辛い思いをしているはずなのだから。

「…ぅぁ…」

でも、今日くらいは泣いて良いよね？

そう、一人呟いてから私は、周りの迷惑を考えずに、声をあげて泣いた。

act 1 ― 11

「で、なんで君たちは崩壊してるわけ？」
イライラした様子で机を人差し指で叩く純さんから詰問される。
「どう考えても今回は馨くんが悪いよね」
加藤さんが腕を組みながら乗っかってくる。
「僕は男だけど、今回は擁護出来ないなぁ」
なぜか小野寺さんまで攻めモード。
「…いや、その通りなんですけど」
センパイ三人に囲まれて、しかも三人揃って正論、かつ厳然たる事実を言ってくるため、何も言い返せないで小さくなってしまう。
ここはサークル棟、Ｗｉｎｄ　Ａｎｓｅｍｂｌｅ　Ｋの部室。

「まったく、本当に不器用だね君は」
純さんはいまだにご機嫌斜めだ。
午前十時から続いた詰問かつ尋問かつネチネチとしたお説教は、午後五時になってようやく終わりを告げた。　悪い上司を持った平社員の気分を味わった気がする。　いや、今回の場合全面的に俺が悪いから、まったくもって何も言い返せないけど。
そしてせっかく相談に乗ってくれた純さんにコーヒーをおごるため、仕方なく”空”に向かっている。　そしてなぜか小野寺さんと加藤さんも一緒にいる。　まさか三人分おごらせるつもりなのだろうか。
財布の中身を頭の中で数えて、（やべぇ、足りるかな、もし足りなかったら給料から天引きにしてもらえるのかな、いやあの店長から金をせびるのは本当に申し訳ない気持ちになるし）などと皮算用しているうちに、”空”に着いてしまった。

「しまった、まだ金があるかわかんねぇ」
「何言ってんの、とっとと入るよー」
そう言って俺を無理やり中に押し込む。
「あれ、馨君、君今日は休みのはずじゃ…あぁ」
と、店長及びその他スタッフは、俺の後ろにいる三人を見て、一瞬で得心したらしい。　なぜ皆そんなにわかるのか、甚だ疑問だ。
「店長、この人たちにブレンド…・俺が淹れるから、まけてくれたりしません？」
「だめ」
「ですよね」
うなだれる。大学が始まってからも一度も手をつけていない『高校生が稼いだ七十五万円（所得税回収済み）』に手をつける必要がありそうだ。

出されたコーヒーを飲んで、少し落ち着いたらしい。純さんは先ほどよりは苛立ちも収まって、今では笑顔を見せることもあるくらいだ。
コーヒーのチカラは無限のコスモだ！（格言）
「さて」
ビクッ
「まだ終わってないけど」
ビクビクッ
「どういうことか洗いざらい吐いてもらおうかね」
「…やっぱりですか？」
この三人、やたら息がぴったりである。　まったく同じタイミングでコーヒーカップを置き、まったく同じタイミングで頷いた。

「…はぁ」
「なぜため息を」
「君のせいだバカ野郎！」
純さんのスナップの効いた手のひらが頭のてっぺんをクリーンヒット。　女性の細腕なのにやたら痛い。
「これは、多分今頃むせび泣いているであろう灯ちゃんの分」
「で、こっちが心配したうちらの分」
なぜか加藤さんはグーだった。　しかも頬。　小野寺さんが苦笑いしているところを見るに、良くあることなのだろう。　少なからず同情する。
「…分かってますよ、悪いのは俺だ」
「…」
ジト目で見てくる二人と苦笑する一人。　でもここで何も言えないようでは本人を前にして何かが言えるはずがない。
だから、俺は声に出す。
声に出さなければ何も伝わらないと知っているから。
「灯の様子がおかしかったことに気付けなかったのは俺のせいです」

最近、灯が妙に明るい。
そして、以前にも増してストイックになった。
いつもやっていたという朝の練習は、今までは6時からだったり7時だったり、時には8時だったりしたはずなのに、ついに開始時間が毎日いつも六時前になり、通常の練習が終わっても残って練習をし、休日でもお構いなしと言わんばかりに部室で一日中練習をする。　普段の授業などでもサボったりせず、しっかり勉強している。
これだけ聞くと、周りの模範となる優等生かもしれない。
だが、それは灯ではない。　灯の仮面を被った別の生き物だ。

本当の灯はいつも飄々としていて、自分が嫌だと思ったことは何とかしてスルーしようとして、でもなんだかんだで真面目にやってしまって、残った自分の自由な時間を”空”で過ごすような変わり者だ……と、思う。

『思う』だけど、それでもこれだけは確実に言える。

今の灯は、灯じゃない。

「そこまで分かってて、どうして？」

加藤さんがものすごく怒っている。

「…俺自身、気持ちの整理がついていないんです」

「「今つけろ」」

二人の女性の声がうまいことハモる。本当に息がピッタリだ。

「と、言われても…」

「はぁぁ、誰よこんな弱気なやつを指揮者にしようなんていったのは」

「あんただよ」

「そうだっけ」

純さんがとぼける。　場の空気が少し和らいだ。　さすがにやりすぎたと気が付いてくれたのだろうか。それとも、

「ごめんごめん、シリアスなのって苦手でさー。　部室でもすっごい頑張ってたんだよー」

…本当にシリアスが駄目なだけだった。

「でもね、本当に今しかないと思うよ？　これ以上は引っ張れないと思ったほうがいい」

「……」

「もう、灯ちゃんは限界だよ？」

「…そんなこと」

言われなくても、分かってる。

どう考えても、灯のそれは空元気なのだから。

「自分に何が出来るか、ちゃんと考えな？」

そう締めくくって、長い一日が終わった。

act 1 ― 12

自分に何が出来るか。
学校に行かず、一日中ずっとそのことを考える。
寝る時間すら削って、ずっと考えて。

結局灯のところへ行ったのは、次の日の夕方になってからだった。

「うわー、良い所住んでんなー」
思わず言ってしまう。　家賃にして大体十万弱ってところか。
学生が住むようなマンションではない。
「もしかして、お嬢様？」
などと、緊張を紛らわすための独り言を言う。　マンションから出てきたまったく知らない赤の他人が、変なものを見る目で見てきたが、気にしている場合ではない。
（今日決着をつけるんだ）
そう決めて、ここに来たのだ。　以前聞いていた部屋の番号を、オートロックの入り口にある機械に打ち込む。
しばらく待って。
『あれ、馨？』
久しぶりに聞く、空元気でない素の灯の声。
機械を通してだけど、それはひどく懐かしいような気がした。
「よかった、部屋にいてくれて」

そう言う。
「ちょっと話があるから」
大事な話が。
「上がらせてくれ」
必要なことだから。
『うん、良いよ』
と、軽い調子で言った。
入れてくれないかもしれないとか心配していたのがバカみたいなくらい、軽い。
それと同時に、オートロックのガラス張りの自動ドアが開いた。
中身もすごく高級な感じだ。　名前は忘れたがどっかの有名なデザイナーが手がけたテーブルが普通に置いてあって、その横にも同じデザイナーのカウチソファが置かれている。　ここだけで既に五十万円近いはずだ、記憶が正しければ。
さらには壁に絵が飾ってある。　フランスあたりの有名な画家のレプリカなんだろうが、レプリカといえども高級品であることに変わりはない。
（改めてすごいところだ）
なぜか無性に感心してしまった。

「お邪魔しまーす」
「どーぞどーぞ」
そう言って部屋に入る。　部屋の中はメチャクチャキレイに整理整頓されていて、これまたデザイナーらしいソファとテーブルが鎮座している。　それでいてその二つが自己主張するのではなく、全体と調和が取れている。例えば本棚などはその辺に適当に売っているカラーボックスだったりするのだが、これがものすごい高級品に見えてくるというマジック。

「何か飲む？　コーヒー…は馨が淹れたほうが美味しいか」
「いや、灯の淹れたコーヒーなら飲んでみたいかな」
「そう？　じゃぁちょっと待ってて、今ちょうど淹れようとしてたんだ」
そう言って、キッチンへ向かう。　いつもとあまり変わらない様子だ。
「……」
荒れてる様子は、ない。　灯のことだから、バレないように上手く隠しているのかもしれないけど。
「聞いてよ、今日ロングトーンですごく調子が良くて、いつも出来ないところまで出来たんだよ」
「…へぇ、すごいな」
でもそれは偶然だ。　練習に偶然はありえないけれど、それでも偶然なのだ。
今の灯にとって、音楽は逃避でしかないのだから。
「すごいでしょ？　他にも…」
そうやって話し続ける。　まるで、話をしていないと自分が壊れてしまうかのように。
いつも通りに見えて、やっぱり灯は『灯』ではなかった。　それを認識してしまうと、心が痛む。
こうなったのは俺のせいなのだから。
だから。

――俺が、やらなければいけない。

「それでね…って、馨聞いてる？」
「灯」
立つ。
灯の体が微かに震える。
「もう、良いんだ」
そう言って、灯のそばに向かって歩く。
「…何が」
灯は動こうとしない。
「もう、無理しなくていい」
だから、傍に行く。
歩き続ける。

「やめて、無理なんかしてないんだから」
そんな言葉は聞きたくない。
見るからに痛々しい笑顔で、そんなことを言うな。
「俺さ、ちょっと意固地になってた」
そうして、灯の隣に立つ。
「……」
隣に立つと、灯は小さく見える。　もともと身長差はあったけど、それだけじゃなく、灯が小さく見える。
こんなになるまですり減らさせてしまったのは、俺だ。
「色々考えたんだ。　どうしたら良いんだろうって。　大学入って少しは大人になれたかと思ったけど、やっぱりまだまだガキだから、何にも思いつかなかった」

「…何を言ってるのか、わからないよ」
親に叱られている子供みたいに、灯が震えている。
「それでいいんだよ」
「え？」
どうして？　という顔で、灯がこちらを見上げる。
思えば、ここに来て初めて、お互いの目を見て話をしている。
それだけじゃない。　目を見て話をすること自体が、ひどく懐かしい。
「俺にも何を言ってるのか分からない」
苦笑いする。
「…なにそれ」
灯も苦笑いした。
「つまり、俺が全部悪かったって事なんだよ」
「それは違う」
いきなり話の腰を折られた気分だ。　灯は話し続ける。
「ゴメン、嘘ついてた。　私、無理してる。　ホントは今練習頑張ってるのも…違う、練習頑張りすぎてるのも、逃げだし、ものすごい元気に見えてるとしたらそれも空元気だし、天真爛漫に見えたらそれは『天真爛漫な穂積灯』って言う仮面を被ってるだけ。　いきなり来年からコンミスだよって言われて、嬉しかった。　大学から始めたばっかりなのに、認められたのが嬉しかった。　でも、それと同時にすごく不安だった。　出来る自信もなかった」
そこまで一気に言って、少し落ち着いたみたいだ。　それでも少し興奮している。
「ちょっと、座ってろよ灯。　続きはあっちで聞くよ」
「うん…」
素直にリビングに戻って、ソファに座ってくれる。　そういえばコーヒーを淹れようとしていた、というのを思い出して、断りを入れてからキッチンで沸いているお湯を使ってコーヒーを淹れる。
「お待たせ」

灯の前に淹れたてのコーヒーを置く。
「ありがと」
口をつける。
「美味しい。　味、元に戻ったんだね」
「気付いてたか」
やっぱり、俺の淹れるコーヒーを一番飲んでいるだけあって、ちょっとした違いでもすぐに気付いてしまうらしい。　あの日からずっと、動揺していたのはバレていたようだ。
まぁ、だからこそ、こんなことになっているわけだけど。

「それでね」
コーヒーを飲んで落ち着いたのか、灯は続きを話し始めた。
「あぁ」
「それで、コンミスをしっかりやり遂げる自信がなくて、ものすごく不安だった。　でも、馨と一緒にいれば安心出来た」
「俺と…？」
「うん。　馨はいつも美味しいコーヒーを淹れてくれて、いつも私と話をしてくれて……いつも、一緒にいてくれた」
「……」
「馨と一緒なら私は大丈夫って、そう思えたんだ」
自分の中身をさらけ出すのは恥ずかしいものだ。　灯は案の定、顔が少し赤くなっていた。
「…そっか」
「驚かない？　いきなりこんなこと言われて」
「正直、ものすごいビックリしてる。　けど、それ以上に嬉しいんだ」
そう、俺は今、灯に頼られていて、それがたまらなく嬉しい。
「だけど、あの日から、馨が私に対して今までとちょっとだけ、ほ

んのちょっとだけ違う視線を向けてくるようになって」
灯と新見たちが”空”で話をしていたときのこと。
その日から、俺の灯を見る目は、ほんの少しだけ変わった。
そんな微妙な変化ですら、灯は読み取っていた。　出会ってからたった半年程度なのに、そこまで相手のことを知っている。　どうして灯はこんなに俺のことを知っているんだろうか。
「それで、あの電話で気付いたんだ。　私、ずっと馨に依存してたんだって。　もしかしたら馨はそれが疎ましいんじゃないかってことにも。　結局、一人で舞い上がってただけだったんだ、って」
「それは」
「言わせて」
と、強い口調で言われる。
「それで、もう嫌われちゃったんだって怖くなった。　馨に嫌われたら、どうしたらいいのか分からない。　すごく悩んだ。　周りには見せないようにしてたけど、本当に悩んで、夜も眠れなくて……。
それで……」
「音楽に…」
うん、と、灯がうなずく。
「もう、駄目なんだろうなって、一人で自己完結して。　なら、一人でも大丈夫なように。　一人でもちゃんと出来るんだよ、っていうところを見せれたら、またもとの感じに戻れるんじゃないかなって思って」
「…うん」
灯がそこまで考えてくれていたことに、素直に感動している。
「だから、これから馨が何を言っても、私は大丈夫。　覚悟、出来てるから」
そう言って、締めくくった。
灯は腹を割って話をしてくれた。　なら、今度腹を割って話をするのは俺の番だ。

「灯はさっき、俺と一緒にいると安心するって言ってくれたけど」
色々悩んだ結果、まずそこから話をすることにした。　こうやって、お互いの溝を少しずつ埋めていこう。　大丈夫、時間はまだある。　灯はもう壊れそうだけど、溝を埋めることが灯を元に戻していく。
そう信じて、俺はゆっくり、話を進める。

いろいろなことを話した。
灯と一緒にいると安心するということ。
灯がＳＬＥＥＫのメンバーに（冗談とはいえ）告白されたときから、俺の中の何かが変わったこと。
それがコーヒーの味にも出て、さらにイライラしてしまったこと。
先輩に相談して、大きなヒントを貰っても、俺の中で考えがちっともまとまらなかったこと。
そうして悩んでいるうちに、あのメールが届いたこと。
メールを見たとき、ぎりぎり保たれていた心の壁が崩れてしまったこと。
それが原因で灯にひどいことを言ってしまったこと。
そのことで俺が悩んでいるとき、先輩から怒られたこと。
こうして久しぶりに面と向かって話をして、やっと答えが見つかったこと。
「答えって？」
「俺の気持ち」

くすぶり続けていたモヤモヤ。　でもこれはまだ告げるわけにはいかない。
「今は教えてくれないの？」
と、ものすごく保護欲をそそる表情を見せてくる。
「調子出てきたな灯」
「あ、バレた？」
多分、灯はもう大丈夫。　だから、俺ももう大丈夫だ。
「うちのバンドの演奏、見に来いよ」
「楽しみにしとく」
根本的な解決には、もっとふさわしいステージがある。
俺たちが共通して持つ場所がある。
だから俺は、俺の一番得意なことで、灯への気持ちを伝えよう。

（まさか、親友に恋することになるとはね）

意外すぎる結果だが、そうなってしまったのだから、仕方ない。
返事がどうなるかはまだわからない。
その答えは五日後に控えた、創立祭で。
創立祭のステージの上で、知ることになる。

「しかし、馨が先輩に怒られないと気づかないくらい奥手でお子ちゃまだったとはねー」
「やかましい」

act 1 ― 13

ついに、この日が来てしまった。
ここ最近ずっと灯との事で悩んだり悩まされたり怒られたりしていて、なんだかんだで練習を疎かにしていたせいか、音が遠くに飛ばなくなっていたり、譜面が簡単すぎるからハードルを上げよう！
という話があったことを知らずに一人だけまったく違うことをしていたりと、本番直前まで缶詰みたいになって練習していた。
でもまぁ、音楽をやる以上は手を抜きたくない。　それは信条というよりも、もはや俺の信念であり、生きて行くうえでの基本理念みたいなものになっていた。
それに今回のステージは、なおさら手を抜くわけにはいかない。
いつもとまったく違った意味合いで、とても重要だから。

「馨、気合入ってるなー」
と、新見が言ってきた。
「当然！　こんな楽しいステージ、他のどこもやってないからな！」
「いいねいいねー！　やっぱ祭りだし盛り上げてかなきゃな！」
そう言って新見のテンションがうなぎのぼりになっているのを尻目に、今日ステージに昇る皆を見渡す。
総勢八人、大所帯のバンドとなった。　集まってくれた皆に感謝しなければならないだろう。　そう思って、自然と頭が下がった。
「みなさん、この日のためだけに集まってくれて、ありがとうございます！」
礼をする。
なぜか誰も話さない。
何か悪いこと言ったのか？　俺。

なんだか怖くて顔を上げることも出来ない。
チラッとみんなの顔を覗き見てみる。

――一様に、ニヤニヤしていた。

「そんなどうでもいいことよりもさー、灯ちゃんとちゃーんと、仲直りしたんだってー？」
先輩がそう聞いてくる。情報が回るのが早い。
「どうでもいいことって…というか誰から聞いたんですか」
「ぶっちゃけ、ウインドの中は皆安堵しているのだよ」
「二人は仲良くなきゃねー。　一緒にいない二人を見てるとスープのないラーメンを食べてる気分になるの」
「それは言い得て妙やな」
ウインドの先輩は皆が皆口をそろえて「よかったよかった」と言っている。
「…どうやら心配をおかけしたようで」
「うん、まぁ毎年一組くらいはこういうのいるから大丈夫だよ」
ウインドは内部でカップルが発生しやすい場所のようだ。　確かに練習が多いから一緒にいる時間も長いし、つまりそれだけお互いのことを知る機会が多いということで、中だけで充分にカップルになりやすいのだろう。
「じゃぁまぁ、俺がこのステージでそういう関係のちょっとバカみたいなことをやっちゃっても大丈夫ってことですかね」

空気が固まった。

「…え、駄目？」
「……」

一様に固まってしまっているので、計画の練り直しが必要になったかと思ったが、
「で、うちらは何をすれば良いの？」
と、協力してくれるようだ。
「あ、いや、特に何かして欲しいってわけじゃないです」
「なんだつまらん」
興が醒めたかのように皆のテンションが落ちていく。　なぜかＳＬＥＥＫの面子までテンションが下がっていくのを感じる。　むしろお前ら関係ないだろと。
「何もしなくて良い分、何も考えずに演奏楽しみましょう」
といって、なんとかテンションを持ち直す、舞台裏のぐだぐだな風景であった。

『お待たせしました！　この日のためだけに学内外の最強メンバーで作られた最高のスカバンド、ＷＩＮＤＣＯＲＥの登場です！』
オオオオオオオ、という歓声の中、ステージの上にメンバーが入っていく。あらかじめリハでセッティングしたときの状態になっているため、手間が省けてやりやすい。
エレキ楽器が素早くセッティングを済ませ、ドラムがカウントを取る。
俺は今までに感じたことのない高揚感を覚えていた。　これまでどんな場所に立っても緊張したことがなかったのに、今は程よい緊張感が体を満たしている。
きっとすごいことになる。そういう確信があった。

――そして、熱狂の三十分がスタートした。

『うちのバンドの演奏、見に来いよ』
と、馨が言ってくれたので、見に行った。　もうウインドの方のアンサンブルも終わっていて、あとは創立祭の後の打ち上げくらいしかやることがなかったことも理由のひとつだ。
それ以上に、馨から直接誘われたのが嬉しかったから、なのだが、口に出して言うのは恥ずかしい。　というか、デッドラインを超えそうな気がする。
同じアンサンブルにいた純さんも一緒だ。
「馨とは上手いこと仲直りできた？」
「仲直りじゃなくて、さらに仲良くなったんですよ」
「ほうほう」
詳しく聞かせろとばかりに身を乗り出してくる。　少し子供っぽい仕草を見せる目の前の到底届きそうにない大人に、
「ただ、二人ともちょっとずつすれ違ってただけだったんです。どっちも悪い、だから両成敗、ってね」
だからもうこの話はおしまい、と言わんばかりに正面を向く。そこには特設ステージの司会のアナウンスで、ステージの上に上がってくる馨たちがいた。
「お熱いこって」
と、純さんに言われる。
「ちょっと、純さん！？」
「あはは、顔真っ赤にしちゃってかーわいー」
こういうところがあるから子供っぽいっていわれるのだ。そこが

純さんの良いところでもあるんだけど。
「はいはい、そろそろ演奏始まるから静かにしましょうよ」
「何言ってんの。　スカなんだから前に出て踊らなきゃ！」
といって私の手を取ってずんずんステージの前まで行こうとする。
「え、いや、ちょっと良いですよ私は！」
「えー、そう？　じゃぁ私はガッツり踊ってくるわー」
手を離してくれる。　危うくこんな顔のまま馨の前に出て行くところだった。　それはなんとしても避けたい。
後ろの方に下がって、馨が見えるところに来る。　ドラムの人がカウントを取り始めた。曲が始まる。
その曲はものすごいロックだった。
いつもの吹奏楽とはぜんぜん違う、すごく乾いた管楽器の音に、私はビックリしてしまう。　ウインドの人はこんな音も出せるのかと、その多彩さに感心してしまった。
私の努力なんてたいしたことなかったんだな、と感じてしまうくらいに、皆が皆ある意味妬ましいほどの才能を持っていた。
一曲目が終わって、そのまま二曲目に入る。　二曲目はちょっと大人しい感じの曲になった。　それでもロックであることに変わりはないので、耳に来る音圧はものすごい。
普段はギターボーカルの新見君が、今日は自分の役目を管に任せてボーカルに専念している。　だからこんな曲も出来る。
ドラムもベースもリードギターも、いつも通り、いやいつもの何倍も上手く感じる。ライヴバンドだからだろうか。
二曲目も終わって、ＭＣが入るらしい。　一応今回の発起人という名目になっている馨が、マイクを握っている。
「えー、どうもこんにちは、ＷＩＮＤＣＯＲＥです」
歓声が上がる。　これでまた馨の知名度が上がっちゃうなぁ、と思いながら聞いている。　知名度が上がるのは馨本人としては若干不本意かもしれないけど。
そんな馨は、バンドのメンバーを紹介して回りながら、客席をち

らちらと見ている。　誰かを探しているみたい。
私だったらどうしよう、と考えていると、
「いきなり私事で申し訳ないですが、実は俺、好きな人がいます」
と、突然言い出した。
ビクッとなる。
「大学に入る前からの付き合いなんですが、最近少し気持ちがすれ違ってしまっていて。　先日やっと仲直りというか、元の鞘に納まることが出来たんですが、まだ伝えていないことがあるんです」
周りの音が消えて、馨の声だけが聞こえるかのような、そんな不思議な感覚がする。
勿論私がそんな風に感じてるとき、開場のボルテージは最高潮に達しているわけだけど。
「次にやる曲は、その人に贈りたいと思います。　この曲で元気を出して、これから先に希望を持ってもらえたら、嬉しいです。　あ、勿論皆さんも」
と、最後にふざけた感じで言うと、開場全体が笑いに包まれる。
私はそれどころじゃなくて、あの時言っていたサプライズがまさかこんな形で訪れるなんて想像もしていなくて。
「それじゃ、聞いてください。　オリジナルです。　『風』」
だから、最後に馨と目が合った瞬間に、自然と一粒、涙がこぼれた。

俺が出した答えは、やっぱり好きな人にはプレゼントをしなければいけないな、という、ひどく安直で、ある意味当然のものだった。
ＭＣ用のマイクを渡されて、バンドのことを紹介しながら、ずっ

と会場のどこかにいるはずの灯を探していた。
全然見つからなくて、もうＭＣはほとんど終わっていて、これ以上引き伸ばすのは無理だと思った。
だから、あんなこっ恥ずかしいことを言って、場を取り繕った。
この台詞はリハのときも言っていなかったから、バンドのメンバーも皆がビックリして固まっていたようだ。
勿論、俺はそんな面白そうな様子は見ている余裕はない。　目の前にいる灯に思いを伝えるので精一杯だったからだ。
多分、思いは伝わったと思う。　というかモロに好きな人がいます、って言っちゃったし。
こんな大舞台で、名前を出して告白なんて、この個人情報保護法がはびこる世の中では絶対出来ないし恥ずかしいので、大変だった。
だから、言いたいことは全て歌に乗せて。
歌うのは俺じゃないけど、俺が人生で初めて書いた歌だから、人生で初めて好きになった人に贈りたい。
風はきまぐれにその矛先を変えて、時には人に暴力を与える。
でも、傷ついた人を優しく包み込むことも出来る。
そんなきまぐれで自由奔放な、灯のような風。
この歌は、俺の好きな人のことを歌った歌なのだから。

気付いたら、大粒の涙をポロポロとこぼす灯の姿があった。
だけど悲壮感は漂っていない。
目は必死に見開いて、少し自意識過剰かもしれないけど、まるでライヴをする俺を一度たりとも逃すまいと目に焼き付けているかの

ようで。
その姿を見るだけで、俺は満足だった。
連日の徹夜で体はボロボロ、満身創痍で今にも倒れそうな状態で望んだステージだったけど。
そのとき、俺と灯は、本当の意味で心をつなげあうことが出来たんじゃないかって、そう感じて、自然と涙がこぼれ落ちた。

act 1 ― endroll

「ここはもっと表現を豊かに。　具体的にはこのフォルテピアノ、もっと音を小さくして、もっと大きく持っていってください」

現在、八月二九日。　時刻、十四時半。　場所、K大学から徒歩で十分程度の至って普通のホール。

俺は指揮台の上に立って、自分が指揮を振る曲について皆に指示を出している。

創立祭のライヴの盛り上がり方が異常であり、あの盛り上がりを作り上げたのは間違いなく俺だ、という純さんの意見から、普通は一年が終わってから指揮者を選び出す方式を採っているところを、予定を繰り上げて八月の終わりにあるサマーコンサートから指揮者としてステージに立つことになった。

灯は現在もコンミスとなるための修行中。　実を言うと実力的には充分すぎるくらいなんだけど、メンタル面と責任感という点でまだ先輩からは許可が出ていないのだ。

「よし、じゃぁこの曲はこんな感じでいきましょう。　お疲れ様でした」

自分の振る曲に満足できたところで、指揮棒を置く。　結局この場所に帰ってくることになったな、と、なんだか感慨深いものがある。

Ｗｉｎｄ　Ｅｎｓｅｍｂｌｅ　Ｋは、その名の通りアンサンブルがメインの団体ではあるけど、近年部員の増加によって、全体として合奏もやっていこうという形を取るようになってきたらしい。

その結果、指揮者の選任というシステムが始まり、俺はその三代目ということになる。　三代目とはいっても一代目と二代目はまだ学校にいるため、その二人と俺の合計三人の指揮者がいるということになる。　一応学生の本分は勉強のため、一人で全てをまとめ上げるのは荷が重過ぎるということだろう。

「はーい、じゃぁリハはここでいったん休憩にしまーす」
純さんの鶴の一声で、ホールの中の空気が一気に弛緩する。　ホールの中は飲食禁止のため、皆してロビーのほうに行って飲み物を飲んだり、タバコを吸う人は外の喫煙所に行ったりしているようだ。
俺自身はタバコは吸わないが、別に良いと思う。
と、灯が近づいてきた。
「私たちも、ちょっと外出ない？」
「だな」
そんな短いやりとりだが、そんな関係に戻ってこれたことが、今でも嬉しい。
それほどまでに、お互いこの関係を渇望していたのだ。
後ろの方でニヤニヤと純さんがカメラを構えていることにも気付かずにいるくらい二人の世界に突入してしまっていたのが運の尽きなのである。　ちなみにそのとき撮られた写真は後日サークルのメーリングリストにバッチリ流された。

「うーん、暑いー」
と、半そでに短パンという格好でいかにも涼しげな灯が言う。
「その格好すっげぇ涼しそうなんだけど」
対する俺は半そでの白シャツにジーンズ。　暑い。　猛烈に暑い。
「暑がりだから仕方ない！」
そう言って、ホールの敷地内にある噴水の近くまで行く。　さすがに水が近くにあると少しは暑さもやわらいで、涼しい気がする。
気がするというだけで、実際には暑い。
「やっぱ暑いな」
「夏だからねー」
他愛もない会話。　すぐ途切れてしまう。
しばらく二人で噴水の中身を見ていると、灯が言う。

「ねぇ」
「ん？」
「あの曲さ」
「あぁ、あれか…あれは恥ずかしいなさすがに」
「そうじゃなくてさ」
「ん？」
「あれには、どういう意味が込められているんだっけ？」
「…いやいや、声に出していわなくてもわかるでしょう灯さん」
「残念ながらそこまで頭がよろしくなくてよー」
「…口調変わってんだけどお前」
「良いから良いから！　ほら言ってみないと伝わらないよ！」
「仕方ないな…一回しか言わないからな？」
「うんうん」

（ちょっと良いところなんだから押さないでよー）
（だって私も見たいし）
（僕も一枚噛んでたんだから、見せてくれても良いだろ？）
（僕は単なる興味本位だけどね、にゃはは）
「……」
「……」
「……なぁ」
「……やっぱいいや」
灯が苦笑いしながら、そう言ってくれたので、
「とりあえず、あの人たちに文句言ってきたいんだけど」
と、現在の素直な気持ちをぶつけてみる。
「いいね、許可するよ」
「ＯＫ」

というわけで、結局うやむやになってしまったけど、そういう話題を向こうから振ってくるって言うことは、気付いてはいたらしい。

それが確認できるなら充分だ。

まだまだ、大学生活もサークル生活も、ずっと続いていくのだから。

act 1 ― endroll（後書き）

というわけで、とりあえず第1章、終わりです。
ここまでは11／27現在、書き溜めてあったものをちょいちょい修正して一気にアップしました。
これから第2章ということで、さらに広いステージをお見せしようと思います。
あとうやむやになった馨と灯のその後もお楽しみに。

ａｃｔ　２　－　ｏｐｅｎｉｎｇ（前書き）

さて。
ａｃｔ２、すなわち大学１年秋学期の話です。
正確には９月なのでまだ夏休みですが。
ａｃｔ１で友達以上恋人未満な関係になった馨と灯の間に、何か新しい展開はあるのでしょうか？
そして本作のタイトルにもなっている「音楽祭」。
ａｃｔ２ではついに、最初の「音楽祭」が開かれるようです。
それでは、音楽好きの音楽による馬鹿騒ぎの、はじまりはじまり・・・

act 2 ― opening

季節は秋。

例えば『食欲の秋』、『スポーツの秋』、『読書の秋』など、様々な娯楽と組み合わせて良いように使われてしまう四季の中で一番扱いが可哀想に感じる秋だが、もっとも今の俺に合っている『〇〇の秋』といえば、『音楽の秋』だ。

今年の春に大学に進学したばかりの俺だけど、夏休みが始まるころにはサークルの方で指揮者に抜擢され、それ以来大学の勉強とサークルの指揮者という二つの柱を中心に生活を送っている。

もうちょっと詳しく説明すると、音楽の方に傾倒してしまっていて大学の勉強の方が疎かになりつつある。 残念なことに今の俺の生活は音楽を中心に回っているといわざるを得ない。 学生という身分を考えたら分不相応であり、かつ非常に羨ましがられ、もうちょっと言うなら親には『お前ちゃんと勉強してんのか』と言われてしまうくらいに音楽に傾倒した大学生活を送っている。

あれだけ『音楽は趣味』と公言していたにもかかわらず、趣味が本業を超えてしまっているのは大学時代という人生におけるモラトリアムだからこそ許される所業なのか。

まぁ勿論バイトも真面目にやってるし、年相応に恋もしている。

人とだいぶずれた生活をしているようで、やっぱりその実態は大学生なのである。

さて、今現在俺が何をしているかというと、今冬に控えている我が楽団『Ｗｉｎｄ Ｅｎｓｅｍｂｌｅ Ｋ』の定期演奏会で自分が指揮を振る曲のスコアに色々とメモを書き込むと同時に、今秋に企画されているライヴイベントの演出を考えているのである。

春の段階から俺たちの物語に付き合ってくれている奇特な方々からしてみたら『おいおいまたやるのかよ、そろそろ本業にもどれよ』

と言われても仕方ないかもしれないが、あえてこう言い返したいと思う。

「今回は、巻き込まれただけなんだぜ？」

act 2 ― 1

「ライヴやろうぜ！」
新見絢斗（にいみ あやと）がそう言ってきたのは、夏休みのサマーコンサートが終わって一週間位した、夏休み中に出された英語の和訳の課題を”空”で解いているときのことだった。
「もういいよ」
一蹴する。　ハッキリ言って八月中ずっと課題をやっていなくて、そのツケがたまりに溜まっている中でそんな話は受けることは到底出来ない、というか受けたくない。
「そんなこと言わないでさー」
うざったいくらいに擦り寄ってくる絢斗。　仕方ないので話だけは聞いてやることにしようか。
と、思ってしまったのが運の尽きだった訳だけど。
「で、何をするって？」
「ライヴだよ、ライヴ！」
「あーはいはい、ライヴねライヴ」
そう言えば以前『ライブ』と発音して『おま、ふざけんなよライブじゃねーよライヴだよ！』と意味の分からないことを言われたな、などとくだらないことを思い出してしまうくらいライヴという言葉を連呼する絢斗に、
「とりあえず概要を一からちゃんと話せ、全てはそこからだ」
と、ひとまず落ち着けという行間アドバイスを与える。
「あぁ、とりあえず俺はあの創立祭のときのスカパンクバンドが忘れられない」
「ふむふむ」
「だからライヴやろう！」
盛大にずっこけそうになった。　どこかの仮想日本にいる世界に名だたる名探偵が死神を見てイスから落ちたときみたいな勢いで。

「概要を話せ」
「今話したじゃん！」
「それは概要とは言わん！」
そんなくだらない、というか時間の無駄な会話を続けること三十分。　やっと絢斗は詳しい内容を話し始めた。
「……つまり、十一月くらいを目処に都内の色んなスカバンドを集めて、ちょっとしたイベントを企画したいと。　そしてそのためにうちのサークルの力がまた必要だと」
「うんうん」
首をすごい勢いで縦にガクガクと振り続ける。
「鞭打ちになるぞ」
「話を反らさないで」
涙目である。
「じゃぁ、もっと具体的にどこのハコでやるか、何バンド呼ぶのか、動員予定数は何名か、利益率はどの位になるのか、最後にそもそもそれにはうちのサークルが必要なのかなどなどをまとめて千字以内でレポートにまとめて提出な。　あ、明日まで」
「ちょっとまて覚えきれない！　ていうか千字なのに明日までってどんだけだよ！」
「俺がせっかく協力してやらんでもないって言ってるのにそんなことを言うのかい？」
「う……」
とたんに弱くなる絢斗。半年も付き合いがあれば大体お互いどういうキャラか分かってくるから、こういう会話が出来るようになってくる。逆に言えば半年くらいかかってしまうというのが難点で、そこは克服すべき課題のように感じている。
「まぁ、俺も音楽やることには大賛成だし、企画次第ではホントに黒字になったりもするからな」
「だろだろ？」
「ちぃーっす」

「まぁとりあえずその空になったグラスをもらおうか」
「あぁ、はいはい」
と言って、空になって氷から溶け出した水がそこのほうに残った黒い液体（簡単に言うとコーヒー）を飲み込もうとしているグラスを渡してくる。何かが視界の隅に入ってきたり、空耳が聞こえたりしたのはきっと気のせいだ。多分空耳は『ちぃーっす』とか言わない。
「馨ー？」
…空耳じゃなかった。
「どうした灯」
「やっと気付いてくれたー」
と言うと同時に、さっきまで俺が座っていた席に座る馨。今日は至って普通の白いチュニックに、ジーンズをヒザの上くらいでちょん切った感じのパンツというこれまた活発的なスタイルだ。
「何の話してたの？」
という灯の言葉に即座に絢斗がこう反応した。
「ライヴやろうぜ！」
「……っていう話してた」
「あぁ、なるほどね」
一瞬で全てを理解した灯は、
「つまり創立祭で馨がお客さんの話題を何から何まで根こそぎ掻っ攫っていっちゃって、学内でＳＬＥＥＫが評判にならなかったから馨を妬んで、今度は自分たちの企画に呼び出して馨の力を利用してＳＬＥＥＫを有名にしてやろうと、そういうことね」
と、何か壮大な勘違いをしていた。速攻で絢斗が全力否定する。
「違う、違うよそれ！　全っ然違うよ！」
「なんだ違うのか、つまんないなー」
心底つまらなそうに言う灯。そういう理由があるならまた俺が全力で目立って、ＳＬＥＥＫが有名になるチャンスを…いや、有名になって欲しいけど。

「しかも俺そんな目立ってないし」
「「いや、それはない」」
二人に同時に否定される。　しかも息もピッタリ。　若干凹んだ。
「なんでへこんでるのか分からないけど、馨は創立祭で一番知名度を上げてるからね」
そう、なぜか俺の知名度はものすごいことになっていて、校内を歩くと色々な人から視線を浴びるようになってしまった。　多分ライヴ中に告白まがいのことをしてしまったせいじゃないか、とウインドの人に言われている。　そのうち好きな人、つまり灯のことまで特定するのではないか。
「お前も特定されちゃえば良いんだ」
「え……」
と、灯の顔がボッと赤くなる。
「はいはい暑い暑い、日本はもう亜熱帯だなー」
あぁ、と俺はやっと理解した。
そういえば、ちゃんとした告白みたいなことはまだ一度もやってないんだった。
「悪い、灯」
「いや、良いけど」
と、赤くなった顔を外へ向けた。
そうやって照れる灯を見るのは中々新鮮で、しばらくこのままからかって行こうかと、良くないことを考えてしまいそうになる。
「まだくっついてないのかよ」
あきれたような表情を見せながら絢斗が言う。
「正式な告白というプロセスを経る必要があるなら、くっついてないってことになるんだろうな」
そう、付き合っているのか付き合ってないのかと言われたら、実際にはまだ付き合ってはいないことになる。　この関係は充分仲が良いし、別に今のままでもまったく困らない。
が、そう思っているのは俺だけかもしれないという危惧も確かに

心の中にはあって。
俺が早く告白をしておかないと、灯はもしかしたら俺を見限って他の男になびいてしまうんじゃないか、と考える俺もいる。
「まぁ、気長に待ちますよーだ。　馨が恋愛に関してはものすっごい鈍感で奥手でバカでマヌケだってことは、誰よりも知ってるからねー」
と、やっと顔が元に戻った灯は、そんな恥ずかしい台詞を吐いて、結局また自分で顔を赤くしてそっぽを向くのだった。

二人が帰ってから、俺はシフトが入っていたためそのまま仕事に移る。
仕事前に（当然自分の金で）コーヒーを飲んでから仕事に移るのは、夏休みに入ってからの俺のいつものスタイルとして定着している。
ちなみに今日も夜は至って平凡な、暇な日だ。
だから考え事も出来る。　と言っても最近考えるのは「どうやって灯にちゃんと告白したら良いか」というその一点という、なんとも充実した大学生活を送る学生に相応しいものである。　正直考えは煮詰まりすぎて具のないカレーライスのような状態で、手をつけるのもためらってしまうくらいにグチャグチャになっているので、考えてもどうしようもないのだが。
と、バカみたいなことを考えていたら、

カラン

と、店の入り口が開いた。
「いらっしゃいませー」
「ここが噂の”空”かー」

見た目は至って普通の社会人風の男である。　しかし、なぜかその体からはこの店に集まってくる常連と同じにおい……ミュージシャンのにおいを感じる。
とても小さな違和感だが、それでも客であることには変わりない。
「何を飲まれますか？　それとも軽食？」
と、新しいお客さんに対するいつもの応対をする。　しかし、
「いや、今日は飲み食いするために来たんじゃないんだ。　私はこういうものでね」
と言って、一枚の名刺を取り出してきた。
そこには、世界的に有名な雑誌社の名前と、
「月刊ミュージックマンの編集取材部門で働いています、折原武生（おりはら たけお）です」
と、自己紹介をされる。　そして、
「先日のＫ大学の創立祭でＳＬＥＥＫというバンドと同大学の吹奏楽サークルがコラボしたと言う話を聞いて、お話しを伺いに来たのですが、神矢馨さんはいますか？」
と、俺を指名してきたのだ。

act 2 ― 2

「いやー、君が噂の馨君かー。　あまりに若いんで分からなかったよ！」
「はぁ」
「しっかし、君も思い切ったことをするねぇ。　ＳＬＥＥＫとコラボするなんて」
「そんなに有名でしたっけ」
「いや、ぶっちゃけ有名じゃないね。　でも私は個人的にいろいろな人にお薦めしてる」
　コーヒーを飲みながら、折原と名乗る編集者が言っている。
　どうしてこんなことになっているのだろう。　まぁ、考えてもまだその理由を聞いていないのだから分かるわけがないのだが。

「あ、で、本題に入ろう」
「ここまでは本題じゃなかったんですか」
　思わず突っ込んでしまった。

「まぁまぁ。　君たちはスカパンクをやったと聞いたんだけど、合ってるかな？」
　と、どんどん話を進めていってしまう。　こちらとしては仕事をほっぽり出して話を聞いていることになるので、出来れば手短に終わらせたかったのだが。
「まぁ、そうですね。　大学の創立祭のステージだけですけど」
「私もそういう風に聞いている。　事実を確認したかったんだよ。

実はね…」
と言って彼が話し始めたことを簡単にまとめると、こうなる。
ＳＬＥＥＫを追っていたところ、素晴らしいパフォーマンスをする団体があることが分かった。　その団体は吹奏楽をベースにしているにもかかわらず、スカまでこなすかなり実力派のアンサンブル団体だ。
そんな彼らと街にたくさんあるロックバンドをコラボして、この街でロックとブラスを融合させた、お祭り騒ぎみたいなイベントを開きたい。そのためには今回のコラボの立役者である神谷馨という人物とコンタクトを取るのが一番の近道だろう。
と言うことを、大体十分くらいかけて説明してくる、目の前の自称編集者。　いや、名刺もあるし本当に編集者なのだろうが。
「で、俺から聞きたいことってのはなんなんですか？」
前フリを聞いてもいまいち理解できなかったため、そう返す。
「よくぞ聞いてくれました」
と、折原は身を乗り出してくる。
「あ、そこ触るとすごい熱いですよ、気をつけて」
「お？　…うわっちぃ！」
ミルクを温めるサーバーの裏側に手をぶつけたらしく、ものすごい熱がっている。　まぁ周りが見えなくなるくらい自分の仕事に熱中できるって言うのは良いことなのかもしれないが。
「ちゃんと警告は入れましたよ…？　はい、冷やしたタオルどうぞ」
「あぁ、すまない。　ふ～、痛い痛い。　あ、それで、具体的にやることとしてはライブハウスを貸しきったイベントなんだけど、Ｋ大創立祭のときに実際に二つの団体を取りまとめて一つのバンドとしての体裁を整えたのは君だって言うじゃないか」
だから、そういう情報はどこから流れていくのか。　多分ウインドの先輩なんじゃないかな、とは思うが。
「まぁ、そうですね。　一応俺が企画発案なんで。　しかし誰から聞いたんですかそんなこと」

「決まってるじゃないか、そういうことを話しそうな人間で、私たちと話をする機会のある人間なんてそうそういない」
「あぁ、なんとなく分かったんで良いです」
なんだ、新見か。今度絞めよう。
「まぁ、そういうわけで、だ」
ダンッ、とカウンターを一回叩いて、
「ミュージックマンの主催するイベントで、各バンドをまとめてみてくれないか？」
と、いきなりビジネスライクな話を始めだしたのだ。

簡単に言うとこうだ。
イベントの企画は基本的に俺に一任する。
出演するバンドも俺が自由に決めて構わない。　ただし、俺に決められない場合は候補だけ出してもらって、実際にどのバンドを出すかはミュージックマンの編集局で決める。
そして出演が決まったバンドには俺がホーン隊を割り当てて、即席のバンドを結成させて、イベント本番に向けて練習を開始させる。
完成度は問わないが、出来る限り高い方が面白いことになりそうなので、そこは頑張らせる。
最後に、上がった利益は基本的に全て各バンドに均一に分割支給する。
「このイベントをやることで、この地域の音楽活動が活性化されるし、それぞれのバンドのスキルアップにもつながる。　インディーズはいままであまり日の目を見てこなかったけど、この方法を取ればそういうバンドも表舞台に立つことが出来る、と思う」

と、折原は自信たっぷりな割りに疑問の残る口調で告げてきた。
「動員予定数は？」
「二千人だ」
中々強気で、比較的途方もなく、かつ大変無謀な数字である。
「ずいぶん集客力があるんですね」
「まぁ、仮にもバンド紹介雑誌で五年連続売り上げナンバーワンの雑誌ってことでね」
それに、ハコも決まっているし、と折原は付け加えた。
中々に規模の大きいハコでやるらしい。
「なんで俺なのか分からないんですけど」
そう、そこだけが分からない。ハコまでとってある状況なら、当然ある程度のバンドの選定も済んでいるのではないか。　大体どうしてミュージックマンなんて超大型誌が、こんな小さな街で帰結してしまうイベントを企画しているのか。
「いや、今まで誰もやったことのないものだからさ。　君みたいに今までに一つでも経験を持った人間をアサインしない　と、途中で崩壊してしまうかもしれないんだよ」
「つまり、実験的要素が大きいと」
「ぶっちゃけて言うとそういうこと」
と、残念ながら決まらないウインクをかましてくる。
「俺としては参画したいのは山々です」
「お？」
期待に満ちた目で見つめてくる折原だが、
「俺も割と忙しいんですよ、勉強とかサークルとか。　一応指揮者なんで」
と、動かしようのない事実を言うとガックリと肩を落とす。
「そんなこと言わないでさー」
「や、ホントに。　十一月といえば定期演奏会一ヶ月前なんでかなり忙しい感じです」
「そこ、なんとかならない？　君だってここで働いてるってことは

インディーズシーンを世に広めたいんでしょ？」
身を乗り出して言ってくる。　ただしさきほど痛い目を見たので腕は安全なところに置いてある。
「それは、そうですけど…。　大体ですよ、俺がやったのはひとつのバンドとひとつのバンドを結びつけることだけで、しかもその中のメンバーの一人だったんです。　今回のとは条件が全然違うんですよ」
我ながらもっともすぎる意見だ。　冷静に考えたらその通り、これ以上筋が通った意見を言うことはやたらと口の上手い国会議員でも無理だろう。
「だけど、実際に成功させたんだろ？　その事実は変わりようがない」
しかし、それでも折原は食いついてくるのだ。
「それはそうだけど」
「だったら、もっと大きく、もっと派手に、もっとでっかいイベントをこなしてみよう」
もっと、もっと、もっと。　さらに大きく。
この人がこのイベントを通して何を実験したいのか、ようやく理解できた気がする。
それと同時にすでに一回成功を収めた人間を、何が何でも引き込みたい理由も。
「つまり、このイベントは」
「多分君の想像通りだ」
そういって人差し指を立てた。　その先が目標とする到達点であるかのように腕を上げる。　その挙動と自分の考えが一致するのが分かる。

つまり、この人のやりたいことは。

「この街のバンドたちが、日本で一番上手いことを証明するんだ」

と、とんでもないことを言い出しても納得できるくらいに、理解してしまっていたのだ。

act 2 ― 3

とまぁ、こういうわけで。
そこまで聞いてしまった上に、自分自身でもこの街のバンドたちが日本で一番上手いと考えていて、にもかかわらずかなりのバンドがそのまま埋もれてしまっているという事実を憂えていた身としては、参加せざるを得ないわけで。

…巻き込まれた、とか嘘っぱちじゃん。

むしろ自分から進んで参加してんじゃん。

「ひょっとして流されやすいタイプなのか…？」
ついつい自問自答してしまう。　傍から見たらとても変人だが、幸いなことにここは自分の部屋なので問題ない。
自分の部屋で折原から言われたように、各バンドにどうアナウンスするかを考える。
「でっかいイベントやります…は、ちょっと安直過ぎるか。　ブラスとコラボしてみませんか…ストレートだな～」
色々と試行錯誤しながら誘い文句を考えていく。　なんだかんだで真面目に考えてしまっている辺り、やっぱり巻き込まれたとは言わないんだろう。

一番最初にコラボレーションしたことで学生から上がってきた反響としては、
『こんな上手いバンドがあったなんて知らなかった』

『うちのウインドも上手いんだな』
という、極めて肯定的な意見。　現にその後のＳＬＥＥＫのライヴには、『創立祭で見て』というオーディエンスが何人も来ているらしい。
確かにここだけ取ってみればこのイベントは成功しないわけが無い。　ＳＬＥＥＫは確かに上手いが、それ以上に人気があって有名で、自他共に認める実力派などこの街にはいくらでもいるのだから、人を集めようと東奔西走すればいくらでも集まるはずだ。
しかし現実的に考えてみると、本当にＳＬＥＥＫよりも格上の『メチャクチャ上手い』バンドたちが、こんな『小さな』イベントに参加してくれるのかという問題がある。　例えばうちにＣＤを置いてくれているバンドのひとつを例にとってみよう。そのバンドは数々のレコード会社から『うちからＣＤを出さないか』と交渉され、ライヴに関してもクラブクアトロなどの俗に言う大型ライヴハウスでワンマンでライヴをやっても満員御礼大盛況、なんてことも当たり前だ。　そう考えてみると、半端なイベントでは実現可能性は極端に下がってくる。
運営する身としては、こう言っては失礼だがＳＬＥＥＫよりも下手なバンドは入れたくない。最悪オーディションをして、切ることになるだろう。
しかし、ＳＬＥＥＫよりも上手いバンドがそんなに集まるだろうか？
最低でも五バンドは欲しい。

問題はもうひとつある。
イベントの要となるのは、『コラボレーション』である。
ロックバンドと吹奏楽をコラボすること。　それがこのイベントの一番の前提条件だ。
どこからその吹奏楽をやっている人間をかき集めるのか。
当然ながら第一候補はＷｉｎｄ　Ｅｎｓｅｍｂｌｅ　Ｋの人間だ

ろうが、実はこの時期はウインドはそれぞれの練習があってかなり忙しい。　十二月に控える定期演奏会のため、皆が皆自分の楽器と自分の譜面に集中してしまう。　その中でさらにやることを増やすなどと言ったら発狂しかねない。
「…無理だよなあああ」
　深いため息と共に、そう声に出してみるが、動き出してしまったものはしょうがない。
　どうにかならないものかと色々思案する。
　例えば、ウインド以外の吹奏楽団だったらどうか。
　この街は音楽が盛んだから、一般の吹奏楽団も勿論存在する。名前は忘れたが。
「それしかねーかなぁ」
　一般の吹奏楽団に手を伸ばすのは気が引ける。　相手方にも悪いし、何より実力的な問題だ。
　吹奏楽に求められるサウンドと、スカに求められるサウンドはまったくの別物だ。
　吹奏楽という枠組みで今までやってきた人たちが、突然スカに転向したとして、まともなスカらしくなるのには何ヶ月もかかる。下手したら年単位でスカばっかりやらなければならない事態にもなりかねない。
「あとは、どうやってバンドを呼び込むか」
　まぁ、一バンドは確定している。　ＳＬＥＥＫだ。
　彼らには早々にアポを取り、その場で承諾してもらった。　というかむしろ向こうからしてみたら渡りに船だったようで、
『やる！』
　の一言で確定だった。　一番最初に決まったところだし、それなりに有名なバンドだし、実力も伴っているから、トリで良いだろう。
　問題はＳＬＥＥＫよりも上手いバンドがトリ以外のポジションに甘んじるかどうかと言う点だ。
「まぁ、考えても仕方ないか」

と結論付け、企画そのものの方向性を考えることにする。　何しろどういう企画でいくかを考えないと折原からゴーサインも来ないし、バンドも誘いようがない。
企画内容を考えていたら指揮のことを忘れて、数時間そっちのほうに集中してしまったのだった。
ちなみにその翌々日はレポートの提出期限である。
そして、当然のごとく、俺はそのことを忘れているのだが、それに気付くのは結局明日の夜になってからの話である。

「で、結局引き受けちゃったわけだ」
と、呆れ顔の灯に言われる。　ちなみに今は全体合奏の練習の休憩中である。
「まぁ、そういうこと」
ウーロン茶を一口飲む。　ちなみに最近黒ウーロンが大人気だけど、俺はあのちょっと濃そうな見た目が大嫌いだ。　それに割高だし。　そんなに体に不安もないし。
「うちのサークルからまた何人か引っ張っていくの？」
「いや、今はそんな暇ないだろ」
と、昨日俺が考えたシナリオをそのまま話す。　ほぼ確実に人は集まらないだろう。
「んー、そんなことはないんじゃない？」
少し考えてから、灯がそう言った。
「なんでそんなこと言えるんだよ、っていうか今メチャクチャ皆練習してんじゃん」
と言って、周りを見渡すと、全員が一斉に目を逸らした。

（…あれ？）
いつも変な人たちだけど、今のは特別変だ。
「…もしかして、やりたい？」
一応、無いとは思うけど、いや、無いはずであるという指揮者の立場に立った希望的観測で聞いてみると。
「いや…むしろやらないっていう選択肢が無いって言うか」
などという、ふざけ……とんでもない回答が返ってきた。
「ね？」
灯が薄い……いや、そこまで薄くはないが、胸を誇らしげに張って言う。
「まじかよ…」
頭を抱えざるを得ない。　どうして演奏会前にこんなにほかのことに手を出して、自分を締め付けようとするのか理解できない。
「ほら、このサークルって皆ドMだから」
「そんな一言で片付けないでください…」
今度は本当に定演が上手くいくのか心配になってきたが、これでイベントの方は人材が確保されたことになる。
一応聞いてみたら、全員スカくらいなら吹ける、むしろオケみたいな柔らかい音の方が苦手、と言うおよそ吹奏楽団らしくない言葉たちを聞く結果となった。
あとは各バンドを集めて、それと相性のよさそうな人をマッチングさせていくだけ、なのだが、それがまた難しそうだ。
「まぁまぁ、私も手伝うからさ」
「灯…」

…信用ならねぇ。

すまないが全然信用できないよ、灯。

イベントがなんとか大丈夫そうになったその日、今度はウインドの方が大丈夫じゃなくなってしまったのであった。

そしてその晩、馨はレポート作成でてんてこ舞いになった。

「不幸だ…」

act 2 ― 4

朝。　午前五時半。
馨がなんとか語学の課題をメールで提出し終わったまさにその時、私は自然と目が覚めた。
（馨、ちゃんと課題出したのかなー。　いつもどこかすっとぼけてるから心配だわ）
と、本人のいないところで口に出さずに侮辱、もとい心配する。
いや、あくまで心配しているのであって、侮辱ではない。

さて。
最近の日課として、朝起きたらまずコーヒーを淹れることにしている。
何しろ好きな相手が無類のコーヒー好きで、しかも飲むのも淹れるのもプロ級なので、手を抜くわけにはいかない。　ちゃんと練習しないと置いていかれてしまうのだ。
豆を挽いたときの香りと、お湯を注ぎ込んだときの香り。
どちらもコーヒー本来の香りになるように気を付けながら、時には湿度や温度と言った、外の環境にも気を配らなきゃいけない。
その辺りを勘だけで乗り越えてしまう馨が羨ましい。
昔どこかの大学を作った偉人が、
『天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず』
なんて言葉を残したらしいけど、嘘っぱちだと思う。　本当にすごい人というのは凡人から見たら信じられないようなことを平気でやってしまう。　それも一度限りではなく、何度も何度も。
例えば指揮を振る才能を持つ人は例外なく人を統率するカリスマ性を持つと同時に自身もものすごく楽器が上手かったりする。　いや、勿論例外はあるけど。
その偉人さんも、『まぁ、そういう妄想をしたんですよ』と注釈

を入れるべきだ。
「ふぅ…」
などとくだらないことを考えていると、お湯が適温になったことを知らせるアラームがなる。　ちょうどいい温度でコーヒーを淹れると、香りの立ち方がぜんぜん違うのだ。
今朝も細心の注意を払って完成したコーヒーだが、それでもまだ馨の淹れるそれには程遠い。
（何がいけないのかな）
そんなことを考えながらコーヒーを飲む。　ちなみに初めて”空”で馨の淹れるコーヒーを飲んだその時からコーヒーはブラックで飲むことにしている。　砂糖とミルクを混ぜこぜにしたコーヒーは唯の茶色い清涼飲料水だと思う。　さらにどうでもいい事を言うと、そして甘すぎてとても”清涼”とは言えない。　以前はそういう飲み方もしてたけど、本当に美味しいブラックを飲んでしまったらもうブラックからは離れられない。
コーヒーを飲みながら充電していた携帯電話を取り出す。　先学期は朝の六時から練習したりと言う超ハードスケジュールをこなしていたものの、体力的精神的につぶれそうになったので、今は六時に起きて、七時に学校に向かって練習することにしている。
だから六時にアラームがなるので、携帯電話のアラームを止めておかないと突然鳴り出して心臓に悪いのだ。
と、新見君からメールが来ている。　彼はここ二・三日、バンド関係の話をたくさん流してくれている。　どれも馨にいいバンドを教えて、それを馨が今度仕切るイベントを盛り上げるために使って欲しいからだ。
でも、今日のメールは用件が違っていた。
もっと面白い内容だったのだ。

「初めましてー、穂積灯です。　新見君とはただの知り合いです」
「それひどくね！？」
ウインドの練習が終わってから、私は家の近所にある音楽スタジオに来ていた。
このスタジオは全国的にも有名なバンドも利用する、結構バンドマンのメッカ的なイメージのあるスタジオだ。　安くて設備も良くて、スタッフの人当たりもいいので、この辺りでバンドをやっている人間なら一度は利用したことがあるっていうくらい有名なスタジオになっている。
ちなみに今日の練習ノルマは朝のうちに終わらせた。　さらに言うなら馨とは違ってちゃんと課題も全部提出してある。
「あっはっは、面白いねー。　どうも初めまして、私神前智代（かんざき ともよ）って言います。　よろしく」
そう言って握手を促してきたのは、メチャクチャ美人だった。
「いやね、近々ウインドとかこの辺のバンドとかごちゃ混ぜにしたイベントやるってこと言ったら、あのときのライヴで馨が告った相手ってのをどうしても見てみたいって言われてさ」
そう言ったのは横で私たちが自己紹介するのをニコニコと見ていた新見君だった。
「はぁ、そうなんですか」
「あー、そのしゃべり方、馨にそっくり」
ピクンと反応する。
「あのー、失礼ですけど馨とはどういうご関係…？」
「あ、大丈夫、馨とはとっくに男女の関係じゃなくなっちゃったから」

さらに体が勝手に反応するのを何とか抑えて、
「あ、そうですか」
とだけ言う。　あの野郎。
「まぁまぁ、あっていきなりそんな険悪にならない！　そして智代さんも嘘つかない！　馨と付き合ってた事実なんてないでしょ！」
と、新見が言う。　なんだ嘘か。
嘘でも納得出来ないけど。　今度馨を問い詰めてみようと、ひそかに誓った。
「いやいや、お互い大変ですね」
「ホントよね」
と、同じ悩みを持つもの同士なだけに打ち解けるまではそんなに時間はかからなかった。
勿論、打ち解けることと気を許すことと仲良くなることは、それぞれ全然違うけど。

「それで、新見君、用はそれだけ？」
「いやいや、違うから！　むしろ今までのあれに意味とかないから！」
とりあえずスタジオのロビーで（新見君におごってもらった）コーヒーを飲む。　馨が淹れたやつどころか、私が自分で淹れるものよりも美味しくない、至って普通のインスタントだから、砂糖くらい入れないと不味くて飲めない。
「実はね、今日はあなたに面白いお話を持ってきたの」
「いや、知ってますけど。　その話が面白そうだったから来たんですもん」
「あぁ、そうだよね、失敬失敬」
と、普通にお茶目な部分もあって良い人だ。　なんで馨はこんな人を振ったんだろう。

…どうせ『音楽の方が大事だ』とか、『おれは今コーヒーを淹れる事に命をかけてるんだ邪魔するな』とか、そんな至極くだらない理由なんだろうけど。

「いやね、今度やるイベント用にスペシャルバンドを組もうと思うんだけど、私ギター出来るから灯ちゃんカワイイしボーカルなんてどうかなーって」

「え、ボーカルですか？」

そこまでは聞いてなかった。　ただ新見君が『イベント用のスペシャルガールズバンドやらね？』とだけメールしてきて、それが面白そうだったからというだけで来たから、そういえば詳細は何も聞いてないんだった。

「そ、ボーカル。　一番目立っちゃうし、やっぱ飛びっきりカワイイ子じゃないと」

「いやまぁ、その理屈は分かりますけど。　だったら智代さんがやればいいんじゃないですか？」

そう、今朝どっかの偉人の話を思い出していたけど、智代さんこそそういう人間だ。

前に馨に連れられてライヴを見に来たときに、たまたま智代さんのバンドがオープニングアクトを務めていたから、その実力は知っている。

ギターも弾けて歌も歌えて、かつキレイ。　どのくらいキレイかと言うと、街を歩いたら大抵の一人身の男は振り返ってしまうくらい。

「いやいや、灯ちゃん歌上手いじゃん。　前にカラオケ一緒に行ったとき、うちのバンドのメンバー全員聞き惚れてたんだよ」

「いやー、所詮カラオケだし」

と、やんわり断ろうとする。　それに謙遜でもなんでもなく、本当に私よりも智代さんの方が適任だと思う。　だから、

「私が歌うよりも智代さんが歌ったほうが盛り上がるんじゃないですか？」

と言うと、
「いや、そこはほら」
「ねぇ」
と、新見君と智代さんの二人が口調を合わせながら、ニヤニヤ笑っているのだ。

あ、なんかいやな予感。

「「だって、主催者の彼女が目立たないなんて、ねぇ？」」

つまり、馨はまったくもって迷惑な男だったのだ。

act 2 ― 5

「……で、なぜかボーカルをやることになった、と」
「その通りで御座います」
「で、それは俺のせいだと」
「その通りで御座います」
「何かほかのこと言ってくれよ…」
「はいはいそうだね」
「…えっと、ゴメンなさい？」
何、これ。

こういう極めてめんどくさい状況になったのは、学校の秋学期が始まる前日、たまたまウインドが休みで、バイトが午後からの日曜日だった。
突然俺の部屋にものすごいふくれっつらで遊びに来た灯は、部屋に上がっていきなり、
『馨のせいだ』
という相当意味不明な非難を浴びせてきた。
何がどう『俺のせい』なのかを説明してもらおうとして擬似コミュニケーション不全に陥っている目の前の灯となんとか会話すること三十分、やっとここまで聞き取ることに成功した。　聞き出せた情報は『ボーカルやることになった』という、ただそれだけなのだが。
「もっとちゃんと説明してくれよ」
「馨のせいでボーカルやります場所は今度あるイベントですバンドはそのイベントのために組まれるスペシャルバンドです一夜限りですヒャッハァ」

「最後おかしくないか」
「うるさい」
どう考えてもツッコミ待ちにしか聞こえなかったのだが、違ったらしい。
「うーむ。　なんで怒ってるのか皆目見当も付かん」
本当に分からないのだからしょうがない。　ちょっと切り口を変えてみようか。
「昨日は誰と会いましたか灯さん」
「新見君、あと神前さん」
「へぇ新見。　ま　た　あ　い　つ　か」
一度絞めておくべきか。
と、考えたところで、もう一人名前が挙がっていたことに気付く。
「って、智代？　なんで智代？」
「へぇ、呼び捨て」
…あぁ、なんだ。
「なんだ焼きもちか」
グーで殴られた。

「……スミマセンデシタ、痛いですモウヤメテ」
本当に痛い。　なんか二の腕がギシギシ言っている気がするし、頭から血が流れている気がする。　下手したら貧血とかで倒れるかも。　俺貧血ってなったことないから一回くらいなっておいても良いかもしれない、何事も経験だ。　自分でも何言ってるのかわからなくなってきた。　いよいよ持って現世ともおさらば、これからはニルヴァーナから灯を見守ることに

「しねぇよ！」
「ノリツッコミは痛々しいよ」
そんな灯は今はもう機嫌も治り、美味しそうにさっき俺が死ぬ前に淹れたコーヒーを飲んでいる。
「だから殺すなって！」
「誰と会話してんの？」
あぁ、どうやら幻聴だったらしい。
「ふぅ…まぁいいや。　ほら、智代ってバンドやってんじゃん。うちの店にもＣＤ置いてあるし」
「あ、そうなんだっけ」
本当の話だ。
実は智代は前にも言った、『この街にはＳＬＥＥＫより上手いバンドがいくらでもいる』うちの、特に上手いバンドのギターボーカルだ。　つまり、全国クラスで有名なバンドのギターボーカルということになる。
そんな人間と、今までバンドの『バ』の字も知らなかったような灯が会話して、灯をボーカルに推薦するなんて、何かの奇跡か神の思し召しとしか思えない。
「そんなことあるんだなー」
「なんのこと？」
「いや、なんでも」
灯の音楽家としてのセンスは一流だし、未経験だったオーボエも今ではしっかりと芯の通った、ハッキリしたサウンドになっている。
センスがあって、努力する才能がある。
これ以上音楽をやるのに必要な才能は必要ない。
多分ボーカルを言い渡されても何の問題も無いだろう。
「良い声してるしな、灯は」
正直な感想を言っておく。　以前一緒にカラオケに行ったことがあるから分かるのだ。　まぁ、サマーコンサートの打ち上げのオール組だったからものすごい泥酔状態だったけど。

「お前あの時エコー切ってただろ」
「エコーかけると自分の声じゃないような気がして」
いや、上手く聞かせるためのエコーなんだけど…なんて言うのは無粋だろう。
「なんにしても、引き受けちゃったの。　馨のせい！」
「いや、そこは自己責任だろ」
「いやいや」
と、一呼吸置いて、
「だって、主催者の彼女が目立たないなんて、とか言われたんだよ？　まだ彼女じゃないのにね」
と、なぜか恨めしそうな声で言う。
「なぜそんな声で言うんだ。　そして俺は主催じゃねぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

灯が帰って、俺はそのままバイトに行く。
ここ最近俺が働いてるときに限って変なイベントが起こりやすいと、他のスタッフに言われたことがある。
今日もそのパターンで、なぜか小野寺さんたちがケンカしていた。
なんでケンカしてるのかは知らないけど、とにかくケンカしていた。
場を収めた方が良いのか。　でも今日客いないし。　好きなだけやってしまえば良いんじゃないかとも思う。
でも、
「あのイチャイチャしながらケンカするの、止めてきてくれない？　見てて腹立たしいから。　もう世界中のカップルは破滅すればいいんだ！」
と、一人身のスタッフ（二十三歳男性彼女いない暦二十三年）に言われてしまっては行かないわけにはいかない。　仕方なく二人の

傍に近寄ってみる。
話の大筋はこうだ。

「最近冷たい！」
「冷たくないよ…むしろ遥の方こそ一方的にメール切ったりしてるじゃないか」
「あ、あれはちょっと用事が…覚だってそうじゃん！」
「いや、俺にだって用事くらいあるんだよ。　それを言ったら、遥はいつもじゃないか」
「いつもじゃないよ！　覚の方が回数多いよ！　私数えてるもん」
「数えるなよ…」
「とにかくー、最近冷たいの！　だからデートを所望する！」
「だからデートって文脈おかしいし、課題やれよ…卒業出来なくなっても知らないぞ？　というか僕は今卒業かかってる論文があるの。て言うか、遥はもうすぐ就活だろ？　準備しなくて良いのか？」
「話をすり替えないの！」

「……」
なんて、不毛なんだ。
俺と灯には絶対に出来ない言い争いだ。
「あのー」
「「なに」」
「ここ、店なんで。　ケンカなら」
「ケンカじゃなくてディスカッションだもん」
と、言い訳してくる加藤さん。　どう考えてもただの屁理屈ですね。

「その通りだ」
いや、小野寺さん、あんたもか。　なんでこう若年化してるんだ二人とも。
「なんて言うか、仲良いですよね」
喧嘩をするほど仲が良いとはよく言ったものだ。
そう思って俺が言うと、二人は目を丸くして固まった。
「…？　俺なんか変なこと言いました？」
「…なんかケンカしてたのアホらしくなってきた」
そういって加藤さんが足を投げ出す。　今日はスカートなのでめくれないか心配になってしまうが、幸い店内には客は他にいない。
「もうちょっと恥じらいを持ってくれよ」
「あぁ、はいはい」
そう言って少し居住まいを正す。　なんだかんだで小野寺さんの言うことは聞くんだな。
「まぁ、客他にいないんですけどね」
「一応公共の場所だから」
小野寺さんは時々こうやって固い…といってはなんだけど、そういう感じで人をたしなめてくる。　元々そういう性格なのか、加藤さんがだらしないからこうなってしまったのか。　どちらにしても二人はお互いのことをしっかり考えている、良いカップルなのだ。
「それにしても、今日は灯ちゃん来てないんだねー」
「いや、そんなにいつもいるのって逆に気持ち悪くないですか」
「そんなことないんじゃない？　だって二人ともお互いのこと好きなんだし、いつも一緒にいたいって思うのは普通だと思うよ」
と、コーヒーをすすりながら加藤さんが言う。
「それは恋する乙女的発言？」
「そう」
力強く頷く。　この人がそう言うなら、そういうことなんだろう。
何しろこの人は初めてこの店に来たときからずっと、恋する乙女なんだから。

「まぁ、なんにしても大事にしてあげるのが一番だね、指揮者とかイベント主催とかそういうのばっかりに捕らわれてたら、今度は灯ちゃんが夏休み前の君みたいに奔走することになりかねないよ？」
「まぁ、その通りですね」
以前と同じ過ちを繰り返すのは人間だけだけど、同じ事を繰り返す人間は愚かだ。
大学に入って最初に学んだこの言葉の意味を、俺はもう一度反芻するのだった。

act 2 ― 6

「さて、最初の練習なわけですが」
そう言ったのは絢斗だ。
「うむ、一応今日が最初の練習のはずだ」
と、俺も頷き返す。
「だがなんだこれは」
絢斗がそう疑問を口にする。
「なんなんだろうな」
俺にも分からない。
「なんでこの人たち、こんな完璧なんだろうな」

というわけで、最初の練習である。
時は流れ、もう十月。 学校も始まったし、平日の真昼間に大学生が大量に大手を振って街を闊歩することもなくなったし、この街の昼間を支配するのはビジネスマンのみになった。
そろそろ練習スタートしなければなるまい、ということで自分のバンドのメンバーに招集をかけ、今日練習をすることになったのだ。
なったのだが。
「……メチャクチャ上手いな」
「いや、むしろ巧いな」
「意味わかんねぇよ」
そんなくだらない会話をしてしまうくらい、目の前にいるバンドは上手かった。
ギターは早すぎて指だけ残像拳みたいなことになってるし、ベースのうねりは半端ないし、ドラムなんか下半身にもうひとつ脳みそがあるんじゃないかって言うくらい手足がばらばらに動いていて、

はっきり言おう、このバンドは気持ち悪い。
いや、それだと御幣がある。気持ち悪いくらい上手い。
それだけならまだ、なんとかなる。
その先だ。
今回やるのは俺のオリジナルが一曲と、某有名スカバンドのご機嫌な曲を四曲なのだが、全ての曲の作られた背景、グルーヴ感、旋律やバッキングの美味しいところ、そういった曲を構成する全ての要素を完璧に把握しているとしか思えない、って言うくらい、原曲を見事にトレースしている。　その上で自分なりのサウンドに置き換えているのだ。
圧巻。　そのくらいの形容しか思いつかない。
「えーっと、どうする？」
「…とりあえず、やるか」
そういって自分の楽器を取り出す。絢斗は今日バイトも練習も無くて暇だというので遊びに来ているだけなので、適当なイスに座って見学モードである。　まさに見学。
「じゃ、始めますよー」
と、俺はマイクを持って言った。
「待ちくたびれたぜ」
と、ドラムの人が言ってきた。　というか、既に汗だくである。
もはやアップどころの話ではなかった。

練習してみて思ったが、やっぱりぶっちぎりに上手かった。
一応俺率いるトランペット、トロンボーン、テナーサックスの三人は、主催者権限を発動して一番上手いと思われるバンドと組むことになっていた。　そのほうが成長できるだろうという俺の超個人的見解によるものだ。
でもこれは反則だろう。

「あんたら上手いな！　そんなにうまく楽器吹けんならバンドでも組んでやったらえぇ」
と、このバンドの中心であるベースのいぶし銀な兄ちゃんが言ってきた。　なぜか関西弁である。　聞いたところによると、高校を中退して国内の様々なところを日雇いで働かせてもらいながら転々として、一度大阪に辿り着いたときに気付いたら関西弁になってしまっていたらしい。　ちなみに一番長く居たのも大阪で、二十六の頃まで約五年間居たそうだ。　現在二十八歳、バンドをこっちで組んでから二年になる。
勿論、全てついさっきまでの練習で収集した情報だ。
「そっちこそ、メチャクチャ上手いじゃないですか。　どうしてCDにしないんですか」
「んなもん、ライヴの方が楽しいからに決まっとる！」
と、二カッと笑った。　いい笑顔だ。
「そんなもんですよね」
全く、恐れ入る。　こう言うバンドが世に出ないって言うのは、業界の矛盾だろうとすら思う。
「まぁ、お前の場合はもっと良い理由がありそうやけどな」
と、ニヤニヤと笑う。　はっきり言おう、気持ち悪い。
「なんのことでしょう」
この手の話にはもう慣れつつある。　出てくれることになったバンドすべてから似たようなことを言われれば、それは慣れないわけが無いのだ。
「またまたとぼけおって！　彼女、出るんやろ？　しかも結構なバンドさんのボーカル。　そら自分も上手くならなあかんな」
と、小指を立てつつ語る。　非常に親父くさいとは言わないでおいた方が良いのだろうか。
「いや、関係ないですよ」
「そうか？」
「えぇ、俺が上手いのは俺自身がもっと上手くなりたいと思って練

習を続けてるからです。　ある意味当たり前のことです」
「でもちょっとは思うやろ？」
「いえ、ちっとも」
俺はただひたすらに自分の力を磨き続けて、誰も追いつけないどころか前人未到の場所に達して、そこまで行ったらすっぱりやめて自分のカフェでそういう人間の手助けをするのが夢だ。　だからちゃんと練習もするし、新しい知識は貪欲に吸収する。
そんなことを話すと、「そうかー」と言ってそれ以後何も返ってこなくなった。
まぁ、さすがに呆れ返るだろう。　そう言うのは音大に行った限りなく少数の、その中のさらに限りなくゼロパーセントに近い数の人間がやるもので、しかも前人未到というのはひとつの世代に一人いるかいないか、最悪百年経っても出てこないこともある。
それを、たとえ音大からのオファーがあったとはいえ、普通の四年生総合大学に通う俺が成し遂げるなんて夢のまた夢、本当に夢物語なのだ。
しかし、その練習が終わった後、彼はこう言った。
「お前なら行けるかもなー。　なんか、オーラが違う」
と、一言だけ言い放って帰って行ったのだ。

「って言うことがあったんだ」
「それ夢だと思うよ？　ちゃんとほっぺたつねった？」
なんと平和でバカな会話だろう。
“空”にてコーヒーを飲む灯と、そのコーヒーを淹れる俺。　いつもの構図である。
「まぁでも、馨には他人にそういう風に思わせるエネルギーって言

うか、オーラみたいなものがあるって言うのは分かるよ」
と、ちょっと真面目な風に灯が言う。　ちなみに灯は真面目な話をするときは片方の腕だけテーブルの上に置いて、人差し指でテーブルをリズミカルにトントンと叩く癖がある。　いまそれをやっているので、本気で真面目な話なのだろう。
「へぇ、新たな一面だ」
「でしょ？」
六月や七月のあの頃よりも一歩踏み込んで、相手のことを考えていく関係になってから、灯の癖とか俺の知らなかった灯のこととかが明確に見えるようになってきた。
だからかもしれない、俺も今日あったことや明日やりたいこと、昔のことをたくさん話すようになってきた。　これまではそんなことはなくて、親友だといいながら昔のことを多くは語らなかった。今はそうじゃない。
友達以上、ほぼ恋人、そして親友って言う微妙なポジションにいる灯だけど、このままでも十分に楽しい生活を送れる、ということがなにより嬉しい。
「そんな馨さんはプロを目指す気はないの？　前も聞いた気がするけど」
「ないな」
これは昔から考えていたこと。
プロになって、金を稼ぐためだけに音楽をやりたくない。　音楽は趣味だ。
勿論音楽を使って金を稼ぐことが悪いわけじゃないということも分かっている。　感動させられる音楽は金を払ってでも聴くべきだし、そうして触れたものを自分なりの解釈で吸収することで自分のスキルをさらに磨くことにもなる。
ただ、金を稼ぐことに終始するとそれだけで成長しなくなってしまうんだと思う。
だから俺は金を稼ぐための音楽はやらない。　そんな音楽はつま

らない。
　どうせやるなら自分が楽しんで、周りを楽しませて、その結果自分が上手くなって相手が満足して、その対価として金をもらう。これが一番なんじゃないか？
　こんな話をしてみると灯は、
「ふーん。　うん、それもそうだね」
　と、理解を示してくれる。　灯も俺も音楽に対する根本的な意識は同じなのだ。　だからこそここまで数ヶ月間だけど一緒にやってこれたし、お互いに惹かれあうものがあったんだ、と思う。　俺の独りよがりでなければ。
「で、どうにかなりそうなの？　バンドの方は」
「バンドはどうにかなるって言うか、むしろ俺が頑張って追いつかなきゃいけないくらいに考えてるよ」
　本当にその通りで、俺やほかのホーン隊が頑張らないと、リズム隊に申し訳が立たない。
「うーん、まぁ気張りすぎないでね。　やりすぎると馨って自滅しちゃいそうな気がするから」
「それくらい分かってるって。　前にもやったからな」
　と、口を滑らせてしまった。　すかさず灯が食いついてくる。
「前？　なにやらかしたの？　お願い聞かせてー」
「…まぁ、良いか。　前に高校のときも指揮者だったって言う話はしたよな？」
「うんうん」
　こんな感じで、最近は俺の昔話を灯が楽しそうに聞いている、というのが”空”の日常風景になっているのだ。

「たまには自分のことも話せよ」
　いつも俺ばかり話しているのが不満なので、そんな風に灯に振っ

てみる。
「私の話なんてつまんないよ？」
「それでもいいんだよ、聞くことに意味がある」
好きな相手の昔の話はやっぱり聞きたくなるものなんだ。　今までは良く分からなかったけど、今は本当にそう思う。
「うーん、特に音楽やってたわけでもないし、あ、でも歌うのは好きだったよ」
「じゃぁバンドで歌えるのは願ったり叶ったりだな」
「それとこれとは別だよー…メチャクチャ緊張するじゃん…」
まったく持ってその通りだ。　俺だってあのＭＣには本当に緊張したし、恥ずかしい思いもした。だけど、
「乗り越えれば確実にコンミスやる度胸はつくよな」
「…うん」
来年からコンミスとして、サークル全体を引っ張っていく立場にある灯としても、これはまたとない成長のチャンスなのだ。　それを本人も自覚していて、だからこそ今回の件は引き受けたのだろう。
「まぁ、頑張ってみようかなーって。　それに…」
「それに？」
「……」
「灯？」
「なんでもない！」
なぜか突然機嫌が悪くなった灯に、戸惑うばかりの俺。

なんか悪いことしたっけ？

act 2 ― 6（後書き）

※私、関西弁はよく理解できていないので、作中どこかの方言が出てきていて、それが非常に違和感のあるものだったとしてもどうかご容赦ください。
不快に感じた方がいらっしゃったらすみません。でも関西弁キャラ出したかったんです、ごめんなさい。

act 2 ― 7

その日は、灯が加入したガールズバンドの顔合わせも兼ねた初練習の日だった。
なぜか俺は付き添いで呼ばれて、スタジオまで足を運んでいる。
隣にはなぜかやたらと機嫌の悪い灯がいる。
…空気が重い。
「……」
「…なぁ」
「なに？」
「なんで、俺は呼ばれたんだ？」
「あ、あの、神谷君！」
「分からないかなー」
「うわー、神谷君だ！　あのライブ以来ファンになっちゃってさー。サイン頂戴？」
「……」
「まぁ、こういうわけだよ」

つまり、あれか。
バンドメンバーの中に、俺のファンがいると。
だから連れて来た、と。

「俺はサインを書くような立場じゃ…」
「良いじゃない、そんくらい書いてあげなよ、馨」
と、言ったのは智代だ。　バンドのリーダー的ポジションで、ギ

ター。　普段はボーカルもやっていて歌ってる間もギターを弾いて、かなりカッコイイ。　んだけど、普段はこう言う性格でことあるごとに俺はいじられてきたのだ。
「お前、他人事だと思って…」
「や、他人事だし」
「……」
「あはは」
「あははじゃねえええええええええええ！！！」
まぁ、こうやってイベントのためだけにスペシャルバンドが組まれて、色んなバンドの人間が一緒にひとつのものを作り上げるというのはとても良い経験になるし、素晴らしいことだと思う。
でも、俺はその中心に立ちたいわけじゃなくて、あくまで運営に携わって行きたいだけなのに…。　俺自身のバンド参加なんておまけのはずなのに…。

「でも、なぜか書いてしまう」
乗せられただけなのだ。
自分から書こうと思って書いたわけじゃない。

いや、ホントだよ？

「ありがとうございます！」
「いや、お礼は良いから、その分ライブ頑張ってください」
「頑張りますっ！！」

「…デレデレしちゃってまー」
「……」
灯の機嫌がとっても悪いです、ハイ。　恐ろしい恐ろしい。
「はっはっは、灯ちゃん、その程度でむくれてたらこれから苦労するよ？　顔に皺出来ちゃうかも」
「え、それはやだ…って、どういう意味です？」
「いやだって、この近辺での馨の人気、知らないでしょ」
「あ、こら智代！　余計なこと言うなよ！」
「あー、ごめんごめん」
ちらりと灯の方を見てみる。
機嫌が悪いのは分かってはいたが、今度はものすごく不安そうな表情をしていた。
なんて言えばいいんだろう。
…今にも泣いてしまいそうな、そんな表情。

「しっかし」
俺はバンドの練習を中で見ていながら、ひとりごちた。
「灯、やたら上手いな」
そう、灯が予想以上に上手かったのだ。
バンドメンバーはこの辺りのバンド活動をしている女の子の中でもかなり上手い部類に入る、言ってしまえばこの町最強のガールズバンドだ。
だけど灯はそのメンバーにまったく負けていないどころか、その中でもひときわ光り輝いている。
まず、声。　ボーカルをやるにあたって重要なのは、いかに人を惹きつける声を出せるか、というところが重要になってくるのだけ

ど、灯の声は伸びやかで透明感のある、良く通る声だ。　周りがアンプやスピーカーなどでボリュームを上げているにもかかわらず、マイクなしでも通るのではないかと思わせるくらい。
そして次に重要なのが音程の合わせなのだが、オーボエという調整の難しい楽器をやっているせいなのか、自分が少しでもズレていると気付いたら、すぐにその場で歌いながら修正をかけてくる。
つまり、ギターやベースと上手く調和するように自分の声を近づけているのだ。
これがどれだけ難しいことかは、カラオケなどで歌ってみれば分かる。　信じられないくらい難しいのだ。
しかも俺の耳が正しければ、灯のその調整はおそらく十数ヘルツ単位で行われている。　チューナーでいうところの一目盛りとか、その程度の差なのだ。
圧倒的な技術力と才能。
天は二物を与えやがったな。
ひとりでそんなくだらないことを考えていると、いつの間にか練習も終わっていたらしい。
「今日はこの辺にしておきましょうか、顔合わせ程度だし」
「お疲れ様デース」

練習が終わって、灯と智代が話しているのをロビーで見かけたので、そちらの方に行く。
「よう」
「お、馨。　お疲れ様、悪かったね、わざわざ来てもらって」
「いや、いいよ別に。　灯も心配だったし」

「…どういう意味さ？」
今日の灯は俺と話すと機嫌が悪くなるな…。　何かあったんだろうか。
触らぬ神にたたりなし、っと。
「しかし、あのバンドよく集まったな。　奇跡じゃないか？」
「あー、まぁ、アタシの人望？」
「はいはい」
「馨、帰ろうよ」
「あー、はいはい」
灯の方から「帰ろう」という風に言ってきたのは初めてだ。　意外だ。
それに、やたらとニヤニヤしている智代も気になる。
「おい、智代…」
「馨！」
と、叫んだ。
灯が？

なぜ。
すぐにハッと、何かに気付いた様子で灯がこう言った。
「ごめん、先に帰ってるね」
と、足早にロビーから出て行った。
「…」
「…あちゃー、怒らせちゃったねー」
のんきにコーヒーをすすりながら言う智代に、俺は、
「お前、なんかあいつに吹き込んだのか？」
と、何も考えずに聞いていた。
智代は俺の言葉を聞いた瞬間、びっくりしたような、不思議な表情をする。
「…なに面白い顔してるんだ」
「…ホントに分かってないんだね」

「は？　なにを？」
疑問をぶつけると、智代はため息をつく。　そしてこう言ったのだ。
「ふぅ…馨、あんたもうちょいあの子のこと考えてやったほうがいいと思うよ」
「…は？」

「馬鹿」
私は誰にでもなく、空に向かってつぶやいた。
誰が馬鹿？
そんなの決まってる。
私だ。
まだ正式に付き合い始めたというわけでもないのに、ちょっとしたことで馨の鈍感さにイライラして。
智代さんと馨の昔のこととか何も聞いてなかったからかもしれないけど、二人が仲良くしていることに不安になって。
それでカッとなってあんなことをしてしまったんだ。
でもきっと馨も悪いんだ。
ちょっとサインを頼まれたくらいであんなに笑顔になっちゃって。
――――相手の子、可愛かったな。
全部分かってる。
今日悪かったのは全部私なんだ。

ちょっとしたことでヤキモチ焼いてるだけなんだ。
「…追いかけてすら来ないし」
私って馨のなんなんだろう。
まだ、親友なのかな。
友達以上恋人未満っていい言葉だけど、それじゃ納得できないんだよね。　さすがに”あそこ”までされちゃうと。
あの夏のライブ。　告白まがいのＭＣと歌。
あれ以来、サマコンでちょっと告白っぽいシチュエーションになって、それを先輩に邪魔されて以来、彼の口から直接そういったことを聞いたことは一度もない。
最近になって新見君が『早くくっつけー』と言ってくるが、それに対しても上手くごまかして逃げているだけなのだ。
たしかに気長に待つと言ったのは私なんだけど。

「なんなんだろう」
もやもやする。
ただの嫉妬なのかな。

私は、馨のなんなんだろう。

act 2 ― 8

時間は少しだけ前に戻って、馨と智代が話をしている場面になる。

「……俺があいつのことを考えてないって言いたいのか？」
「うん、そう。　全っ然考えてない」
何を突然言い出すのかと思えば、そんなこと。
「考えてるに決まってんじゃねーか」
当たり前だ。　なにしろあいつは俺の親友で、大事なお得意さまで。
なにより、一番大事なヒトなんだから。
「じゃぁ聞くけど」
それまでだらけていた姿勢を突然正して、智代が言う。
「なんで今、あの子がいきなり出て行ったとき、追いかけなかったの？」
「それは……」
「あの子がどうして、馨に呼びかけたのか、それも分からないの？」
「……」
分かったら苦労はしない。　俺だって今戸惑ってるんだ。
なんでいきなりあんな風に怒ったのか。
今までだってこんなことはあった。
あのライブが終わってから、大学内で一躍有名人になった。　時には女の子からの誘いもあったし、サインを求められたこともあったし、大学で灯とまったりしているときにほかの人からの視線が気になった時だってあった。
でも、どんなときでも灯は灯だったじゃないか。
いつも変わらず、あの明るくて素直で、ちょっとだけ扱いにくい

けど、一緒にいると居心地のいい、灯だったじゃないか。
「…分からないなら、今の馨にはあの子は幸せには出来ないって言うことなんだよ」
「…なんだって？」
ちょっとだけむかついた。　だって、智代にそこまで言われる筋合いはないはずだ。
「なんでお前に、そこまで言われなくちゃいけないんだよ」
「なんかね」
と、まだ言いたいことが残っていた俺の言葉を遮って、話し始めた。
「あの子もそうだけど、本当の相手の姿みたいなものを分かってないんだよ」
「相手？」
「そう」
本当の相手の姿。
でもそれは自分のことは自分がいちばんよく知っているということで、本当に相手のことをすべて理解している人なんてこの世にはいないんじゃないか？
俺は俺だし、灯は灯だ。　それでいいじゃないか。
「どうせ今馨は、『俺は俺だろ』とか『灯のことは灯が一番知ってるんだから、俺が全部知ってるなんてありえない』思ってるんでしょ」
図星。　ぴったり言い当てられたことに少し動揺する。　でも、顔には出していないと思う。
はぁ、とため息をひとつついてから、智代はこう切り出してきた。
「ようするに君ら、まだガキンチョなんだよね。　特に恋愛に関しては」

「…どういうことだよ？」
「二人とも自分の性格を理解していない。　馨は鈍すぎる。　もっと自分の行動によって周りがどういう風に感じるのかとか、そういう面までしっかりと考えるべき。　特にそれが恋愛面にはどんな影響を及ぼすのか。　それにあの子、多分だけど、これまでまともな恋愛をしてないね。　結構独占欲みたいなのが強いと思うよ。　だから馨とアタシが仲良さそうに話をしてるのを見てイラついてたんだと思う。　初めて会ったとき、物は試しってことで『馨とはとっくに男女の関係じゃなくなっちゃったから』とか大嘘ついてみた。
アヤトが即座に嘘だって訂正したから灯ちゃんも安心したみたいだけどね。　ちゃんと聞かれたよ。『どういう関係だったんですか』ってね」
そこまで一気に話して、智代はコーヒーを飲み干した。　さらに続けて言った。
「『だったんですか』だからね。　思わず笑い出しそうになっちゃったよ。　『昔は知らないけど、今は私の彼氏なんだから』って言わんばかりの表情しちゃって」
「……」

あいつ、何を考えてるんだ？
これまで一年弱の付き合いではあるけれど、それでもいまだにあいつの心の中が読めない。
指揮台に立って皆の様子をいつも見守る立場になってから、人のことを観察して、色々なことを読み取れるようになってきたと思っていたけれど、そんなことは全然なかった。　やっぱりわからないことだらけだ。

「ほら、ここまで答えてあげたんだから、早く追いかけなきゃ。いなくなっちゃうよ？」

「……」
今の話は本当なんだろうか。　灯は独占欲が強い？
今までそんな素振り、一度も見せてないじゃないか。
唐突に投げかけられたその言葉で、俺はどうしようもなく不安になった。　この不安な気持ちの正体にはすぐに気付いたけど、それと同時にその気持を認めたくないという衝動にもかられる。

だけど今はそんな話をしている時じゃない、ということも理解した。　納得は出来ないけど。

「悪いな、先に出る」

「頑張ってー」

自動ドアが開く時間すら惜しく感じながら、スタジオを飛び出した。

「…まったく、世話の焼ける坊やだこと」
馨がいなくなって寂しそうにするバンドメンバーを横目に、智代は誰にも聞き取れないくらい小さい声で呟いた。

act 2 ― 9（前書き）

大変長らくお待たせしてしまいました。
待っている人などいないと思いつつもこれは前口上としてはお決まりみたいなので書きます。
というわけでやっと2―9を書きましたので、更新いたします。
話がハイパーウルトラ急展開なので、ついて来れないかもしれませんが、、、

act 2 ― 9

――少し大人気なかったかな、と、歩きながら考えていた。
季節的にはもう秋なんだけど、それでも残暑は厳しくて、今日も茹だるような熱気が嫌でも汗をかかせる。　そんな熱中症まっしぐらの環境下において、私は十分ほどでなんとか冷静な判断力を取り戻してきた。
戻って謝るのが一番なんだろうと思う。　場の雰囲気をぶち壊しにしてしまったんだから。
でも、素直にそういう風に出来ない私がいて。
どうしても気になってしまうのだ。
あの時は『冗談だよ』と笑って済まされていたことだけど。
自分でも良く分からない、嫌な感覚に襲われる。嫌悪感とは違う嫌な”予感”。
夜の九時を回っていて、家に帰ろうとするサラリーマンやＯＬ、学生たちが私のことを怪訝そうに見ながら、横を足早に通り過ぎていく。
それはそうだ。　こんな平日に今にも泣きそうな表情で街をうろついている見知らぬ女の子を見つけたら、自ら関わりたいと思う人のほうが少ないに決まっている。
それほどまでに私は、自分の感情に流されて、飲み込まれて、押しつぶされそうになっていたのだ。

「まったく…どこまで…行ったんだあいつ…」
息を切らせながらなお走り続ける。
走っている間も智代の言っていた言葉が頭の中で何度も何度も繰り返されて止まらない。

『――――ようするに君ら、まだガキンチョなんだよね。　特に恋愛に関しては』

ギリッ、と歯が悲鳴を上げる音が聞こえる。　それが自分の立てた音だと気付くまでにまた時間がかかる。　まったく落ち着いていない自分に気付いて、また腹が立つ。
「早く見つかれよ馬鹿」

と、呟く。

「あれ、馨じゃん」

と、声をかける。

誰が？

灯以外に誰がいる？

盛大にずっこけた。

生まれてこの方十数年の中で一番謎だった邂逅から五分が経過した。

「で、突然なぜ怒ってるんですか」
オープンカフェの端っこの方のテーブルに腰掛けて、まったりとコーヒーを飲んでいる灯に問いかける。　さすがにここまでずっと走ってきたわけで、ついさっきまで息切れが収まらなかった。
「まぁまぁとりあえずこれを飲んで落ち着きたまえよ」
と、灯は新しいコーヒーを差し出してくる。　俺が息を整えようと必死になっている間に買ってきてくれたものだ。
「あぁ、ありがとう…」
一口含んで思った。
「うちの店の方が美味い」
「そういうこと店先で言わないの！」
頭を思いっきりはたかれた。　きっとスリッパとかでやっていたら『スパーーーン』といい音が響いていただろう。
「ッッ……てぇなぁ」
「こっちだってきつい思いしたんだからおあいこだよ」
そんなことを言われる筋合いはない…
「って、きつい思いしたのか？」
「当たり前じゃん」
さも当然のように『うんうん』とうなづいている灯。　そんな様子からはきつい思いをしたなんて想像も出来ない。
「良い？　私は一応まがりなりにもあの大ステージの上からでっかく告白まがいのことをされてるの、馨に！　そんな女の子が、好きな男が昔付き合っていたかもしれない女の子と仲良さそうに話をしていれば気になるに決まってるじゃない」
…。
あぁ。　なるほど。
智代の言っていたことで大正解みたいだ。

「あはははは」
可笑しくて、つい笑いがでてしまった。　なんだ、単純なことだったじゃないか。
「な、なにがおかしいの！」
「そのまんまそっくりおかしかったぜ、今の会話」
「まったくわかんない、ちゃんと言ってよ」
まぁ、自分のおかしな部分って言うのは他人に言われないと気付かないところの方が多いだろうから、分からないって言うのもまぁ仕方のないことなのかもしれない。　そう思って、こういう風にアドバイスしてやった。

「とっとと俺が告白せざるを得ないような環境を作り出せば良いんじゃね？」

「…えっと……はい？」

「ま、まって、ちょっと一発殴らせて、そして時間を頂戴考える時間を」
「いや、もう殴ってるから…」
深呼吸してコーヒーを一気に飲んで、灯はなんとか落ち着こうとしている様子。　こういう感じの灯は始めて見るような気がするので、なんだかすごく新鮮だ。
そして俺はというと、イスから落ちて思いっきり後頭部を地面にぶつけている。　正直、メチャクチャ痛い。
「……たしかに、サマコンのリハーサルの休憩中に告白させようとして失敗したのは痛かったけど」
と、俺がもっと早く素直に言ってしまえばよかったところを先輩たちのせいにしながら、
「かといってそれを早く早くって言う風に急かすのもどうかと思うのよ」
灯はそういう風に言った。
たしかに告白なんて一大イベントは、ちゃんとした場所で思い出に残るようなことをしてあげたいという思いはある。
それまでは友達だったのが、それを機に突然彼氏・彼女の関係に

レベルアップするのだから。
例えるならばロールプレイングゲームで弱い仲間を連れて最上級のダンジョンに行き、敵を倒すと、その弱い仲間のレベルはどうなるだろう？　きっと一気に十くらいレベルが上がるだろう。　そのくらいの差なのだ。　”友達同士”と”彼氏・彼女”というのは。
「まぁ、そか。　わかった」
「…何がさ」
突然の『わかった』発言に、灯は戸惑いの表情を浮かべる。　それもそうだ、灯からしてみたら今の発言は本当に意味が分からないだろう。　だから、分かりやすく、
「今度デートしよう」
と、言ってやるのだ。

act 2 ― 10

「よくやった！」

背中をバシバシと叩いてくるこの人、我らがサークルの部長ことまえさか じゅん前坂純。　何をほめているかというと、俺が灯をデートに誘ったことを、だ。

サークルが終わって、”暇だから”トップ（各楽器のファースト担当）と指揮者、それに幹部でご飯を食べに行こうという謎企画が発令された。　そのときに相変わらず煮え切らない俺と灯の関係を問い詰められ、ぽろっと一言漏らしてしまったのだ。

今となっては本当に暇だからという理由だけなのか、疑問が残る。

本当はこれを俺の口から言わせたかっただけなんじゃないかと。

「痛い！」

「恋は痛いもんなんだよ！」

「明らかに今の痛みは恋から来るもんじゃないっす！」

絶対あざになった…まぁ男だし気にしないけど、風呂に入るとき痛そうだなーなどとくだらないことを考えていると、

「で、そこで告っちゃうんだよね？　熱いねー熱いねーやだよー残

暑が厳しいこと」
と、言ってくる純さん。　誰か抑えてください。
「こらこら、そんなにいじめちゃかわいそうでしょ？」
助け舟が出された。　船頭さんは我らが女神こと加藤遥（かとう はるか）さま。
いつも優しくしてくれるので一部性格を除いてはものすごく良い人だ。　例えば、

「私も聞きたいんだから、ちゃんと最初から話してもらってよ」

こういうところを除けばすごく良い人なのだ。　サークルのトップ集団の中で最年少という最も弱い立場の俺には、いつもいつも、”無茶振り”と”無理難題”という二つの大きな壁が立ちふさがってくるのだ。

「…なるほどね、バカオルがまたやらかしたわけね」
コーヒーを飲んで一息ついたあと、純はそう言った。
周りにいた先輩たちも一様にため息をつく。
「…え、なにこれ」
もはや口癖となってしまったそのセリフを口にして、俺は自分が微妙な表情をしていることを感じ取る。
自分でも理解はしているのだ。
自分がやった行動が灯にどんな影響を与えてしまったか。
自分が言った言葉を灯がどのように捉えているか。
「うちらがため息ついたのは、灯ちゃんを悲しませたっていう部分が悲しいからだよ？」
遥さんが言う。　ちなみに春までは”加藤さん”と呼んでいたが、あの一件以来この面子とは急に仲がよくなり、今では下の名前をさん付けで呼ぶほどになっている。　このことが俺の中ではとてもうれしいことなのだ。
「いやまぁ、分かってます」
「分かってるならいいんだけどね、分かるのが遅かったよね」
と言いながらも、顔は嬉しそうだ。
「機嫌いいですね」
「え、顔に出てる？　いやーそりゃ嬉しいっすよー春にあんだけ目付けといた子たちがついに……ついに……！」
なにやらものすごい嬉しそうだ。　そしてそれは遥さんに限らず、周りにいる全員にも言えること。
全員が祝福してくれているような気分になったが、
「でもまだ告白して成功すると決まったわけじゃ…」
と、言う事なので、油断は出来ないのだ。

「や、全然大丈夫だと思うよ？　あんだけ仲が良いんだしさ！」
「何を根拠に…たしかに仲は良いかもしれないけど」
当然の疑問のはずの俺のこのセリフは、結局一蹴されてしまう。
「君たちの『仲がいい』は、一般的な『仲がいい』とはかけ離れてるの！　はっきり言って、ぜんぜん違う！」
ビシッ、と言われてしまっては、こちらとしてはぐぅの音もでない。　しかし、いつだって目の前のひょうきんで他人想いの部長様の助言は、当人の趣味趣向にたぶんに毒されていたけど、割と正しかった。　だから今回も、割と正しいんだろう。
となると、
「じゃあ先輩たちは、俺が告白すれば灯は絶対にＯＫすると、そう思ってるんですか？」
という疑問が出てくるのは当然のこと。　そしてそれに当然のように答えてくるのも予想の範囲だった。
「「当たり前じゃない」」

馨がそんな風にサークルのトップ集団から全力でいじられているとは露知らず、私は〝空〟に遊びに来ていた。
あの馨の衝撃的な発言があった後、智代さんとどういうつながりなのかと言うところを聴いてみたら、『俺がバイトで入った日にＣＤ持ち込んできて、それが俺が一発ＯＫするくらいのシロモノだったんだ』ということらしい。そんな智代さんのいるバンドの音楽がどういうものなのか知りたくて、だけどＣＤを置いているのは〝空〟だけだということで、遊びに来たのだ。
ドアを開けると中から「いらっしゃいませ。　あれ、灯さん今日は一人なんですね」と店員から挨拶される。馨のいない日に一人で来るといつもこういう反応をされるのだ。

「いつも一緒ってわけでもないですよー。　それよりも、コーヒー一杯と、聴きたいＣＤがあるんですけど」
カウンター席に座りながら、私は言う。もう完全に常連と化しているので、席に通されると言うこともなく、勝手に座りたい席に座るようになった。
この季節だからまだまだ暑いけど、〝空〟はなぜかその暑苦しい感じがなくてすごく快適だ。　空調が効いているからというのも理由の一つだけど、やっぱりこの独特の清々しい空気感が、涼しげな雰囲気を出しているのかも知れない。
「はいはい、何を聴きたいんですか？　最近入ったアーティスト？」
「えーっと、ｓｅｓｓｉｏｎａｔｅっていうバンドなんだけど」
と、智代さんの作ったバンドの名前を挙げる。　すると、

「あ、それなら今流れてますよ」

そんな風に返された。
「え？　これ？」
「これ」
その音楽は、私が智代さんにいだいていたイメージとはかけ離れていた。馨が全力でプッシュするのだから、エモーショナルなパンクロックバンドというイメージが先行していたと言うのも原因の一つだ。

つまり、そういう音楽とは全然違う、とても静かな、バラードだったのだ。

「…綺麗…」
色々と琴線に響いてきた部分はあったけど、結局出てきたのはそんな他愛のない言葉。　だけど、その一言がこのバンドの音楽性のすべてを表しているような、そんな不思議な気分にさせる。
なるほど、と思う。　確かに、これまでどんな音楽をやってきて、どんな音楽が好きで、だから好きな音楽のイメージが固まってしまっているとか、そういうのを全部ひっくり返してしまうような、ものすごい力を持った音楽だ。　馨が一発ＯＫを出す理由も、作った当人に興味を持つ理由も、この曲を聴くだけで全部わかってしまった。
「なんだか、くやしいなぁ」

誰に言うでもなく、そう呟いてしまうほどに、その5分足らずの1曲を聴くだけで、私は智代さんの持つ世界観に惹きこまれてしまったのだ。
「まぁ、あの人…神崎さんは天才ですからね。　天才肌じゃなくて、紛れもない天才です」
　そんな言葉と一緒に差し出されたコーヒーを一口飲みながら、詳しく聞いてみる。
「どういうことですか？」

「神崎さん、元々ロックとかパンクとかポップとか、そういうジャンルの音楽を最初からやってたわけじゃないんです」

「…？」
「なんか、元はドイツの音楽系の学校に通ってて、そこでずっとピアノをやってたらしいんです。　だけどそこで音楽をやってる自分に自信が持てなくなって、それでイギリスに行ってギターを練習して、今は日本で活動してるみたいなんですけど、イギリスでも結構有名人だったみたいですよ？　元いたドイツの学校出のギタリストなんてこれまでいなかったみたいだし、話題性もあったんでしょうね」
　なんだか夢みたいな話だけど、本当のことらしい。

元々ピアノをやっていたから、こんなに繊細な音楽を作り出せるんだろうか。　そう考えて、即座に違うと分かった。
ピアノをやっていたからって繊細な音楽が出来ると言うわけじゃない。　人の持つ音楽性はその人の人生を表すものだと思っている。
少なくとも私のこれまでの音楽に関する経験から、音楽性には少なからずこれまで歩んできたものが反映されると感じてきた。　だからこそ、ピアノをやっていたこと以上に、智代さんは何か人とは違う、特別な感情を持っているんだ。
だけど、これは確実に言える。
「へー…やっぱり元々音楽の才能はあったんですね」
軽く嫉妬してしまうくらい、才能に満ち溢れた人だと思う。　凡人がどんなに努力しても辿り着けない領域に、智代さんはいるんじゃないか。　私がどれだけ頑張っても、追いつくどころか差をつけられる一方なんじゃないかとすら思う。
あまりに点差を付けられた試合では、負けている方は戦意を喪失してしまう。　そんな感じだ。
それと同時に、こんな音楽を作れる智代さんと、もっと仲良くなりたいという思いが募ってきた。
「智代さんって、結構この店には来るんですか？　私が来るときっていない気がするんですけど」
「うーん、最近はあまり来ないですねー。　ちょっと前、と言っても今年の春くらいまでは結構昼間とか居たんですけど」
昼間。　なるほど、確かに大学に入るまで、私は昼間ここに来たことはなかった。　いつも夜に来て、馨とおしゃべりして帰っていたから。
「でもまぁ、こういう風に自分の音楽がかかっていたりするときに、ふらっと現れたりするんで、割と今日なんかこれから来るかも知れないですよ」
「来たら来たで若干気まずいんだけど…」
「あら、じゃぁ帰った方が良いかな」

と、唐突に話に割って入ってきたこの人こそ、今丁度話題に上がっていた神崎智代である。

「あー、そこで話しかけるんですか。　一体いつになったら会話に入ってくるのかと」

店員はどうやら最初から気付いていたらしい。　言ってくれれば良いのに、ここの店員は誰も彼も意地悪に育てられているんだろうか。　店長の方を睨みつけてみる。

「…智代さん？　話しかけるならもうちょっと、心臓に悪くない方法でお願い…」

ａｃｔ　２　－　１１（前書き）

超絶お久しぶりです。
お仕事順調なのでなんか書ける予感がしてきました。
とりあえず好きな作品なので最後まで書きたいと思ってます。
構想的にはａｃｔ２と、もう一個なにか短編を挟みつつ、ａｃｔ３とかをやったころには大学を卒業するかなー、くらいの感じです。

act 2 ― 11

今日も今日とて俺こと神矢馨は”空”でバイトをするためにちゃんと足を運んでいる。

直前にウインドの先輩方からありがたい（？）お言葉を頂戴してからのバイトなので、デートプランを練るとか、どういう告白にしてやろうか（意訳：どういう風におどかしてやろうか）など、考え事は色々尽きないわけだが、

それでもバイトという社会生活を営む上で大学生にとって非常に重要な意味を持つこの行為は避けて通ることができないので、仕方なく向かっているのである。

などと1年間ちょっと文章を書いていなかった作者の思い出しを兼ねた前口上をつらつらと書いている間に”空”に着いたわけだが、

「えーっと、あの、」

「あ、馨じゃん。今日バイトだったんだ」

「おう、灯ちゃんいい子だねー。思わず私も抱きしめたくなっちゃう」

なんだこれ。

「…いやもうよくわからないんでとりあえずゆっくりしてってください」

という事態である。
突発的なイベントに弱い俺の精神については今後どうにか鍛えていければと思っているが、毎度毎度やってくるこの手のイベントにはやはり上手く対応できる気がしない。
とはいえいつまでも入り口で頭を抱えているわけにもいかないので、裏に入ってエプロンを装着し、カウンターの中に戻ってくる。
その頃には二人の会話も変わっていて、
「そうなんですよ馨ってばホント鈍感でー」
「あー、やっぱりそうなんだね。　前からそうなんじゃないかなーとは思ってたよ」
「だって、やっとですよ？　やっとデートですよ？　出会ってもう半年以上経って告白まがいのあのライヴがあってからももう2ヶ月以上経ってからのやっとですよ！」
「いやまぁ男なんてそんなもんだと思うよ？　意外と自信が持てないのよ」
「そうなんですかねー。　馨にはもっと自信を持ってほしいですねー」
「いや、あの、そういう話を本人の前でするのはどうかと思うし今僕すごく働きづらいんですけど」
いや、ほんとに。
「あ、ごめんよ、なんとなくそんな話になっちゃってさ。　タイミング的にも馨が来たところだったし」
「というかシラフでそういう話を出来るのはなぜ？」
本当に不思議に思ってつい聞いてしまったが、返ってくる答えなんて決まりきっている。
「逆にシラフで出来ないのはなぜ？」
ですよねー。本当に女子ってよくわからない。

＊＊＊

そうこうしてるうちに結構時間も過ぎていき、もう夜と言っても差し支えない時間になった。

智代はその後も灯と一緒に『馨は乙女心を理解していない』トークを延々と繰り返した後、夕方くらいに「じゃぁ私練習があるから」と言って去っていった。

そのあとはお客さんが急にどっと入ってきたこともあって、俺は忙しくなり、灯はそんな俺を見ながらコーヒーをお代わりしたり、店に流れてる音楽に身を委ねたりしていた。

そんな頃に今度は練習帰りと思われるＳＬＥＥＫの面々が入ってくる。彼らもたいがいこの店の常連客である。

「よーっす仲直りしたかー？」

「開口一番それか」

新見は相変わらず新見である。

「まぁそれなりにな」

「そうかー、いやよかった。　主催者と一番目立つバンドのボーカルが仲悪いとかイベントとしてどうなの？って感じがするしな！」

「おい」

「ん？」

「俺は主催者じゃないと何度」

「え？　主催者じゃなかったの？」

と、灯が言ってくる。　あれ、俺たしか説明したよね？

「灯さん、あなたは俺の話を一切聞いていないんですかねー？」

「いやー、色々あって忘れちゃいましたー」

「……すみません…」

ここでその話を出してくるあたりやはり根に持っているのだろう

か…そんな意地悪な女の子ではないと信じたい。　あくまで「信じたい」なので実態はわからない。
「ん？　色々？　え、なに？　詳しく！」
新見が調子に乗ってカウンターに身を乗り出してきた。　なぜかそれを見てＳＬＥＥＫの面々もカウンターに身を乗り出してくる。
何なんだお前ら。
「いや、すみませんノーコメントで」
「いやー馨ったらまた私をいじめることに快楽を見出しちゃってさー」
「余計なこと言わないでくださいよ灯さんお願いですから！？」

＊　＊　＊

「馨が悪い」
「でしょ？」
「馨さんが悪いですね」
「でしょでしょ？」
「……」
本日二度目です。　なんだこれ。
なんで俺はバイト先でお客さんを相手においしいコーヒーをいれつつ、こうやってなじられなければならないんだろうか。　こんなに理不尽なことが世の中にあって良いのだろうか。　いや、良くない。　断じて良くないはずである。
良くないはずなんだけど、こうやってなじられているという現実。
端的に言って辛いです。
「でも良かったね、灯ちゃん。　最終的には馨から『デートしよう』なんて言葉を引っ張り出すなんて」
「いやー、まさかあんなに上手く行くとは」

「しかも計算かよ！？　本人の前でそんな大暴露しないでよ！？」
「しまった」
というような会話をする度に、ＳＬＥＥＫのやつらは俺と灯をチラチラ見ながらニヤニヤと嫌な笑いを向けてくる。　ものすごく気になる。　そんなに楽しいのだろうか。
でも、灯とこういう会話を出来るようになったというのは確かに成長で、これは間違いなく灯が正直になってくれたことと、俺がちょっと頑張った結果なのだ。　頑張るためのきっかけを智代がもたらしているという事実さえなければ最高なのだが、それはそれである。
そして「とりあえず働いてほしいなー」という店長からのテレパシーも伝わってくる。どうやら店もまたそれなりに忙しくなってきているらしい。　普段ならお客さんなんて片手で数えることが出来る程度のくせに、今日はどうやらそれなりに盛況らしい。　珍しいこともあるもんだ。
「悪い、ちょっと忙しいらしいから普通に働いてくる」
「なんか今日珍しいねー。　頑張ってね」
「おう」
ここの部分の会話だけだと、なんだか普通に付き合ってる彼氏彼女の会話のようにも思えるが、断じて違う。　形式上はまだ友達以上恋人未満なのだ。

＊　＊　＊

「とか考えてるんだろうなー、馨は」
「さすが嫁はわかってるね」
と、新見くんが言ってくる。
「いや、さすがに分かるよ。　だって馨だしさ」
そう、馨だから。単純にわかりやすいのだ。
「だね。　馨は確かにとんでもなくわかりやすい性格してる。　だから色んな人に好かれるんだろうけど」
「そうだねー」
と、なんとなく返事を返すと、新見くんは不思議そうな顔をしてきた。
「ん、どうしたの？」
「いや、なんか灯ちゃん、変わったなー、って思って」
「え、そう？」
自分でもわからない心境の変化でもあったんだろうか。と思って、今の新見くんの言葉を反芻してみる。
「……あー」
そういうことか。
「うん。今までだったらたぶん、俺が『色んな人に好かれるんだろうけど』って言った段階で食いついてきてた」
「そうかもね。でもなんか、そういうのどうでも良くなってきちゃって」
と、本音を暴露する。新見くんが相手だと意外と色々なことを話せる。　きっと新見くんが余計なことを私の知らないところで口走ったりしない性格で、かつそこに関して信頼の置ける人間だと思えるからだろう。
「ふーん……なんだ、うちらが心配することなんて実は何もなかったんじゃんか」
「ん？どういうこと？」
何か心配されるようなことを……たくさんしてるような気もするけど……していたんだろうか。

「いやね、ウインドの幹部の、純さん、だっけ？とも話してたんだけど、結構馨並に、灯ちゃんも心配な性格をしてるんだよねー、って。でももう心配さそうだわ」
　こんなところで純さんとつながりができていたなんて思いもしなかったけど、たしかに最近ＳＬＥＥＫとうちのウインドは親交があるので、結構主催者とその周りの人間も知らないうちに交友関係が生まれているのかもしれない。実は結構馨の願っていたことが現実になっているんじゃないか。
「だって、灯ちゃん、ちゃんと馨のことを信頼できてる気がする」
「…馨を、信頼？」
　前からしてるけど。
「あ、いや、してなかったとかそういうことじゃないんだ。ただ、心の底からっていうか。ほんとうの意味で自分のすべてを預けられるとか、そういうレベル？」
「んー……」
　ちょっと考えてみる。
「そうかも。たしかに！」
　言われてみればそうだ。最近になってようやく、自分のことをまるごと預けても大丈夫そう、だと思えるようになってきた。そのきっかけが自分のヤキモチだったなんて恥ずかしくて誰にも言えないけど。
「でしょ？」
「いやー、お恥ずかしい限りで。ご迷惑をおかけしましたです」
　なんだか突然恥ずかしくなってきた。悶絶ものだ。『お母さんも若い頃は色々やったのよー』とか言って未来の子供に黒歴史として語り始めるくらいひどい話である。
　ということを考えると余計に恥ずかしくなってきた。お母さんとか。お父さん誰だよ。
「……馨？」
「は？呼んだ？」

「いや！呼んでない！呼んでないよ！？全然呼んでないから！！」
「どうした灯キャラ崩壊してるぞ」
「大丈夫全然大丈夫だからホント大丈夫心配しなくていいよほら仕事仕事！」
だめだ馨を直視できない。
そんな私を眺めてニヤニヤしている新見くんに、思いっきりおしぼりを投げつけてやった。

act 2 ― 11（後書き）

すみません思い出しつつ書いてるので一人称の呼び方とか各キャラの性格とかがブレブレかもしれません。
たぶん今後は今回の話のキャラ付けで書いていくんじゃないかなーと思ってます。時々読み返してるので大きなズレは出ないように出来てるかもしれませんが…

act 2 ― 12

スタジオの部屋の二重扉を開けようと、ノックをする。すると気付いてくれた一番手前のギターが、中で音を出しているメンバーに対して音を止めるように声をかける。

こういう風に他の部屋に対して爆音という迷惑をかけないようにするのはバンドをやってる人間としては当然のことのはずなのに、最近はそういうことをやらない人が多い。

ということをスタジオのスタッフに話したことがある。すると、『まぁまぁ、そんな目くじら立てて怒るようなことじゃないでしょ。ものすごい迷惑してるわけでもないし、誰だってやっちゃうことだよ』

という返事をもらったんだけど、いやいやロビーでバンドについて話し合ってる時に爆音が聞こえてくるとか迷惑以外の何者でもないだろうとも思う。

とはいえそういうことって自分でやられないとわからないことでもあるので、確かにこっちからグチグチ言っても通じないのだ。

というようなことを考えながら部屋の中に入っていく。

「おはようございまーす」

「おはよう」

「今日は4時間やったな、結構ガツガツ出来そう」

「ですね。今日中に1曲仕上げるつもりでやっちゃいましょう」

というような会話をしながら、自分の楽器を取り出す。個別のチューニングなどを済ませ、全員の楽器の音程を合わせる。このあたりは管楽器だろうか弦楽器だろうが関係なくどんなミュージシャンでも共通だろう。

そして、

「ほんじゃ、とりあえずアレ、通しますか」

と、ベースの例のいぶし銀な兄ちゃんが言ってくる。アレとは、

俺が創立祭の時にやったアレである。
「良いんですけど、もう一回聞きますね。ほんとにアレやるんですか？あんな荒削りな曲…」
そう、あの曲は荒削りなのだ。そもそも突貫工事的に作った面もあって、まだまだブラッシュアップが足りない。
「荒削りなのがいい。無駄に小奇麗な曲なんかは、そこらのバンドに適当にやらしときゃええんや。やっとってもつまらんしな。うちらはもっと荒削りな曲で魂に響くようなことをやりたい」
「響きますかね」
「そこはほれ、なにしろお前の作った曲やから」
「はぁ、そうですか」
正直なところ、この曲でどこまでオーディエンスの心に響くかはわからない。なにしろ不特定多数の人間に向けたメッセージを歌う曲ではなく、ただ一人の人のためだけに書いた曲だから。
ただ、最初から不特定多数の人間に対して伝えたい思いがあって曲を書くのと、最初からただ一人のためだけに曲を書くのとでは、伝わり具合がぜんぜん違うのも確かに分かる。
「じゃぁ、まぁやりましょうか」
「うむ」
そうして、”風”の練習に入る。演奏のクオリティはもちろん圧巻の出来で、もしかして練習なんて本当はいらないんじゃないかっていうくらいのレベルだ。
ＳＬＥＥＫと一緒にやった時よりもよりエモーショナルで、疾走感に溢れて、より丁寧なんだけど、なのにこの曲の荒削りなところが全面に押し出されている。
正直、オーディエンスとして客席で聞いてみたい、と思ってしまうほど。
置いていかれないようにするので精一杯で、いつもよりも力を入れて演奏にのめり込んでしまう。
いつだったか有名なジャズミュージシャンが、

『上手くなるためには、常に自分がバンドの中で一番下手であるようにしなければならない』
という風に言っていた。今の自分がまさにそうで、バンドの中でも下手な方にあるがために、追いつこうと必死になる。努力する。
そうこうしているうちにいつの間にか追い越していて、成長している。
このバンドでライヴをやったあと、自分がどれだけ音楽的に成長しているのかが楽しみでしょうがない。だから頑張るのだ。
まぁ、練習中はそんなことを考える余裕なんてなくてただただ必死なんだけど。

＊　＊　＊

みんな合わせるのに一生懸命になっていたから、時間切れが迫っていて部屋の中にあるランプが点滅しているのにも気付かずにそのまま練習してしまっていた。
外から店員さんが「そろそろ時間だよー」という風に見ているのにやっと気付いて、
「やば、もう時間なんで出ましょう」
と言う。スタジオでの練習では時間は厳守しなきゃいけない。なぜなら、自分たちの後にはその部屋で練習する人達がいて、自分たちが遅れるとその人達の時間まで食いつぶすことになってしまうからだ。
「うわ、もう？とりあえず楽器とか全部ロビーに出そうや。出しちゃえばあとはどうにかなるやろ」
というわけで、大急ぎで楽器を外に出す。特にドラムが大変で、

そもそも他の人よりも機材が多いので、一人では運び切れない。最初に運び出した人がまた舞い戻ってきて今度はドラムを手伝うというのがよくある風景なのだ。
　しかしながら俺は楽器もそうだがノートとかペンとかと言った曲作りのための道具を出しっぱなしにしていたこともあって、細々としたものが結構多かったから、ドラムは手伝えなかった。
「遅くなってすみません」
「大丈夫だよ。ずいぶん集中してたみたいだね」
「えぇ、周りについていくので精一杯なんで」
　と、そこで不思議そうな顔をするスタッフ。なにか変なことを言っただろうか？
「いや、馨くんが『ついていくのが精一杯』って、どんだけ上手いんだろうって思って」
「もう、すんごいですよ。ライヴ見に来てくださいよ。絶対盛り上がるから」
「うん、了解。フライヤーできたら持ってきてよ。壁に貼っとくから」
「おぉ、ありがとうございます、助かります」
　なんて会話をしているうちに撤収も済んだらしく、みんなそれぞれの楽器をロビーで片付けている。このスタジオのロビーがそれなりに広くて本当に助かった。
「昔はこういうこと結構あったけど、久しぶりやな」
　なんて、ベースの人は言っている。
「まぁ迷惑かけちゃったのは申し訳ないですけど、こういうのも醍醐味ってことですかね」
「せやな、正直楽しいよな。みんなであたふたしながら片付けるのも、ライヴが終わったらいい思い出や」
　こういうライブハウスでやるようなバンドを組むまでは想像もつかなかったが、はたから見ていて『なんだか楽しそうだなぁ』と思っていたようなことは、実は自分でやってみると相当楽しいのだ。

バンドマンがバンドや音楽をなんだかんだ言いながらずっと続けていくのは、こういう楽しみから離れられないから、というのもあるのかもしれない。
などと考えていると、

「あれ、馨じゃん。練習？」

という、灯の声が聞こえてきた。

「ん？おう、灯も？と言ってもこっちは終わったとこだけど」
「あ、そうなんだ。私はこれからだよ。といってもあと1時間は始まらないけど」
「1時間？」
どういうことだろう。まさかとは思うけど時間を間違えたとかだろうか。さすがに1時間も時間を間違えるようなことはないと思うけど…
「いやー1時間間違えちゃってー。家出てから気付いたんだけど『まー確認してればいっかー』って思って出てきちゃったわけよ」
1時間間違えただけだった。
「そ、そうか…」
「あ、アホの子を見るその目！ちゃんとやることはあるんですからねー」
と言ってソファに腰を下ろして鞄の中から音楽プレイヤーを取り出す。大学に入ってから買ったと言っていたちょっと高めのイヤフォンをつけ、早速自分の世界に入っていったようだ。
手が表拍らしき拍子をとっているのを見て、なるほど、と思った。
その拍子はおそらく、今度のイベントでやる曲。かなり拍を取りづらい曲だと言っていたので、そのイメージトレーニングなんだろう。
「相変わらず熱心だなぁ」

熱心な上に飲み込みが早いので、この曲もきっと今日中には歌えるようにしてしまうんだろう。そのあたりの成長速度には智代も『あの子はほんと、すんごい早さでボーカリストとして名を上げるんじゃない？』舌を巻いていた。
「お前の彼女、ホント見てておもろいなー」
「だから正確には彼女じゃないですって」
「『正確には』ってなんやねん」
ははは、と笑いが起こる。やっぱり『正確には』とかそういう細かいところにこだわり過ぎなんだろうか。
「いやでも確かにそのとおりなんだからそれ以外言いようがないっていうか」
「みなまで言うな。大丈夫、うちらもそのへんは理解しとるわ」
どのへんを理解しているのかはよくわからないが理解していると言っているのだから大丈夫なはず、だろう。だと思う。気がする。ような。
何はともあれ、この話は一旦ここで終わるはずだった。が、しかし、灯の唐突な一言によって再加熱するのだ。
「あ、私来週どこでも大丈夫だからいつでも呼んでね、デート」
「デート？」「ほう、デートとな」「そんな面白そうな企画が」「是非詳しく」「いつ？どこに？何すんの？」「何ってお前そりゃ大学生だぞ」
「あの、帰っていいですか」
もちろん帰してくれなかった。

＊　＊　＊

「はぁ、疲れた」
『デートでどこに行くんだ』という詰問からなんとか逃れた俺は、その足でバイトに向かう。バイトという言い訳があって本当に良かった。あのままだとそのまま朝まで酒を飲みながらすごい勢いで根掘り葉掘り一方的に情報を搾取されるところだった。
というわけでカウンターの中でため息をつきながら今日も美味しいコーヒーをいれるために努力を怠らない。機材の整備をやってると、
「こんにちわー」
と言って、遥さんと覚さんがやってきた。
「いらっしゃいませ。今日は暇なんですか？」
いつものようにカウンターに座ってきたので、当たり前のようにブレンドを入れ始めながら聞く。
「んー、そうだね。たまたま休みの日が被ってたから、ちょっと遊んでひと息入れに来た感じ」
「なるほど」
つまりデートか。
「そういえばデートはどうなったの？ちゃんとエスコートしてあげなきゃ」
「なるほど。そっちに持って行くんですね。こっちでもか」
「こっちでも？」
「いや、なんでもないです」
この話をされない場所はこの街にはどうやらないらしい。大変遺憾である。
「日程とかどうなってる？場所は？」
「いやー、日程は来週中ならいつでも、って聞いてるんですけど、いかんせんどういうことするのかとかが全くわからなくて」
これは本当のことだ。デート、と言われても何をすればいいのか

全くわからないし、いつもみたいに普通に遊んでればいいんだろうか。でもそれってつまり遊びだ。デートと遊びって何が違うんだろう。

「あー、さすがだね。何かに全身突っ込んだ生活を送ってる男ってこういうふうになるんだ。こうじゃなくてよかったわ」

「それは褒められてる？」

「褒めてる褒めてる」

「そして俺は貶されてるんですかね」

「そうじゃないよ、今までしてこなかったんだから、わからなくて当然だなって」

「そうなんですよね。全然わからないんです。恥ずかしながら」

と言って頭を掻く。と、そこまでやってやっと気付いたことがある。

「今日って遥さんたちって、ずばりデートしてるんですよね？今」

「へっ？あぁ、そうだけど」

そう、目の前に、当たり前のように何度もデートしている人達がいるんじゃないか。

「そのコーヒー俺のおごりにするんで、どんなことするのか聞かせてくださいよ」

つまり、この二人は格好のサンプルであって、ここから情報を得ることができるんじゃないだろうか。

「いいけど、たぶんそんなに参考になるネタは引き出せないと思うよ？」

「それでも聞きたいです」

それに、ちょっと興味もある。この二人が普段どんなことをしてるのか、とか。

「んー、その時々でも違うよ。例えばウィンドウショッピングしてるときもあれば、ゲーセンに入って音ゲーをやってるときもあるし、カラオケで歌ってる時もあれば、なんとなーく入ったお店でお茶することもあるし」

「なるほどなるほど……ん？」
「あとはそうだねー、楽器屋さんで朝から晩までひたすら試奏し続けるとかもデートなのかな？そのへんどうなの？」
「いや俺に言われても」
「えーっと……あれ？」
「ね、参考にならないでしょ？」
そう、全く参考にならない。

なぜかというと、どれもこれも、いつもの俺と灯だからだ。

「つまり、君らは何も考えなくてもいいんだよ。自然体でそのまんまいつもどおり遊んでればいいのよ」
「……っていうこと、ですかね」
デートだから、と言って深く考え込んでいた自分が馬鹿らしくなるくらいに、ストンと胸に落ちてきた。

いつも通りでいいなら、いつも通り遊べばいい。
ただ、意識はいつも通りの遊びじゃなくて、デートなんだ。

綿密にプランを練ろうが、いつも通り遊ぼうが、結局俺は緊張しっぱなしなんだろうな、と考えながら、新しく入ってきたお客さんの分のコーヒーをいれるのだった。

act 2 ― 13

そして、数日が過ぎ。
ついに、デートの日がやってきたわけである。

さすがの俺もかなり緊張していたりする。
何を隠そうデートだと意識して遊びに行くのは初めてだし、いや確かに好きでしたよ、好きだったんだけどそれでも遊んでる間はもっと普通の仲の良い友だちっていう感じだったしだからこんなの初めてなわけで。
少々テンパりすぎのような気もするので、気を落ち着かせるためにも朝のコーヒーを飲む。
朝のコーヒーは目覚ましという意味も兼ねて多少濃い目に作るんだけど、今日に限っては目覚ましとしての意味は全くない。なぜなら起きた瞬間からすでにシャッキリとしているから。
まぁ、前日くらいから割と緊張気味であまり眠れなかったんだけど。
しかしコーヒーが美味しいという事実は全く変わらないので、なんとなく落ち着いたような気がする。気がするだけで実際には全然落ち着いていないんだけど。

「……ふぅ」

一応もう一回、今日持って行くものを確認しておくか。
そう思い、席を立つ。
窓の外の空は快晴で、今日も残暑が厳しそうだった。

＊　＊　＊

待ち合わせは午後１１時からにした。いつもみたいに軽く楽器屋で遊んだあと、ご飯でも食べる、という感じだ。
いつもどっちかが先に来て、片方は１００％遅れるんだけど、今日に限っては俺から遅刻するなんてことは出来ない。
というわけで気付いたらいつもよりも割と早めに来てしまった。具体的には３０分くらい早めに着いてしまった。
「早すぎるな…」
と呟きつつ、仕方ないからコーヒーでも飲みながらどこかで休憩していようかと思っていたら、

「やっほー」

とかいうこっちの気を削ぐようなゆるーい声で挨拶して来やがった。いきなりげんなりする俺。
「いやー、早いねー。今日は特別早いねー」
「お前もな」
「今日も暑いねー。でもいい天気になってよかったよかった」
なんて言葉を交わしながらふと気付く。
今日の灯はなんだかものすごく綺麗だ。
もともと化粧をする必要もないくらい端正な顔立ちだし、スタイルもそれなりに良いからオシャレをしなくてもかっこ良く見える、というずるい見た目だったのに、そこに化粧とオシャレというエッセンスが加わると、もうなんていうか、無敵だ。
はっきり言って１００人男がいたら９９人はすれ違いざまに振り返ると思う。俺含め。
上は白と黒のタンクトップを重ねて着ていて、下は7部丈のカー

ゴパンツ。足元はシンプルな皮のサンダルで、胸元にもこれまたシンプルなネックレス。一見して某大衆向け量販店で買い揃えました、とでも言うかのような出で立ちにも関わらず、そのシンプルさが逆にオシャレ具合を高めている。
化粧だって、いつもよりも少しだけ濃い目とはいっても、元々の素材の良さをフルに生かしたナチュラルメイク。それでいて嫌味が全くない。
いや、軽く感動しているからもう一度言うが、ものすごく綺麗だ。
「今日なんか気合入ってる？」
なんとなく気になって聞いてみる。
「え？いやそんなことないけど、まぁどうやら馨さんも結構気合入れてるみたいだしねー。ここは張り切っとこうかなーって」
と、少しはにかみながら返事をしてくる。どうしようかわいい。
「それで、今日はどうするの？いつもみたいに遊ぶ？」
「おう、とりあえず楽器屋に行こうぜ。欲しいスコアがあるんだ」
そう言ってそのまま楽器屋に向かおうとする。
と、そのとき、

灯の右手が、俺の左手を握ってきた。

「うおっ」
軽くびっくりしてしまう。当たり前だ、今まで一緒に遊んでてそんなことされたことはなかったからだ。
もしかしたら緊張していたから、というのもあるのかもしれない。
「どったの？」
「や、なんでもない…」
緊張しててびっくりしてるんです。

ただ、それ以降の灯は至っていつもどおり、なんにも変わらなかった。

ちょっとした事でもツボに入って笑うし、面白そうなスコアを見つけては指を動かして練習モードに入るし、カラオケではいつもどおりエコーを切って本来の自分の声を響かせようとするし、コーヒーを飲めば「馨のいれたやつのほうがおいしいかも」とか言ってきたり（前は俺がそれを言ったら叩いてこなかったか？）、まぁつまりいつもどおりだった。

大抵の場合手を握ってること以外は。

でもそれにいつまでも緊張するほど俺も純粋じゃないので、ある程度時間が経てばもう慣れっこだ。そのくらいだったら包容力ある広い心を持ってして全力で迎え入れてやろうではないかという気概でどうにかした。

ただし緊張してることに変わりはないので（手汗かいてないかな）とかビクビクしていたのはないしょである。

「馨、緊張してるよね」

「そんなことはないぞ」

いきなり言われたので軽くドキリとしたが、なんとか普通に返した。

「ほら、緊張してる。いつもだったらもっと表情がのっぺりとしてるよ？」

のっぺりってなんだ、のっぺりって。

たしかに割と無表情な方だけど、そんなに普段から感情がわかりづらそうな表情をしているつもりはないぞ。

「いや、暑いから」

「……ふーーーーーん」

「なんだよ」

「べっつにー」

と言っていきなり手を離して歩き始めた。もう本当に、なにがしたいんだろうかこいつ。

両手を広げて道路の境界ブロックの上を歩いている。たしかにそ

れなりにブロックの面積は広いから割と安全なんだけど、
「あ、こら、危ねぇぞ」
という具合に、いきなり車がギリギリのラインを走り去ることもあるから要注意なのだ。
今だって俺が引っ張ってなかったら片腕が巻き込まれてたかもしれないんだ。
そんなことを考えていると、
「お、やっと自分からエスコートする気になった？」
「は？」
なんて言われた。そこで初めて気付いたんだけど、今の状況では俺が灯を無理やり引っ張るしかなかったので、必然的に俺から手を握る形に……
「おぉう、悪い。つい」
と、パッと手を離す。それはそれで割と危ないんだけど、その時はそれよりもまず手を離すという無意識行為が先立った。脊髄反射というやつである。
「や、いいよー」
と言って、結局また灯から手をつなぎ直す。
なんというか、本当に俺ってば意気地なしかもしれない。
「…悪い…」
「えっ、なんて？」
「なんでもない」
聞こえてなかったようで安心した。なんとなく今、ものすごく情けないことを言ってしまっていたような気がするから。
「まぁ馨だしねー」
ばれてるし……

＊　＊　＊

「で、いつも通りならこの後は普通に帰るはずだけど？」
そう、一日遊び倒してもう夕方である。
昼も食べ、楽器屋も行き、ゲーセンも行き、カラオケも行くという強行スケジュールだったけど、まぁいつもそうなのでどうということはないのだ。
……今日に限っては、街の至る所に明らかに知り合いっぽい感じの大きめのマスクの人とか大きめのサングラスの人とか大きめの帽子の人とかがコソコソしてたけど、俺は１２０％スルーすることで回避した。もちろん明日とっちめる。

「あ、今日って夜も行ける感じ？」
「え、むしろ夜なにもしないつもりだった？それはさすがにないわー…」
あからさまに落胆した（ふりをした）灯をみて、
「じゃあライヴだ」
と言った。
灯は「おっ？」という表情をして、
「どんなどんな？？」
と、興味津々に聞いてきた。ほんと、こういう子でよかった。
「今日はだな、スカ系だ！」
そう、いつも通っているライヴハウスの企画で、色んなところのスカコアやスカパンクのバンドを集めた、ものすごいにぎやかな感じのイベントをやるのだ。
中にはキーボードなんかもいたり、ビッグバンドみたいになってステージに乗り切らないバンドもある。そこは千差万別で、バランスが良くなるようにブッキング担当が頑張ったという話だ。

ということを話してやると、
「やばいすごく楽しそう。早く行こ！」
と、ノリノリで手を引っ張ってきた。自分も近々同じようなことをやるから、親近感もあるのだろう。
「わかったわかった」
とりあえず今日一番喜んでくれてそうなのだけ確認できて、俺まで嬉しくなってきた。
開演まではまだまだ時間があるけど、知り合いがいるかもしれないということで、先に入って見ることにした。

＊　＊　＊

「いやー、すごかったね！」
会場から出るなら、灯はテンション高くそう言った。
たしかにすごかった。それぞれのバンドもすごく上手かったけど、それ以上に会場の雰囲気が良かったのだ。
もちろんスカ方面の音楽が好きな人たちが集まっていた、というのもあるだろう。でも、明らかにそうじゃない人たちまで、最終的にはみんなで仲良く踊っていられる、そんな雰囲気が最初から最後まで続いていたのだ。
ちなみに一番激しかったのは曲中にキメが入るごとにダイブする人が出てくるバンドで、常に誰かが人の上に乗っかって波乗りしてるような状況だった。もちろん前の方はモッシュピットになっていて、そこに灯を連れてなだれ込む勇気は全くなかったけど。
「あの前の方すごい楽しそうだった！次は行」「怪我するからやめなさい」

絶対言うと思ったので先に止めておく。
「えー、いやアレは行かなきゃ損だって」
「俺一人なら行ってたけどな、灯を守りながら暴れるのは無理だから行かなかったんだ」
「…あら、ありがとう」
「……どういたしまして」
ちょっと恥ずかしいセリフだっただろうか。正直今は気分が高揚してよくわからない。
よくわからないけど、なんとなく今日言わなきゃいけないことは言えるような気がしてきた。
「もうちょっと時間あるよな」
「えっ？あぁ、うん、大丈夫」
なんだろう、灯が午前中の俺みたいになってる気がする。髪の毛とかくるくるいじりだして落ち着かないっぽいし。
ちょっといじめたくなってきた。
「よし、ちょっとこっちに来ようか」
だから、今度は逆に俺がびっくりさせてやるのだ。
「わっ、手…」
「どうかしたか？」
急に手を握られて戸惑っている灯を、内心（かわいい）とか思いながらほくそ笑む。
「…いや、なんでもないけど」
「よしじゃぁ行こう」

事前にとあるカップル（そのときはバカップルだった）からデートスポット情報を入手しておいて良かったと、心から思う。
コーヒー一杯じゃ申し訳なかったな。今度ランチおごろう。
そんなことを考えながら、とある公園にたどり着く。

実はここは冬になるとクリスマスツリーが飾られて、ものすごくきれいにライトアップされるんだけど、今はもちろんクリスマスじゃなくてただの夏休みなので何も無い。
何も無いんだけど、逆に何も無いのが良い。人がいないからだ。
昼間は遊びに来る子供とかが多いけど、夜になるととたんに程良く人気がなくなる、とてもムードあふれる場所になるのだ。
……という受け売り。もちろん俺は今日始めて来た。ちなみに足元にはちょっとオシャレっぽいランプみたいなライトがあるので真っ暗というわけでもない。
「…へー、馨もこういうところ、知ってるんだ」
「ぶっちゃけ初めて来た」
「ぶっちゃけるの早いね！？」
「灯がツッコミとか珍しいね」
「突っ込ませてるの馨だけど！」
「ツッコミ上手いなぁ。今度からよろしく」
「これ、結構疲れるんだね…馨がなんで疲れてるのか分かったわ」
「わかってくれてありがとう」
なんてくだらない話を出来る程度には俺も灯も落ち着いてきているらしい。まぁきっと夜の力だろう。そうに違いない。
だから、俺はこの話を切り出すんだ。
「灯」
今日一番真剣な声を出す。
灯の体がビクッと驚くのが見える。
さぁ、大勝負の時間だ。
「大事な話があるんだ」

act 2 ― 13（後書き）

すみませんすみません一回でいいからこういう引きをやってみたかったんですすみませんす（略

次回は、一話ずっと告白話で終わるくらい、濃ゆい話にします。

act 2 ― 14

「今日のライヴ、すごくよかったよな」

と、いきなり本筋とはあまり関係ない話題から入った。
灯も少しキョトンとしているような気がするけど、でもここから始めないといけない。
今から話す内容は、俺のこれからの人生だから。

「なんか、一体感っていうのかな。バンドもお客さんもスタッフも、全員が全員、本当に楽しんでた。一方通行な『発表会』じゃなくて、パーティーみたいだった、って言えばいいのかな」
「うん」
ひとまず話を聞いてくれる態勢になったようなので、適当なベンチに腰掛ける。灯も素直に俺の隣に座ってきた。
「あぁやって、初めてあったような人たちが、みんなで同じ空間を楽しんで、笑って、幸せになれるって、本当にすごいことだと思うんだ。残念だけどウインドの演奏会じゃそうはならない。あの空間はある意味、奏者である俺たちが一生懸命頑張って、それに乗っかってくる感じでお客さんも楽しんでる」
自分たちの力で作るステージも、それなりに楽しい。だけど、やっぱりお客さんとの距離感はあるし、その場のみんなで楽しんだという実感はあまり得られないような気がする。
「俺は、みんなで作りあげたい。そこにいるすべての人と一緒に、最高のパフォーマンスと最高の音楽で最高のステージを」
これは俺にとってのミッションだ。一生涯かけてでも達成すべき目

標。
「そのために今度のイベントに対して、全力で向き合うことに決めた。前から考えてたことだけど、今日のライヴを見て改めてそう思った。やらなきゃいけないんだ」
「…うん」
そんな俺の独りよがりで何を言っているのかもわからないような独白にも、灯はちゃんとついて来てくれる。
「音楽は趣味、とか、やっぱ無理だったわ。音楽は俺の人生そのものだった。そらそうだよな。生まれた時から音楽聴き続けてきて、楽器もやり始めて、自分から楽器をやる人をまとめる役になって。そんなの、音楽から離れられなくなるに決まってる」
冷静に考えてみたらそうなのだ。俺はずっと誤魔化してきていたけど、心の底ではきっと理解していたんだろう。

神矢馨から音楽を取ったら、それはもう神矢馨という人間ではない。

「あー、なに言ってんだろうな。自分でも良くわかんねぇや。なんだ、つまり今度のイベントにプレイヤーとして参加してくれる灯にはすごく感謝しててだな……」
頭をかきながら自分でもわかっていないもやもやを吐き出しながら、次の言葉を考えていると、

「つらくないの？」

そんなことを、灯は言ってきた。
「つらくないはずない。だって馨、今すごくつらそうな顔してる。

もっと言えば、そんなに悩んでる姿はみたことない。これまでの自分が考えてきたことを覆すのが…」
そこで切って、ハッキリとこう言った。

「これまでの自分を否定するのが、つらくないわけないよ」

「……」
「なんで？そんなに大変な思いをしないと出来ないことなの？馨、前に『コーヒーが出せてライヴが出来る店を出すのが夢だ』って言ってたよね。それを叶えたら、今の目標も達成出来るんじゃないの？馨がどこを目指してるのか、わからないよ」
たしかに、その通りだ。俺の夢を叶えれば、多分『ある程度は』達成できる。
きっと世の中にカッコイイ、だけどマイナーなバンドを送り出せるし、その気になれば自分でレーベルを作ってしまってもいいだろう。きっとそれも楽しい、実に有意義な人生なはずだ。

でも。

「それじゃあ、結局悔いが残るんだ」

「悔い？」
そう。
「何に対しての？」
「自分に対して」

結局、そこに行き着くのだ。
「俺は、自分でやりたい。最高のステージを作り上げたい。最高の仲間を作りたい。最高の音楽を届けたい。そうやって出来上がった、そこにいる全員の心からの笑顔を見たい。そのためには、そんなちっぽけな夢じゃ駄目なんだ」
それは果てしなく長い道のりで、果てしなく高い場所を目指す、とてつもなく辛い旅だ。
でも、辿り着くことが出来たら。
そこは、どんなに楽しい場所だろう。
「だから俺は全力を出す。出し切る……こんな感じで答になってるかな」
「……うん、わかった」
と、なぜか灯が泣きそうな表情をしているのに気が付く。あれ、何かしただろうか？
「…えっと、なぜ灯さんが泣きそうになってるんですか？」
「だって…馨がやっと、自分に正直になれた気がする」
と、その辺りまで言ったところで、完全に防波堤が決壊してしまったらしく、俯いて手のひらで顔を隠してしまった。
だから表情はちゃんと見れなかったけど、なんとなく灯は笑っているような気がして、これは嬉し泣きなんじゃないだろうかと思った。

＊　＊　＊

とはいえ男女が二人きりでいるときに女の子だけが俯いて涙を流しているというのははたから見て非常に具合の悪い構図である。と、話しているうちに冷静になってきていた俺は考える。どう考えても危険な状況である。今日なんか周りには大きめのマスクとかサングラスとか帽子とかで顔を隠したどう考えても知り合いな大きい子供

がたくさんいるんだから余計にまずい。
「ちょ、ちょっとまて灯、泣くな。今は泣くな。非常によろしくない」
「だって、だってぇ」
「わー火に油注いだ！？いやこの場合決壊したダムにゲリラ豪雨か！？」
また自分でも何を言っているのかよくわからなくなってきた。
「何でもいいから泣き止んでください…お願いだから…」
「……」
あ、今すごく考えてる。『何してもらおうかなー』とか絶対考えてる。出来ればお金が絡むこと以外でお願いしたい。ないわけじゃないけど使いたくない。
そうしてしばらく考えた末に、灯はこう切り出してきた。

「……よし、わかった。じゃあ、告白してよ」

「…あ」
あぁ、なるほど。
「告白するためにわざわざいつもの遊びを『デート』とか言っちゃって、せっかくおしゃれな格好までして、普段ならあんまり頑張らない化粧だってしっかりして、ガラにもなく手とかつないでみたりしちゃったりしてそれなりに頑張ってたのに、」
そこで灯は一旦声を止めて、俯く。そして、
「ここにきてただの独白で終わるとか……許されると思ってんの？」

と、笑顔で言った。

「さ、さらっと言うタイプとしっかりいうタイプのどっちがお好み？」

怖すぎる。

初めて本気で灯のことが怖いと思った。いや、この笑顔は怒ってるとか悲しんでるとかではなく、間違いなく想像を絶する罰ゲームを思いついた時のものだ。ここで何もしなかったら多分死んだ方がマシなんじゃないかと思うようなことをされるに違いないと、よくわからない第六感が告げている。

「そんなことまで教えないとわからないのかなこの木偶は」

「おまえ今結構ひどいこと言ったからね！？」

「なんでもいいよー早くー」

はーやーくー、と子供のようにぶーたれる灯。ムードあふれる薄暗い公園。そして途方に暮れる俺。

シュールな笑いがこみ上げてくるような光景である。

「灯。付き合おう」

だから、笑ってしまいそうになる前にとりあえずぶーたれる灯を止めようと思う。

「…へ？」

「え、いやだから付き合おうって」

「あ、あぁ。え、そんな唐突？」

なぜかわからないけどあっけに取られている灯。そしてその直後、

いきなり顔が真っ赤になっていく。
「え、うそ、ちょっと待って心の準備が」
そんな色々と固まっている灯のことを笑いながら、
「じゃあもう一回言ってやろうか」
そう言う。
「いやだからすぐじゃなくて」
「灯、俺はお前のことが好きだ。付き合ってくれ」
今度は頭から煙が出てきそうなくらいに耳まで真っ赤になった。そんな様子が面白くて、思わず笑ってしまう。
「灯、顔真っ赤だぞ」
「そんな、そんなの馨が急に『好きだ』とか言い出すから！」
「言えって言ったの灯だけど」
「そうだけど！そうなんだけど……！！」
と、突然灯の目から涙がこぼれる。そうなると今度は俺が慌てふためく番だ。
「え、どうしたいきなり？」
「あ、あれ？なんか急に…どうしたんだろ…はは、わかんないや」
うつむいて手の甲でひたすら目を拭っている。
そんな姿を見てかわいいと思ったのか。その感情は言葉に出来ないものがあってうまく伝えることが出来ないけど、とにかく感情のままに、俺は灯の頬を撫でていた。
「灯……泣き顔とか似合わないぞ」
「……うっさい。泣かしたのは馨でしょ」
「うん、ごめん」
「ほんとに、どうしてくれるのさ」
「だから悪かったって」
そんな会話を繰り返す。きっと草葉の陰で（勝手に）見守ってくれている大人げない大人たちはハラハラしていることだろう。シュールと言えばそんな人たちもいたんだった。

まったく、俺ららしい物語だ。

「……やっと落ち着いてきた」
「待ちくたびれた」
「だから馨のせいだって……はぁ、もういいや」
ため息とともに、諦めの言葉を口にする。
「あぁもう、せっかく頑張ったお化粧がぐちゃぐちゃだよ。これじゃ顔向けることも出来ないじゃん」
「大丈夫だろ、化粧なんかなくても綺麗なんだし」
「ちょ、いきなりなにさ！？ほめても何も出ないよ！？」
「思ったこと言っただけなのに…」
でも言われて嬉しいのか、ちょっと顔がほころんでいる気がする。
言って良かった。
「さっき、ありがと。すごく嬉しい」
「……おう」

静かな夜。残暑が厳しいとはいえ、秋を感じさせる涼しい風が吹く。
ようやく、俺と灯は、正式に付き合い始めた。

「いやっほおおおおう！！！！」
「やばい感動なんやけど！！」
「ちょ、静かにしてよバレるでしょ！？」
「もう遅いと思うなぁ……」

これさえなければ、最高に過ごしやすいサークルなんだけどなぁ……

act 2 ― 14（後書き）

流れを考える前にオチだけ思いつきました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7711i/

festa musicale

2011年8月24日03時18分発行